
IS 機械の翼

kikiyuyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 機械の翼

【コード】

N9920S

【作者名】

kikiyuyu

【あらすじ】

「今度こそ大切な人を守ってみせる」そう決意したある少年の話
初投稿で至らないことが多々あると思います。がよろしくお願
いします。

プロローグ

プロローグ

???side

とある家の前で二人の少年と少女、それとその家族と思われる人たちがいた

少女「うう、ぐすつ、えぐつ、本当に行っちゃうの?」

少年「しょうがないだろ、父さんの仕事の都合でどうしても行かないといけないんだから」

少女「ぐすつ、ねえ・・・またいつか会えるよね?」

少年「ああ、絶対また会えるさ」

少女「絶対・・・絶対だよ?」

少年「ああ・・・絶対だ」

そう言つて少年と少女は分かれた

だが二人は知らない

この二人の再会が少々特殊な形でなされることを……

プロローグ（後書き）

はじめまして ききゅゆ です

書いてみたけど・・・って感じですがよろしくお願いします

感想やアドバイスをもらえるとうれしいです

プロローグ2 運命の出会い(前書き)

超駄文・・・・・・・・です

プロローグ2 運命の出会い

「いったい、何が起きたってんだよ……」
燃え盛る炎と瓦礫の山の中を一人の少年が足を引きずりながら歩いていた

少年の名は 柳幻一郎 14歳

背丈や顔の感じからして高校生のようにも見えるが実際はまだ中学校にあがったばかりだ

髪は黒く、瞳の色はエメラルドグリーンと言う変わった特徴を持っているが立派な日本人である

なぜ彼がここにいいのか言っていると父親の仕事の都合で家族全員で訪れていたのだ

その仕事と言うのも実はIS関係でしかもかなり偉い人らしい（詳しく知らない）ので実質この土地で4回目の転校をしている

そしてそろそろこの生活にも慣れてきたところに突然何者かの襲撃に遭い町ごと炎で焼かれてしまったのだった

閑話休題

幻一郎 side

おいおい一体何がどうなってるんだ?! 突然爆発があったと思ったら空からなんか降ってくるし、気づいたら町がこんなだし

幻「一体誰がこんなことを? いや、それより早く父さんと母さん、妹達を見つけないとツツ、ゲホツ、ゲホツゲホツ!!」

しばらくしたとき

しつかし・・・酷いなこれは・・・町全体がやられたのか？ホントにだれが「だッ・・・誰かッ・・・」？！声が聞こえた！！しかも今のは？！・・・

幻「父さん！！何処だ？！何処にいる？！」

父「こッ、・・・ここだあッ！・・・幻一郎！！」

？！見つけた！左前の瓦礫の下に急いで駆けつける！！

幻「父さ・・・？！！」

父「よう・・・げッ、幻一郎ッ・・・」

見つけた父さんは全身血だらけで呼吸も浅かった・・・隣にはすでに息をしていない母さんがいた

幻「ッ！！、今助けるからん「無駄だあ・・・よせ」？！どうして？！諦めんな！！」

父「おれッ、はッ！　ハアッハアッ！、もう助からんッ」

そんな・・・ふざけんな！！まだッ、これからも家族みんなで楽しく暮らすって言ってたじゃんか？！！　それが・・・なんでこんなことに・・・「幻一郎」ッ！？

父「こッ、これを」

スポーツ・・・サングラス？？

幻「これは？」

父「こんなことしか・・・お前に・・・してやれない・・・父親をッ・・・許してくれ・・・ぐッ！！」ガクッ

幻「そんな・・・父さん！！父さん？！・・・父さん、母さんッ・・・」

くそお・・・くそおおおお！！なんで？！なんで父さんと母さんが死ななければならない？！！

・・・ッは！？そうだ！まだ妹達が見つかってない！！探さなくちや！！

俺は妹（エリカ、桐葉）と弟（翔）を探して走り出した・・・

翔^{しょうじ}side

僕は未っ子の翔

僕はエリカお姉ちゃんと桐葉お姉ちゃんと一緒に遊んでただけだと突然、ドカーン！！ って音がしたて次に起きたら周りがもう熱くてポロポロで苦しくて・・・お姉ちゃん達がいらないことに気づいて探してみたら・・・

そこには・・・血で真っ赤になったお姉ちゃん達がいて・・・

翔「ツ？！お姉ちゃん！！」

駆け寄つてみたけど・・・もう二人とも息をしてなかった・・・

翔「そんな？！エリカお姉ちゃん？！桐葉お姉ちゃん？！やだよお・・・一人にしないで・・・」

助けてよお・・・お父さん・・・お母さん・・・

お兄ちゃん・・・

幻一郎side

幻「エリカ！！桐葉！！翔！！！！どこだあ！！何処にいる！！」
くそう！！見つからない・・・一体何処に？それにしても・・・このサングラスは一体？

ドカアアアアアアアアアアアンンンンン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

幻「おおおい??!!!!なんだなんだ??!!!!」

爆発??!!!!どこから?!ん?あれは・・・人が飛んで攻撃している?!!!!まさか・・・??!!!!

物陰に隠れて確認してみると・・・

幻「インフィニット・・・ストラトス?!!!」

まさかそんな?!兵器への運用は禁止されているはず!どうして?!

「共に歩み続ける人類を抹殺しての理想郷など愚の骨頂！」

「強者など何処にもいない！人類全てが弱者なんだ！」

「そうだ・・・未来をつくるために・・・オレたちは、変わるんだ
あああ！！！！」

「分かってるよ・・・だから世界に人の心之光を見せなけりゃなら
ないんだろ！！」

「ガンダム！天にのぼれーっ！！」

幻「ハアツ！ハアツ！・・・ツ！、ハアツ！・・・ガン・・・ダ
ム？　これは？、ん？」

キュイイイーーン

ピッ

【MOBILE SUIT GUNDA M】

ISじゃない？だが・・・これは・・・すごい・・・頭にこいつの詳細

が入ってくる・・・これなら・・・

【兵装を選択してください】

直感的に叫んだ

幻「デステイニー！！！！！！！！！！」

瞬間光に包まれあっという間に自分自身がガンダムになった・・・

幻「これが・・・ガンダム・・・」ピキーーーーン

?!これが・・・ニュータイプと言っやつか? この感覚だとやはりあいつらが!!

なら・・・やることはひとつ!!あいつらを!!

ポーーーーン・・・ピピッ

【GUNNERY

UNITED

NUCLEAR -

DUETTERION

ADVANCED

MANEUVER ——— SYSTEM

【VPS装甲起動】

幻「機体の色が変わった?」

メタリックグレーの装甲に色がついた・・・これがVPSか・・・

【システムオールグリーン】

よし・・・行くか!!

「柳幻一郎、デステイニーガンダム出る!!」

そうして俺は敵ISS機に向かっていった

敵を取る為に・・・

プロローグ3 ガンダムのカ(前書き)

くっそ疲れた・・・

感想、アドバイスがありましたら教えてください

誤字脱字もありましたら報告お願いします

プロローグ3 ガンダムのか

ISパイロットABC side

幻一郎が飛び立つ少し前ISを操縦する三人は・・・

A「まったく、何であたしらがこんなことしなきゃいけないんだよ？！」

C「まあまあ、そんなこといわないの。でも楽な仕事だったわねえ、人一人殺すのに町ごと壊滅させていいなんて」

B「確かに、これだけやれば口封じにもなるだろうしな？」

A「まっ、たしかにねえ・・・これで給料入るんだもん安いもね」

B「さて・・・では帰還するでしょうか？」

C「そうね、さっさとこんな所からお去らばしm、「プレイヤー！！プレイヤー！！！！」ッ！？何？！」

A「センサーに感！！これは？・・・ISの反応？！いや、正体不明機？？！！」

B「何だと？！どこから？！」

A「9時の方向！」

モニターに映し出される

B「なんだ？・・・こいつは？見たこともないタイプだな・・・」

C「ふーん・・・フルスキャン全身装甲なんてねえ・・・防衛特化かしら？」

A「そんな物どうでもいい・・・敵なら落とすだけだ！！」

B「仕方がない、いくぞ！！」

AC「あいよ！！（了）解（）」

そうしてあたしたちは正体不明機に向かっていった・・・

IS3機は幻一郎に射撃による同時攻撃を仕掛ける

A B C 「「落ちろ!!!」「ドーーーーーン!!!!!!」

だがそれを幻一郎は NTの直感で全て回避する

A 「!??、今のをかわした??!!」

C 「それにかなり速い!!」

B 「油断するな!!」

幻(まずは牽制して、話を聞いてみるか・・・)

幻一郎は背中の翼を広げ【光圧推進システム(ヴォワチュール・リ
ュミエールシステム)】を発動して超音速で接近、通り抜け様にフ
ラッシュエッジ2でIS3機の武装のみを破壊する

C 「?!?!はっ、速い???!!!」

B 「速すぎる?!!」

A 「ちついい!!何なんだよ??!!」「ピッピッ

A 「?!敵からの通信?」

B 「何?!!」

幻「・・・お前たちか?・・・これをやったのは?」

A B C (おっ・・・男の声??!!!!)

幻「もう一度聞く、やったのはお前たちか?!!」

C 「・・・ええそうよ、私たちがやったわよ・・・それが?」

高エネルギー長射程ビーム砲を最大出力で放つ

C 「きゃああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!???」ド力
「……………」

A 「???!、そんな???!!!!!」

B 「ISを……一撃で???!!!!!一体どれほどの出力があると
言うのだ???!!!」

A 「ぐっ!!ごんのおおおお!!!!!!」

B 「?!、よせ!!無闇に行くな!!!!」

1機が剣を構えて突撃するがそれを回避して蹴り飛ばし地上へ落下
した

A 「ああああああああ???!!!!!!!」

B 「っ!よくも!!!!」

その間に幻一郎はアロンダイトビームソードを構え翼を展開して敵
に接近する

もう一機が攻撃をするもそれをNTの感と超音速で右に左に回避する

B 「くっ!!速すぎる?!!!」

幻「はああああああああああ!!!!!!!!!!」

ズバツ!!!!!!!!

アロンダイトを振りかぶってそのまま両断した

B 「ああああああああああ!!!!!!???」

A 「っ!……そんな……たった一機にあたしたちが負けた???
……」

幻一郎はゆっくりと地上へ降り、一歩一歩ゆっくりと地上へ落ちた
一機へ歩み寄っていく

A「ひつ?!、くつ、来るな・・・来ないで!!・・・」ガクガク
幻「お前があ・・・」

A「悪かった!あたしが悪かったから!・・・許して!・・・来ないで!!!!」

幻「お前たちがアアアアアアアアアア!!!!!!!!」
A「つ!・・・食らえええええええ!!」

ISが大型のランチャーを出し発射した

ドーン!!!

ドガーーーーーン!!!

A「・・・つふふふ・・・あつはつはつはつは!!!やった!
やったぞ!これd」・・・ガシャン・・・ガシャン・・・?!!・・・
そっそんな・・・」

そこには傷ひとつ付いていないDESTINYの姿

A「何だよ・・・何なんだよお前は??!!!!!!」

幻一郎は右手で相手の頭を鷲掴みしパルマファイオキーナ掌部ビーム
砲を起動する

A「ツが!・・・はっ放せ!!!放S?!、なっ何をする?!」

幻「お前たちは家族の仇だ・・・だから・・・殺す・・・」
パアアアアアアアアア・・・

A「?!、よっよせ・・・やめる!!!!」
幻「死ぬ・・・」

幻一郎 side

幻「……………」

俺はしばらく空を見上げていた

敵はとつたのに……なんだろうかこの空白感は……
復讐からはなにも生まれないとはこのことだろうか？……

ピピッ！ピピッ！

ポーン……

？センサーに生体反応？……！？そうだ！妹達を探さなければ！
！もしかしたら！！
反応があつた方へ急いで向かつた……

翔 side

どれぐらい時間が経つたんだろ？

火が弱まってきたからもといたところを中心にお父さんとお母さん、
それにお兄ちゃんを探してみたけど……まったく見つからなかつ
た……

……もしかして僕はもう一人ぼっちになつちやつたの？……そ
んなのやだよ……誰か……誰かいないの？……

キイイイイーン……

？何か……こっちに来る？！何？！何がきたの？！……？降

翔「お兄ちゃん!!・・・お兄ちゃん!!・・・僕、もう一人ぼっちになっちゃったと思ったよお・・・」

そうか・・・でもこうして逢えてよかった・・・っとそうだ

幻「なあ翔、お姉ちゃん達見なかったか？」

翔「あ・・・うう・・・ぐっす・・・うわああああああん!!!!」

え?え?え?・・・まさか・・・そんな・・・

幻「そうか・・・そうかつ・・・つらかったなあっ・・・」ポロポロくそ・・・だめだったか・・・

翔「そうだ!お兄ちゃん!お父さんとお母さんは??!!」

俺は・・・黙って首を横に振った・・・

翔「そんなあ・・・うっぐっ・・・えっぐっ・・・」

・・・結局・・・残ったのは二人だけか・・・

そのしばらくあと・・・

翔「・・・ねえ・・・これからどうするの?」

幻「そうだな・・・とりあえず父さんたちを国に連れて帰ろう・・・

翔「え?・・・どうして?」

幻「ここに置いて行ったら・・・かわいそうだろ?」

翔「・・・うん・・・わかった・・・グスツ・・・」

幻「・・・じゃあ・・・姉ちゃん達からだな・・・ここから近いし

な・・・」

翔「うん・・・こっちだよ」

翔の後をついていくとそこには変わり果てた妹達がいた・・・

幻「・・・」

翔「うう・・・お姉ちゃんツ・・・」

幻「・・・父さん達のところ連れてくぞ?・・・」

翔「ぐすっ・・・うん・・・」

俺は二人を抱きかかえ父さんと母さんがいるとここまで運んだ...

父さん達のところにつくと翔はまた泣き始めてしまった...

翔「うぐっ・・・お父さんっ・・・お母さんっ・・・ううっ・・・うう」

幻「・・・くっ・・・」

やっぱり・・・つらいな・・・

俺は父さん達をなんとか引きずりだして一緒に寝せて並べた

幻「さてと・・・どうするかねえ?・・・」

と、そんなことを考えていたとき

ブロロロロロロロロロロ・・・

ピピッ!ピピッ!

?・・・車と・・・ISの反応?!数は・・・5機!?

ちい!!さすがに少々きつか?・・・

幻「翔!!・・・俺の後ろに!!」

翔「う・・・うん・・・」

俺はいつでもガンダムを展開できるようにして様子を見る

すると・・・一機のISがこちらに気づきゆっくりと降りてきて「

う言った・・・

?「お前達だけか?ここの生存者は?」

凜とした女性の声で聞かれた

これが俺とその恩人へ織斑千冬との出会いだった・・・

プロローグ3 ガンダムのカ(後書き)

原作キャラが………

次こそ……

ちなみに戦闘中のBGMは「vestige - ヴェステイジ -」

後半の会話は「disillusion」をエンドレスで聞きながら書き
ました

プロローグ4 出会い(前書き)

かなり短いなあ・・・

感想やアドバイスください

プロローグ4 出会い

千冬side

千「これは・・・酷いな・・・」

私は近くの町がISによる襲撃を受けていると言う報告を受けISで現場に駆けつけた

しかしなぜこんな町を？ここは一般人の人々が平和に静かに暮らしていたはずだ

攻撃するようなどころは何も・・・教官・・・むっ？

？「敵はなぜこんな町を襲撃したのでしょうか？・・・自分には皆目検討もつきません」

千「それが分かれば苦労しないぞラウラ」

ラ「はっ・・・すみません教官」

だがラウラの言うことも最もな話だ

未だ生存者も発見されていない、一体なにg(ピピッ！ピピッ)？

！生体反応？！

ラ「教官！！」

千「ああ、行くぞ！！」

反応のあった場所に行ってみると少年が2人いた

その後ろには両親であると思われる2人と少女2人の遺体があった。

背の高い少年はこちらを警戒しているようでもう一人を自分の後ろにやった

・・・話を聞いてみるか・・・

千「私が接近して接触を試みる、周囲を警戒をしてくれ」

ラ「はっ！了解しました」

そうして私は少年に話しかけた

千「お前達だけか？この生存者は？」

幻一郎side

「・・・何か・・・見たことある顔なんだけど・・・誰だっけ？・・・」

幻「あんた・・・誰れだ？・・・どっかで見たとような気がすんだけど・・・」

？「私の名は織斑千冬、今はドイツ軍でISの教官をしているのだが・・・まさか分からんやつがいるとわは・・・」

「・・・織斑・・・千冬・・・」

幻「モンド・グロツソで優勝した人か？」

千「・・・ここまで知らないのも珍しいがまあいい、ところで名前を聞いてもいいか？」

「そっいえば名乗ってなかったな・・・警戒しなくても大丈夫かな？・・・」

幻「・・・俺は柳幻一郎、こっちは弟の「やつ柳翔・・・です」、・・・後ろにいるのは両親と妹達です・・・」

千「・・・死んでいるのか？・・・」

幻「ええ・・・ISによる襲撃によつてね・・・」

千「？！・・・では・・・やはり・・・」

「やつぱり驚いてるな・・・まあ・・・普通じゃこついうことはないからな・・・」

幻「所で、俺たちってどうなるんです？そつちに保護されるってこととでいいのかな？」

千「まあ、そうなるか・・・名前を聞く限りはお前達は私と同じ日本人のようだからな、こちらで一旦保護してそれから日本に行くことにな」教官！！よろしいでしょうか？！、「なんだ！？」

「ラ、それが・・・先ほど大破したIS3機と既に死亡したその搭乗

者と思われる3人の死体を発見しました・・・恐らく、ここを襲撃したISであると推測されます・・・内1人は恐らく大出力のビームの一撃で撃墜した物と思われます」

千「?!、何だと?!だとしたら一体誰が?・・・お前達2人はそういう奴を見てないか?」

・・・どうするか・・・俺がやったんだが・・・話すといろいろと面倒なことになるな・・・

それに翔と離れ離れになってしまう可能性が高いなあ・・・隠しておくか・・・

幻「いや・・・俺は特には・・・翔は?・・・」

翔「ぼつ僕も・・・知らない・・・」ギョッ

千「そうか・・・では何か思い出したことがあったら言ってくれ」

幻「分かった」

まあ、ここで正直に話して翔と別れるのもつらいしな・・・さてさて、どうなることやら・・・

千冬side

こいつらも両親はもういない身になったか・・・まあ、私の場合は勝手に消えてしまったからな・・・

しかし、こいつらをこのままここに居させるのもあれか・・・

千「お前達日本に行ったらどうするのだ?」

一様聞いてみるか・・・

幻「そうだなあ・・・しばらくは両親が残した遺産でしばらくは生活に不自由しないけどなあ・・・」

千「?・・・お前の両親はどこかの企業の重役か何か?」

幻「お父さんが何か偉いひとっぽいと言うのは知ってるけど・・・

詳しくは知らない」

知らないって・・・こいつは馬鹿なのか？

だが・・・幼い兄弟2人だけと言うのもな・・・そうだ・・・

千「提案なんだが、私の弟のところで暮らさないか？」

幻「はい？」

千「だから、私がお前達の保護責任者になって私の弟が住んでいるところで暮らしたらどうかとっているんだ」

幻「・・・いいのか？」

千「ああかまわん、まあ実を言えば弟の一夏にはいつも寂しい思いをさせているからな」ボソッ

幻「そうか・・・なら、そうさせてもらう・・・翔もいいか？」

翔「うん・・・お兄ちゃんと一緒なら」

千「なら決まりだ・・・後はこちらで任せておけ」

ラ「教官、こちらの調査は終わりました・・・帰還しましょう」

千「そうだな・・・よし！では帰還する！」

さて、では一夏に連絡をせねば・・・

しばらくして基地に付き一息ついたとき

TRRRRRR・・・TRRRRRRR・・・ピッ

千「ああ、一夏か？私だ」

一「おお千冬姉、どうした？」

千「実は子供2人を保護してな・・・私が保護責任者となってそっちで暮らすことになったんでな」

一「はあ？どうして？」

千「実はな、近くの町がなぜか襲撃にあってな・・・そこで唯一生き残った者なんだが・・・

まだ子供でな・・・親の遺産があるとは言っていたが2人だけだと寂しいと思ってな、だったら私が保護しようと思ってな・・・1カ

月後くらいにそつちにその2人が行くことになる、お前と同じ学校に通うよう手配するからよろしく頼む」

一「なるほどな・・・分かった、また何かあつたら連絡してくれ」

千「ああ、分かった」

一「体には気をつけてな？」

千「わかっている、ではな」

一「ああ」

ピッ

これでよしと・・・しかし幻一郎と言う少年、何か隠しているように感じたが・・・
気のせいだろうか？・・・

幻一郎 side

あれから早くも1カ月ちよつとが過ぎた・・・いろいろと忙しかったが・・・

まあ、そんなこんなで現在織斑邸の前に居る・・・と言うか今着いたんだが・・・

翔「ここが織斑さんのお家？」

幻「そうだ、これからお世話になるとこだ」

そう返したところで・・・インターフォンを鳴らした

ピンポーン……

？「はい」

がちゅっ

？「どちらさま？もしかして千冬姉が言ってた人か？」

幻「そうだ、これから世話になる。俺は柳幻一郎、こいつが弟の翔だ」

翔「よつよろしくお願いします」

？「おう！俺が織斑一夏だ、よろしくな、え〜と、ひとつ年上なんだっけ？」

幻「まあそうだが普通に話してくれ、それと、名前で呼んでくれ」

一「そうか、んじゃっこれからよろしくな幻一郎・翔！」

幻「ああ、よろしく」

翔「よつよろしく……」

一「ここじゃなんだ、あがれよ」

翔「お邪魔します」「そうじゃないだろ？」……「ただいま」

一「よし！これから一緒に暮らすんだかな！今日からここがお前の家だ」

翔「うっ……うん！」

そうして俺たちは織斑宅に引き取られた形になった

がしかし、まさか二年後一夏があんなことになるとはおもわなんだ・

・

まったく何やってんだかなあ・・・

・・・まあ俺もなんだがな

プロローグ4 出会い（後書き）

や~~~~~つと原作キャラだせた
つっても3人.....

頑張ろう.....

次からようやく原作突入

第一話 俺たち以外は全員女子（前書き）

なかなか大変だ

感想やアドバイスあったらください

誤字脱字を発見したら報告お願いします

第一話 俺たち以外は全員女子

幻一郎 side

速いもんであれから2年くらいの月日が流れた、俺たちは無事高校生となった

嬉しいことに弟の翔はかなり頑張った用でなんと飛び級で上がったのだ

のだが………現在ちよつとばかりピンチに陥っている
なぜなら………

女子「ジーーーーー」 俺「………」(汗)

女子「ジーーーーー」 一夏「………」(汗)

女子「ジーーーーー」 翔「………」(若干

涙目)

女子全員「「ジーーーーー」………」

一「これは………」

幻「かなり………」

一・幻「「きつい………」

翔「うう………」

さつきからこんな感じだからである

まあ俺たち以外に男子生徒がないからだ……なぜなら「ガラッ」ん、先生が来たか……

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

「………」

「えっ………ええつと………きよ、今日から皆さんはこのIS

学園の生徒です。

この学園は全寮制、学校でも放課後でも一緒です。仲良く助け合っ
て楽しい3年間にしましょうね？」

「・・」

そう・・・今俺たちがいるのは「女性にしか動かせないはずの」I
S学園にいるのだ・・・

しかしこの先生本当に先生だろうか？悪いと思うが中学生にもみえ
るが・・・・・・・・

「えええ・・・・・・・・じゃっ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、
出席番号順で・・・・・・・・」

そっいえばなんで俺たちがここにいいのかというと・・・

一夏 「藍越学園の受験会場とIS学園の受験会場を間違えて、そ
のとき偶然見つけたISに触れたとたん起動したので」

俺 「同じ家に住んでいるので聴取やらなにやらをやっていくうち
に「こいつももしかしたら・・・」と言うことでISに触れてみた
ら起動・・・ちなみにサングラスのことはばれなかった」

翔 「ほぼ俺と同じような感じになり触れたら起動した」

と言う感じで俺ら全員ほぼ「偶然起動できてしまった」ので一夏と
翔は強制的にIS学園を受験、そのまま入学。俺は普通の高校に通
っていたのだが強制編入。

と言う形となって今に至るのだから・・・「次は、織斑一夏君！」お
つと一夏の番か・・・

一「はい！、織斑一夏です。特技は家事全般で、趣味は体を鍛える

ことと料理をすることです。
よろしく願いします!」

ん、難なく言ったか・・・俺は最後の方だk」「きゃー
「おおうい!?なんだい?!

女子「きゃー!」「かっこいい!」

女子「ワイルド系の守って貰いたい系!」

女子「地球に生まれてよかった!」

・・・なんか・・・
・・・すごいな・・・

ここの女子達はそんなに男に飢えているのか?

真「では次に・・・柳幻一郎くん!」

むっ?俺の番か・・・「ガタツ」

幻「はい、柳幻一郎だ。趣味は機械弄りとプログラミングとトレーニングで特技は料理と声真似だ。実際は1歳年上だけどそんなの気にせずにご接してくれ、後名前が長いから好きなように読んでくれ。
よろしく!」

こんなもんk」「きゃー!」「おおう
!?またか?!

女子「きゃー!」「こっちもかっこいい!」

女子「1つ年上のやさしい感じのお兄様!」

女子「お兄様と呼ばせてくださー!」「いい!」

．．．．．まじですごいな．．．．．翔は大丈夫だろうか．．．．．
とてつもなく不安なのだが．．．．．

真「では次に．．．柳翔くん！」

翔「ひゃっ、ひゃい！」

クスクス．．．クスクス．．．

翔「あうう．．．」カアア．．．

．．．．．不安だ．．．．．果てしなく．．．．．

翔「え、えっと．．．柳翔です．．．趣味は読書で特技は暗記です．．．
よっよろしくお願いしましゅ．．．あうう、噛んじゃった」

なんとか．．．大丈夫のようだな．．．若干噛んでしまったg
「「キヤー．．．．．！」「．．．もう驚かないぞ．．．．．」

女子「キヤー．．．．．！かわいい！！！！」

女子「2人とは違って守ってあげたい系！！！しかも男の娘！！！」

女子「私の胸に飛び込んでおいで！！！！」

翔「あうう．．．あうう．．．」カアア．．．

．．．．．大丈夫なのかねえ．．．．．これから．．．．．

女子「ずっとファンでした！」

女子「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

女子「あの千冬様に」ご指導いただけると嬉しいです！」

女子「私、お姉様のためなら死ねます！」

．．．．．ここまで来るとなんかすごいな．．．．．
そして千冬姉はかなりうつつとうしそうな顔をしていた

千「．．．毎年よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる．．．それとも何か？」

私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

．．．．．本当にうつつとうしそうだな．．．が、関係ないと言わんばかりの歓声が．．．

女子「きゃあああああ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

女子「でも時には優しくして！」

女子「そしてつけあがらないように躡をして！！！！！」

一・幻・翔「くく」．．．．．
．．．．．「汗」

．．．．．元気で．．．．．な
により．．．．．だな．．．

しかし驚いたな、ここで先生をしてたなんてな．．．

千「で、さっきの騒ぎの原因はお前か？」

一「いや、千冬姉、俺は．．．？！」ピキーンッ

俺は危険を察知して回避行動を取ったら

スカッ！

千「ちっ！・・・織斑先生と呼べ」

今舌打ちしたよこの人？！

一「・・・はい、織斑先生」

女子「え？・・・織斑君って、あの千冬様の弟？・・・」

女子「ああっ、いいなあっ、代わってほしいなあ・・・」

・・・まあこれらは放っておいて、一応言っておこう。

俺たちは今、世界で初めての「IS」を使える男としてここ、公立IS学園にいる

IS学園とは、分かりやすく言うと

「日本人が作ったISのせいで世界は混乱してるから責任もって人材管理と育成のための学園を作れ。」

その辺の技術は公開しろ。運営資金は自分で出せ」

という感じでいろんなところに圧力的なものを受けて造られた学園だ、説明おわり、やれやれ・・・

一「ん？」

視線を感じたので見てみるとファースト幼馴染こと篠ノ之箒がそれとなくこっちを見ていた。

なんだ？まあ、後で聞いてみるか

そんなことを考えていると、チャイムが鳴った

千「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう

その後実習だが、基本動作は半月で染み込ませろ。いいか、いいな

ら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」「
どこの鬼教官かよ……これからどうなんだか……

幻一郎 side

1時間目の休み時間に一夏は例の幼馴染の篝という子に連れていかれた後

—「あ~~~~~きつい……」

幻「たしかに……な……」

翔「うううう……」

時間は飛んで2時間目の休み時間

教室周りには珍しい物見たさに女子達が溢れていた……

3人で集まって話をしてしていると

?「ちよつと、よろしくて?」

幻「ああ?」

—「ん?」

翔「う?」

話しかけてきたのは確か……セルシア・オルコット……だったか?

セ「訊いてます？お返事は？」

一「ああ訊いてるそれで？」

幻「何か？」

翔「御用でしょうか？」

俺たちがそう答えるとオルコットはわざとらしく声をあげた

セ「まあ！なんですよ、そのお返事は。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから

それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

3人「……………」

……………ああ、なるほど……………こういう輩だったか……………

いくらISが女にしが使えないからと言って

女々しい構図は間違ってると思うぞ……………

最近じゃ街中ですれ違っただけでパシリをさせられる男の姿も珍しくない

まったく……………どうなってんだか？

幻「で？何のようだ？セルシア・オルコット」

セ「あら、わたくしのことをちゃんとご存知なのです。本来なら代表候補生というエリートである

わたくしと同じクラスになれただけでも幸運ですよ。その現実を理解していただける？」

一「幻「そうかそれはラッキーだなあ」（棒読み）

セ「……………馬鹿にしていますの？大体、ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界初の男性のIS操縦者と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

翔「僕達に何かを期待されても……………」

せ「まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ」

まったく微塵も優しさを感じないのは俺だけか？

セ「ISのことで分からないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくなってよ？何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ああ、あれか・・・

ー「入試ってあれだろ？IS動かして戦うやつ」

セ「それ以外に何がありますの」

ー「俺も倒したぞ教官」

セ「・・・は？」

幻「俺もだ」

セ「へ？・・・」

翔「ぼつ僕もですけど」

セ「はいいいいい？！」

相当ショックなのか目を驚きに見開いている

セ「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

ー「女子ではってオチじゃないか？」

ピシッ！

・・・なんかいやな音がしたな・・・

セ「っ、つまりわたくしだけではないと？」

翔「それは分かりませんが・・・」

セ「あ、あなた達も教官を倒したというの?!」

一「たぶんな・・・俺はただ回避してただけだけど・・・」

翔「僕は夢中でやってたら勝ってました」

セ「あ、あなたは?」

幻「30秒で終わったな」

セ「はあああああ?!!」

一「と、とりあえず落ち着け」

セ「こ、これが落ち着いていられ・・・」

キーンコーンカーンコーン

セ「っ!またあとで来ますわ!逃げないことね!よくって?!」

まったくもって良くはない・・・が、いちよう頷いておく

千「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

およ?今度は千冬さん改め織斑先生が教壇に立っている

よっぽど大事なことなのか山田先生もノートを手に持っていた

千「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

思い出したように織斑先生が言う

クラス代表というと・・・言葉道理の意味か・・・

千「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみ

にクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・と教室が色めき立つ。

クラス代表は簡単に言えばクラスの顔ということだ

女子「はいっ！織斑君を推薦します！」

女子「私もそれが良いと思います！」

—「はいい？」

女子「私は翔君を！」

翔「ええ?!」

女子「ここはは幻お兄様でしょう?!」

・・・こうなると思ってたよ(泣)・・・

千「では候補者は、織斑一夏、柳翔、柳幻一郎・・・他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

—「・・・」OTL

幻「先生、俺や一夏ならともかく翔はちょっときついのでは?・・・

千「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

幻「いや、しかし・・・」

?「待つてください！納得がいきませんわ!!」

突如、俺の声を遮ったのはオルコット嬢だった

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

このわたくしに、このセルシア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか?!」

・・・父さん・・・今の世界状況が見えるようだよ

セ「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります! わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!」

ひでえ・・・最早人間じゃねえ・・・OTL

セ「いいですか?! クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!

大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で・・・」

一「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ?」

と、ここでさすがにカチンと来たのか一夏が反撃

気持ちは大変分かるので援護しようとすると思外にも翔が先に言う

翔「それに、そのISを作ったのはあなたと言う極東のお猿さんですよ? そんなこと、最初に習いませんでしたか?」

その後、俺も

幻「お前の国も大して大きさは変わらんよ。古いだけの国が何を言っただかねえ?」

セ「なっ?!・・・」

おうおう・・・顔を真っ赤にして怒ってらっしゃいますねえ

セ「あつ、あつ、あなた達ねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの？！」

一「先に言ってきたのはそっちだろ？」

幻「自分の国を侮辱されて黙っていられるほど俺は馬鹿じゃない」

翔「これだけ散々言われて怒らないほど易しくもないですよ」

セ「決闘ですわ！」

一「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

幻「話が早くていいぜ」

翔「そのほうが両方とも納得しますね」

セ「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・・・いえ、奴隷にしますわよ」

勝負にならんと思うがねえ・・・言ってみるか・・・

幻「んで？ハンデはどのくらい？」

セ「あら、早速お願いかしら？」

幻「いんや、こっちがどれだけハンデをつけてやろうかと？」

つて言ったらクラスから爆笑が起こった・・・なんで？・・・マジな話なのに・・・

女子「柳君、それ本気で言ってるの？」

女子「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

女子「柳君たちはそれは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎだよ」

真「いえ、是非ともそうしてください」

女子たちの声を遮ったのは意外にも山田先生だった

女子「え？なんでですか？」

真「私は入試のときに翔君と戦いましたから。で、ものの3分で負けてしまいました」

女子達「「「え？」「」」

千「ついでに言えば、柳兄と戦ったのはこの生徒会長だ」

女子達「「「ええー！ー！ー！？」」「」」

千「もう1つ言えば、織斑は回避しただけといていたがその間一発も被弾せずに教官に勝っている」

女子達「「「うそおー！ー！？」」「」」

千「つまり、柳兄が言ったことは正しいということだ」

女子「うそ・・・3人ともそんなに強いのか！」

女子「すごい・・・先生と会長に勝っちゃうなんて・・・」

千「それでオルコット、どうするんだ？」

セ「あ、あなた達が勝ったのはきつとまぐれです！・・・ハンデなんて不要ですわ！

代表候補生の实力を見せてさしあげますわ！」

そう言つてオルコット嬢は座った

千「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜、放課後の第三アリーナで行う。」

織斑、柳兄弟、オルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

そう織斑先生が話を締めて授業を再開した

1週間後か・・・さてさて、どうなることやら・・・

第一話 俺たち以外は全員女子（後書き）

恐らくガンダムネタのほかに仮面ライダーネタが出てくるかもしれませんが

実はクラス代表決定戦で幻一郎が使う機体をどうするかでちょっと迷ってます。これがいいと思うものがあつたら教えてください

一様候補に挙がっているのが

ストライク

ガンダム

インパルス

エクシア

ヴァーチェ

プロヴィデンス

フリーダム

という感じです

これのどれかで決めたいとは思っているが……

今更ながら設定（前書き）

そう言えば書いてなかったと思って書きました

今更ながら設定

柳 幻一郎

現在16歳

容姿 黒く後ろ髪は腰くらいまであり髪をうなじあたりで細く纏めてある

目はエメラルドグリーン（母親の影響）

顔つきはとても優しいお兄さんな感じ

背が高く現在185cmほどある（父親の影響）

14のときにドイツ軍教官をしていた織斑千冬に弟と一緒に引き取られた

能力

ニュータイプ S

いわずとした超能力、負の感情にはかなり敏感に反応する

SEED S

覚醒した場合、反応速度や反射神経がすごくあがる

声真似 S

一度聞けば女性であろうとほぼその人の声として出せる（ただし千冬のまねだけは一夏に勝てない）

料理 S

何でもつくりますよええ

変装・擬態 S

女性に変装すると誰も男性だと気づかない（ほぼノーメイクでも髪を下ろすとお姉様に……）

その他いろいろ

使用IS「ガンダム」

全てのガンダムになれるが主に使うのはSEED系列

ガンダム以外のMSにも少数だがなることが出来る

柳 翔

現在11歳

容姿 金髪のさらさらヘア、腰くらいまで伸ばしていて同じくうねじあたりで纏めてある

目は兄と同じ

顔つきが年齢以上にとても幼く見える。必ず女の子に間違われる……

背が低く現在130cmほど（ほぼ全て母親の影響）

9のときに兄と同じく織斑千冬に引き取られた

能力

ニュータイプ A+

兄より少し劣るが十分なレベル

SEED A

兄とは若干ちがいが思考能力に重点をおくタイプ

年上キラー（女性）

年上の女性にとても好かれる

変装？

というよりただ着替えだけで女の子……どんまい

声真似 A

うん……女の子は完璧

その他いろいろ

使用IS「???」

のちに出てきます

織斑一夏

現在15歳

容姿はアニメを参照

織斑千冬の実弟で柳兄弟と一緒に住んでいた

能力

ニュータイプ A+

幻一郎と出会ったことで手に入れた力、2人に劣らないほど

家事全般 S

姉に苦勞をかけまいとして頑張ったら手に入れた

フラグメーカー

とにかく女性を無意識のうちに落としてしまう、こいつ何者だ？

変装 A

ウィッグを付け、ちょっとだけメイクするとほぼ千冬になる

声真似 B

千冬に関してはパーフェクト

その他いろいろ

以上、主役たちの設定

今更ながら設定（後書き）

弟の使用機体は

トールギス1・3

ガッデス

が今のところ決定しているがもう一機ほしいが思いつかない

いい意見あったらください

幻一郎の代表決定戦使用機体も募集中

第二話 一夏は簿と、翔はセシリアと、俺は………1人か（前書き）

ようやく書けた……

感想やアドバイスありましたらください

第二話 一夏は簿と、翔はセシリアと、俺は………1人か

幻「あああああああ………」

一「いいいいいいいい………」

翔「うううううううう………」

放課後、3人はぐったりとしていた……なぜなら……

女子「ひそひそ………」

女子「きゃいきゃい………」

実は他のクラスから女子達が押し寄せいたのだ

これが一日中続いたのだから疲れる

昼休みのときもそれはもうすごかった……

3人が学食に移動すればゾロゾロとついてくるうえに、学食についたらついたでモーゼの海割りだ。

まるで珍獣のようだった。

真「ああ、織斑君、幻一郎君、翔君。まだ教室にいたんですね。よ

かったです」

幻・一・翔「……はい?」「………」

3人が呼ばれた方を見てみると、山田先生が書類を片手に立っていた。ちなみになぜ名前前で呼んでいるかという点、苗字で呼ぶと分かりづらいためである。

真「えつとですね……寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを3人に渡す

実はIS学園は全寮制で、生徒はすべて寮で生活を送ることが義務となっているのだ

これは将来有望なIS操縦者たちを保護するという目的もある
確かに、未来の国防に関わってくると学生の頃から勧誘しようとする国がいてもおかしくない

実際の国も優秀な操縦者の勧誘に必死なのだ

—「俺たちの部屋って決まっていなかったでしたっけ？前聞いた話だと、一週間は自宅からの通学になるって聞きましたけど・・・」

幻「そういえばそうだったな・・・なんで？それと、なぜに俺だけ1人で2人は別々？」

真「それなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。織斑君達そのあたりのことって政府から聞いてます？」

政府というのはもちろん日本政府

何せ前例のない「男のIS操縦者」なので国としても保護と監視の両方を付けたいようだ

ちなみに3人がISを動かしたニュースが流れてからは自宅（織斑邸）にマスコミや各国大使、果てには遺伝子工学研究所の者まで来た

真「そう言うわけで、政府特例もあつてとにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。1カ月もすれば2人にも部屋の方が用意できますから、2人はしばらく相部屋で我慢してください」

—「はあ・・・わかりました。それで部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰ってもいいですか？」

真「あ、いえ、荷物なら・・・」

千「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

翔「あ、ありがとございます・・・」

千「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器とあれがあれば良いだろう」

なんとも大雑把である

真「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・その・・・織斑君達は今のところ使えません」

一「まじか・・・風呂好きなのにな・・・」

幻「当然だな・・・」

翔「仕方ないですね・・・」

一「しょうがないか・・・俺たちしか男子いないんだから・・・」

3人ともとても残念そうだ

真「それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ？道草くっちゃダメですよ」

翔「ここから寮までの距離でどうやって道草を食えばいいんでしょうかね・・・」

・・・たしかにそうである

「えーつと・・・ここか。1025室だな」

俺たちはあの後騒がしい教室から部屋に行こうと思ひ寮へ、後はそれぞれ部屋の扉を探していた

俺は部屋番号を確認して、鍵を差し込む。あり？開いてる。そういえば相部屋だったな

ガチャ

部屋に入ると目に入ったのは大きめのベット、それが2つ並んでいる。一目で良い物だと分かる品物だ

荷物を床に置き、俺はベットへうつ伏せに飛び込む

・・・ああああああ・・・ええ気持ちや・・・

？「誰かいるのか？」

そんなとき奥のほうから声が聞こえた。しかし・・・どこかで聞いたような声・・・？！

まさか？まさか？

？「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

・・・この声にしやべり方・・・間違いない・・・

？「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ乃・

」

「・・・籌・・・」

出てきたのは6年ぶりの再会を果たした幼馴染だった

タオル一枚で隠された体はとても女性らしい体つきをしていた

「…箒」「……………」

きよとんとした顔の箒。俺はと言うと久しぶりに見た幼馴染の姿にドキドキしていた

箒「い、一夏?……………」

「お、おう……………」

頷くと顔を真っ赤にする箒。そりゃそうだ…………俺もたぶん顔はかなり赤い

箒「?!…………み、見るな!!」

「わ、悪い!」

慌てて顔を逸らすが、横目にちらつと箒が体を隠すようにタオルできつく抱きしめているうえに、押し上げられて見えた胸の谷間が見えた

そんな姿に俺の心臓はひときわ強く脈打つ…………

箒「な、な、なぜ、お前がここ!」その前に!「?!な、何だ?!」

「…………まず箒はシャワー室に戻ってくれ。そしたら俺が今度の外に出る。出たのを確認したらお前はまず服を着る…………着終わったらまた部屋に入れてくれ…………いいな?」

箒「わ、わかった…………見るなよ?!」

「分かったから早くしてくれ。お前が風邪引いちまう」

箒「う、うむ……………」

ぺたぺたぺたぺた…………がらがら…………ピシャン…………

ん、戻ったか・・・俺も外に出るか・・・

ガチャっ・・・パタン・・・

さて、終わるのを待つか・・・

女子「あ、織斑君だ」

ん？

女子「へー、あそこが織斑君の部屋なんだ！いい情報ゲッター！！」

・・・忘れてた・・・ここ女子寮なんだった・・・

困ったことに全員がかなりラフなルームウェアで男の目を気にしていない格好だった・・・

・・・目のやり場に困るんだが・・・箒、早くしてくれ、まずいことになりそうだ・・・

そう思ってから2、3分ぐらいに・・・

ガチャ

箒「・・・入れ」

ー「・・・おう」

ドアを開けた箒は剣道着を身に纏っていた

自分の部屋に入り両方とも向かい合わせにベットに腰掛けたむすつとした顔で髪をポニーテールにまとめた箒が口を開いた

箒「お前が、私の同居人だというのか？」

—「ああ、そうらしいぞ」

・・・なぜか睨まれた

箒「ど、そういつつもりだ」

—「ん？」

箒「どういつつもりだと聞いている！男女七歳にして同衾せず！常識だ！」

いつの時代の常識だ・・・まあたしかに、15の男女が同居するのは問題があると思うがなあ・・・

箒「お、お、お・・・」

—「お？」

箒「お前から、希望したのか？私の部屋にしろと・・・」

—「いや、上が強引に決めたんだよ」

箒「そうか・・・そうだったか・・・」

何でかちよつと落ち込んでしまった

—「でもまあ、同居人が箒で良かったよ」

箒「え？」

—「知らない女子達より、知ってる箒のほうが良いからな」

箒「そ、そうか／＼／＼／」

—「？どうした？箒？」

箒「?!、な、なんでもない！」

—「???、そうか」

顔が赤かった気がするが、本人が大丈夫だというのなら大丈夫なんだろう

女子「ああ、篠ノ乃さん、羨ましいなあ・・・」
女子「抜け駆けしちゃだめだよー」

突然声がしたので見てみるとドアから顔だけを出している女子達
がいた

見えるだけで5人。廊下にはもっと多くの女子がいるだろうな・・・

箒「なっ?! ななっ?!」

音速の勢いで俺から離れる箒

箒「・・・!」

無言で女子たちを追い出し、念入りに施錠する箒
しかし、情報が速いな女子は・・・

箒「そ、それでだな一夏」

一「うん? 何だ箒?」

箒「だ、だからな、この部屋の決まりと言っか・・・その、なんだ。
く、暮らす上で線引きは必要だろうという話でな・・・」

最後の方はごにごによととしていて聞き取りづらかった

というか箒、なんでそんなバツが悪そうな顔をしているんだ?

箒「ま、まずシャワーの使用時間だ。私は7時から8時、一夏は8
時から9時だ」

一「ん? 俺早いほうがいいんだけど・・・部活でもやってんのか?」
箒「そっだ剣道部だ」

一「部活棟にもなかったっけ?」

箒「わ、私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ！」

一「分かった分かった、箒が先で良い」

まあ確かに汗をかいた後そのままじゃ気持ち悪いからな
ん？そついえば・・・

一「そついえば個室にトイレはないんだよな？」

箒「ああ、各階の両端に2ヶ所あるだけだな」

一「そこに男子用トイレってあるか？」

箒「・・・・・・・・・・」（汗）

・・・・・・・・さようですか・・・・・・・・そのときは男子トイレまで全速力だ
なあ・・・・・・・・

一「はあ、愚痴ってもしかたない。箒、飯食いにいこうぜ」

箒「ん、そつだな・・・・・・・・」

まったく・・・・・・・・こんな日が続くと実が持たん・・・・・・・・今日は疲れたし
早く寝るに限る・・・・・・・・

・・・・・・・・明日も頑張ろう・・・・・・・・

翔side

翔「え~~~~つと・・・・・・・・あ、ここだ」

お兄ちゃんたちと別れた後自分の部屋を探してようやく見つけました

確か相部屋と山田先生は言っていたのでとりあえずノックをする

コンコンコンッ

………反応がありません……留守なんでしょうか？

ドアノブを捻ったら鍵がかかってました

………うん………開けてしまいましたよう

カチャカチャカチャ……カチャリ……

あ、開いた開いた

いざ、お部屋の中へ……

最初に目に付いたのは天蓋の付いたベッドでした

翔「わあ………すごいですねえ………こういうのをするのはどこかのお嬢様ですかね？」

天蓋付きのベッドなんて初めて見ました

見ても大概が映画の中ですし……

僕はその後隣にあるベッドに腰掛けてしばらく眺めていました

ガチャ

？「あら？鍵が開いていますわね？……例の同居人となる方でも来たんでしょうか……」

………どうやら今日から一緒になる同居人の人が来たようですが……
この声は………(汗)

？「今日からわたくしの同居人となる方ですか？わたくしはセシリア……」

翔「ど、どうもです……オルコットさん……」

やっぱり……オルコットさんでしたか……

セ「な、な、な、な、なななななな？！！！！」

翔「ど、どうしました？」

セ「なんであなたがここにいますの？！」

翔「なんでといわれても……僕が同居人だとしか」

セ「聞いていませんわよ？！」

僕だつて聞いてないよ……

セ「とにかく！すぐに変えて貰うよう」
「騒がしいぞオルコット」
「？！、お、織斑先生……」

オルコットさんの後ろにはいつの間にか千冬お姉ちゃん改め織斑先生が立っていた

翔「あれ？会議じゃありませんでした？」

千「そうだが、会議自体はすぐに終わったのでなちよっとお前達の様子を見に来たんだけ」

翔「そうでしたか」

セ「織斑先生！所でこれはどういうことですか？！」

千「どういうとは？」

セ「なぜこんな見た目でもあくまで男性である翔さんと一緒の部屋なのですか？！」

翔「こ、こんな見た目って……」
「OTL」

千「これは既に決定事項だ。異論は認めん」

セ「ですが、男女が一緒に同居というのは・・・」

千「なに、こいつは頭は良いがまだまだ子供だ。それに私や兄たち
に甘えっぱなしというのもどうかと思っていたのでこの機会に私以
外の女と一緒にさせてみたわけだ」

セ「だからといって・・・」

千「変更はない、まあ可愛い弟が出来たと思えばいいだろう」

セ「はあ・・・わかりましたわ・・・」

千「分かったのならばいい」

何故か僕が落ち込んでいる間に話が進んでいました・・・何か悲し
い・・・

そしていつの間にか織斑先生はいなくなっていました

翔「えつと・・・よ、よろしくおねがいますね」

セ「ええ、そうですね・・・変なことをしたら承知しませんわ！」

・・・これからどうなるんでしょうお兄ちゃん・・・

幻一郎 side

幻「あ~~~~つと?・・・ああここだ」

ガチャ

俺は部屋を見つけて中に入る

しっかし・・・何だこのベット・・・見ただけで高いことが分かる
くらいの物だ

さすがは優遇されてんなあ IS 操縦者は・・・
部屋を見渡しているとダンボールがあつた
空けてみると丸い奴が入っていた

幻「おつ、さすが千冬さんだ。これがなくちゃな」

それじゃあ早速ポチッとな

ピッピッ・・・

？「キドウカクニン、キドウカクニン」

幻「ハロ、調子はどうだ？」

ハロ「ハロゲンキ、ハロゲンキ」

幻「そうか、問題ないようだな・・・」

起動したのは自作したペットロボのハロ。今起動したのは黄緑色のハロだ

他にも白、黒、空色の大き目のハロ、濃い緑の手のひらに乗るくらい
のハロが入っている

自分で作っておいてなんだが、こいつがいると大変便利だ

情報端末としての用途のほかに、ISの簡単な整備なんかも出来て
しまう優れもの

いや、こいつ作ってよかった

・・・作るのめっちゃたいへんだけどね・・・

残りの奴は明日にでも渡しておくか

ちなみに、白が一夏、空色は翔が持ち主だ

あと、過去に電子鳥を作ってプレゼントしたんだっけ・・・

元気かな・・・あの子・・・あれ以来連絡も取ってないからなあ・・・

トントントン・・・トントントン・・・

？、誰だ？

ガチャ

女子「あ、やっぱり幻お兄様だ！」

女子「ホントだ！幻兄だ！」

女子「ここが柳君の部屋か・・・ナイスな情報ゲット!!！」

幻「・・・・・・・・」(汗)

・・・・・・・・相変わらず情報が早いな・・・
しかし呼び方に統一性がない・・・好きに呼べといったけどな・・・

幻「んで？何のようだ？」

女子「え?!い、いや特には・・・」

女子「ただ確認しておきたかったから・・・」

女子「だ、ダメでした？」

幻「いや、別にかまわんよ」

女子「ほ、よかった」

女子「じゃあ、私たちはこれで」

女子「また会いましょう、幻お兄様!!！」

幻「お、おう」

・
そういつて女子達は去っていった。女子達の行動力は凄まじいな・・・

・
そついやあ翔と一夏は誰と同室なのやら・・・あとで聞いてみるか
さてさて、飯でも食いに行くか・・・

第二話 一夏は簿と、翔はセシリアと、俺は……1人か（後書き）

幻一郎の使用機体ですが現在

エクシア 2票

となっております

まだまだ募集しておりますのでよろしくお願いします

また、翔の使用IS

トールギス

ガッデス

意外にもこれがいいのではと思うものがありましたらこちらもご意見よろしくお願いします

第三話 クラス代表決定戦・・・の前のちょっとした騒ぎ（前書き）

遅くなりました

感想・アドバイスありましたらお願いします

ああ・・・ほんとにいい抱き心地ですわね・・・このまま、また寝てしまいそうなほど・・・でも抱き枕なんてわたくし使っていましたかしら？・・・

キュッ

?!・・・だ、抱きついてきましたわ?!
わたくしは驚いて急いで掛け布団を捲ってみましたら

翔? 「うん・・・・・・・・」

そこには幼い少女が眠っていました
って?! 違いますわ!

セ「き・・・・・・・・きゃあああああああ! ! ! ! !」

思わず叫んでしまいました
だってそうでしょう?! 起きたら自分のベッドにお、男の方が寝ているなんて知ったら!

ガチャ!

女子「な、何々?! どうした・・・の」

女子「朝から一体なに・・・・・・・・が」

あ・・・今この状況はかなりまずいですわ

女子「オ、オルコットさんが翔君を自分のベッドに?!」

女子「ま、まさか翔君を抱きこんで・・・・・・・・」

セ「な?!ご、誤解ですわ!!!」

ああああ、やっぱりややこしいことになりましたわ!
だから一緒の部屋はいやだといいましたのに!!

一「なんだなんだ?何があつたんだ?」

幻「オルコット嬢、何事だ?」

ああ、またややこしくなりそうな人達が?!

お2人はこの状況を見て

幻「一体なにが……ああ……またか……」

一「どうした……あ……そういうことか……」

?、何故かお2人はこの状況を見て「またか」みたいな顔をして
いました

一体なんですか?

女子「え?またかつて、どうゆうこと?」

セ「そ、そうですわ!わたくしも聞きたいですわ!」

幻「ああ、それはな……」

千「何だ朝から騒がしい!静かに出来んのか貴様らは?!」

?!、お、織斑先生まで?!

千「オルコット!お前かこの騒ぎの原因……」

?、何故か先生が固まってしまいました

千「はあ……こういうことか……」

セ「って！一体どういことですか？！」

翔「ううん……なんですかあ？……」

この事件の元凶である翔さんがようやく起きました

まだ覚醒していないのでしよう、目がトロンツとしています

セ「あ、あなた！なんでわたくしのベッドに潜り込んできましたの？！」

翔「うう？……」

幻「翔は寝ぼけて人のベッドに入って抱きつく癖があるんだよ。実質、俺や一夏、果ては織斑先生のところにまで入る」

セ「はい？！」

一「俺のときは背中にしがみついていたな」

千「私はお前と同じような感じだな。まあ、最初されたときは驚いたが」

幻「俺は体の上だったな」

……なんだか……すごいですわね……

幻「ま、これからも多々あると思うが翔のことよろしくな」

はあ……これがですか？……しかし……

翔「うゝゝゝ……」「ゴシゴシ……」

か、かわいらしいですわね……// // // //
愛くるしい……抱きしめたいですわ// // // // //

幻一郎 side

という感じの騒ぎがあった後、俺たちは1年生寮に来ていたちなみにまだ完全に覚醒していない翔は俺がおんぶしている

幻「おい翔？食堂着いたぞ？」

翔「うっっん……ふぁぁい……」うとごと

一「相変わらずだなぁ翔は」

箒「いつもこんな感じなのか？」

一「まあいつものことだな」

なんて話をしているうちに俺たちが食券を買う番だ

一「何にすつかな……んじゃ和食定食で。箒は？」

箒「ならば私も同じものを頼む」

一「あいよ。幻一郎と翔は？」

幻「俺はどうすつかな……」

翔「カレーライス……特盛り……」

箒「は？」

驚いてるな、まあ仕方ないけどな

幻「んじゃ俺は……オムライス、メガ盛りで」

箒「はい?!」

一「あ、ついでにご飯を3倍にしてもらおう」

箒「なんだと?!」

？、何を驚いているんだ篤は・・・

篤「・・・そんなに食えるのか？」

幻「一」「余裕だ」「

篤「・・・そうか・・・」

そしていつものことながら・・・

女子「ねえねえ、彼らが噂の男子だっつゝ」

女子「なんでも千冬お姉様の弟にその同居人らしいわよ」

女子「えー、姉弟揃ってIS操縦者でその同居人もかぁ。やっぱり彼らも強いのかな？」

そんなこんなでそれぞれのメニューの品を受け取り席について食べ始める

一・幻・篤「」「いただきます」「」

翔「まあ~~~~す・・・」

篤「所で、なぜ翔は幻一郎のひざの上なんだ？」

幻「テーブルに届かないんだよ」

翔は俺のひざの上でまだ若干船を漕いでいるが、匂いに釣られてよだれが・・・

そして俺たちはそれぞれ食べ始めた

一「パクパクパクパク」

幻「がつがつがつがつ」

翔「あくむ・・・もしかもしゃ・・・うふふふ」ニパアアアア
篤「パク、カミカミ」

音だけ聞くと俺が一番早いと思うが、実際は翔の方が早い
何故か既に半分の量がなくなっている

第「・・・恐ろしく早いな翔は」

一「俺も最初は驚いたが今はもう慣れた」

女子「お、織斑君達、隣いいかな？」

幻「ん？」

突然呼ばれたので見ると、朝食のトレーを持った女子が3二人、俺たちの反応が返るのを待っていた

一「ああ、別にいいけど」

女子「やった！」

幻「俺は断固拒否する！」

女子「ええ?!?!」

女子「そ、そんな?!」

ガーン!!、という感じでうな垂れた

幻「ははっ、冗談だ」

女子「な、なんだぁ・・・」

女子「き、嫌われてるのかと思ったよ」

幻「悪い悪い」

俺たちがそういうと女子たちは安堵のため息を漏らした
だが周囲からは妙なざわめきが聞こえた

女子「ああ〜っ!私も早く声をかけておけばよかった・・・」

女子「まだ・・・まだ2日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ・・・」

」
女子「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」
女子「なんですって!?!」

「……ああ……うん……確かに来たな……
ちなみに数は

一夏 1年生16名、2年生15名、3年生14名
翔 1年生10名、2年生20名、3年生32名、先生3名（お
い）
俺 1年生32名、2年生20名、3年生7名

という感じだ
……さすがに多くないか?……
そんでまた3名増えた

女子「うわ、織斑君達って朝からすっごい食べるんだ」
女子「お、男の子だね」
女子「あれ?翔君は食べないの?」
篤「……翔は既に食べ終わったところだ」

といわれ見てみると既にいなかった……いつの間に……

女子「え?じゃあ何食べてたの?」
篤「それは……ん?、ああ、あれだ」

そこには例によって特盛りカレーを持った翔がいた

女子「え?……」
女子「あ、あれ食べたの?」

幻「そうだが？」

翔「いただきま〜す・・・あむあむ」

瞬く間に無くなっていく

女子「わあ・・・すごい」

一「ていうか、女子って朝それしか食べないで平気なのか？」

女子「わ、私たちは、ねえ？」

女子「う、うん。平気かな？」

そう、3人組の女子はメニューこそ違うがかなり少なかった

女子「お菓子よく食べるしー」

幻「そつちのほうが太りやすいぞ」

女子達「」「ギクッ！」「」

まったく、10代なんざあつというまだぞ

千「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド10周させるぞ！」

とここで千冬さんの声が響いた途端、食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った

なんせこのグラウンド、1周5キロあるそうだ

まあ、10周ぐらいなんてことないが面倒だからさっさと行くか

3時間目の授業が始まったとき、不意に千冬姉が言った

千「ところで織斑、お前のISだが準備までにまだ時間がかかる。予備機がないから少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

というと教室中がざわめいた

女子「せ、専用機?! 1年の、しかもこの時期に?!」

女子「つまりそれって政府からの支援が出てるって事で・・・」

女子「ああ。いいなあ。私も早く専用機欲しいなあ」

ええつとたしか専用機って国家か企業に所属する人間しか与えられないはずだよな

それが政府からっていうと・・・

一「データ収集か・・・」

千「そういうことだ」

はあ・・・鬱になりそうだ・・・

幻「まあ、がんばれ一夏」

何で俺ばっか・・・

女子「あれ? 柳君達の名前が無かったけど?」

千「柳兄と柳弟は既に専用機を持っているからだ」

そう、2人は持っていた

最初見せてもらったときはかなり驚いたけどな

女子「すごい．．．ちなみにどういうISなんですか？」

千「柳兄弟のISはどっちも戦況にあわせて兵装を変えるタイプだ。しかもかなり珍しい全身装甲だ」

女子「全身装甲．．．重装備型なのかな？」

千「それは来週に分かる。それでは授業を始める」

そんな感じで授業が始まった

しかし俺の専用機か．．．どんなやつなんだろうな．．．

しばらくして昼時．．．．．

？「ねえ。君たちって噂の子でしょ？」

朝食のときのメンバーで昼食を食べていると突然話しかけられた
見るとリボンの色から3年生のようだ

一「はあ、たぶん」

幻「その噂の子ってのが俺らのことならね」

と2人で答えるとその先輩は自然な動きで俺らの席についた

先輩「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと？」

翔「はい、そうですよ」

さすが女子たちだ。情報が早いこと早いこと．．．

先輩「でも君達素人だよな？IS稼働時間いくつくらい？」

一「たしか・・・3時間くらいだったかな」

先輩「それじゃあ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。対戦相手、代表候補生でしょ？」

「だったら軽く300時間はやってるわよ。でさ、私が教えてあげよつか？ISについて」

「といつてずいっと身を寄せる先輩

実に親切な先輩だ・・・だけど

幻・翔「いえ、結構です」

と、幻一郎と翔が断った

先輩「え？どうして？」

幻「代表候補生如き、敵じゃないからだ。それに、あんたも俺たちの相手にもならない」

先輩「・・・なんですって？」

「おいおい喧嘩売ってどうすんだよ？先輩お怒りだぞ

そりゃあお前1人でも1クラスは楽だろうけど

付け加えると周りは騒然としてるぞ・・・特に3年生

先輩「いいわ・・・それじゃあその力私に見せて頂戴」

翔「僕がお相手しましょう」

相手を買って出たのはなんと翔だった

先輩「あら、あなたみたいなのが私の相手？」

翔「なんでしたら、クラス全員で来てもいいです」

先輩「あなた！私をなめてるの?!男の癖に!・・・いいわ、返り討ちにしてあげる!」

翔「望むところですよといわせてもらいます」

先輩「それと、あなたのお兄さんも一緒に来なさい!」

幻「え?俺も?」

先輩「2対2で勝負よ!」

とって先輩はズカズカと行ってしまった
でもそうすると代表決定戦どうすんだ?

第「・・・なんだかすごいことになってしまったな」

千「なにをやつとるんだおまえたちは・・・」

第「わあ?!お、織斑先生、いつの間に?」

千「少し前からだ。まったくなぜ貴様らは問題ばかり起こすんだ?まあいい、やるのなら全力でやって来い。」

幻「了解」

翔「わかりました」

一「いいのかよ千 f つ織斑先生?」

千「仕方なからう。まあ柳兄弟なら問題ないか。代表決定戦と同じ日に予定しておく」

はあ・・・どうしてこうなんだか・・・
まったくこの2人は・・・

来週、どじなるじとぢら.....

第三話 クラス代表決定戦・・・の前のちょっとした騒ぎ（後書き）

さて、ちよいとやってしまった感があります

先輩とのバトルでは

幻一郎 アストレイレッドフレーム改

翔 アストレイブルーフレームセカンドリバイ
のコンビで行こうと思います

戦闘シーンうまく出来るかねえ

第四話 クラス代表決定戦（前書き）

予定を変更して、先輩戦のときの使用機体を
幻 フリーダム
翔 スローネツヴァイ
で

圧
倒
的

な力を見せようと思います

今回はセシリア戦です

感想をくれた方々の意見を参考にしました

ではございませぬ

第四話 クラス代表決定戦

そんなこんなで1週間がたち月曜日、クラス代表決定と・・・

一「なあ、箒」

箒「なんだ、一夏」

一「気のせいかもしれないんだが・・・」

箒「そうか、気のせいだろう」

一「なんでこんなに観客が多いんだ？」

そう、アリーナには1年生だけでなく3年生も多数来ていた

箒「・・・それはあいつらのせいだろう」

とって箒が指差したのは柳兄弟だった

その2人は何してるのかというと・・・

幻「さあてつと、何で行こうかねえ・・・」

翔「~~~~」

幻 使用する兵装の選択

翔 八口と遊んでる

という状況だ・・・

そう、2人は先輩達との決闘もあるのだ
どうしてこうなっているのかは前話参照

それにしてもこの2人・・・やる気あるのか？

—夏side

早いもんで当日になった

だけどまだ俺のISが届いてないようだ

—「うん・・・最悪これ使うか・・・」

と調べてみたのは青いプレスレット

こいつは余り使わないんだけどな

真「お、織斑君織斑君織斑君！」

・・・山田先生・・・もう少し落ち着きましょうよ・・・

—「山田先生、とりあえず深呼吸でもして落ち着いてください・・・

真「は、はいつ、す~~~~は~~~~、す~~~~は~~~~」

—「落ち着きました？」

真「は~~~~はい、すみませんでした。あ！そ、それですな！
来ました！織斑君専用のIS！」

あ~~~~・・・やっと来たか・・・さてどんな機体なんだろ・・・

千「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られて
いるからな。」

—「了解」

ピットの搬入口が開き、重い駆動音響かせながら出てきたのは

白い何か・・・
こいつが・・・俺の・・・

真「これが織斑君専用っ」

山田先生が言い終わる前に機体に触れる

キュイイイイン・・・

ふふ、そうか・・・お前は・・・

ー「お前・・・白式って言うのか・・・」
千・真・篤「「「?!」「」「」

?、何を驚いてんだ? まあいいか
俺はそのまま白式に体を預けて装甲が体に合わせて閉じた
白式が繋がる

『戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。IS
ネーム「ブルー・ティアーズ」。
戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり』

中距離射撃か・・・どんなやつなんだろ?

千「・・・ハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分
は悪くないか?」

いつもの呼び方に戻ってる・・・心配してるようだ
ちなみに戦う順番は、俺 幻一郎 翔の順

—「大丈夫。問題ないよ、千冬姉。」
千「そうか」

ふと、箒に意識を向けると何か言いたそうな顔をしていた
・・・一言言っついていくか

—「箒」

箒「な、なんだ？」

—「行ってくる」

箒「・・・ああ、勝ってこい」

ガシャン！ ガチッ

カタパルトに機体を接続

真「カタパルト接続、進路クリアー、システムオールグリーン、白
式発進、どうぞ！」

さあてつと・・・行きますか

—「織斑一夏。白式、出る！」

そうして俺はアリーナへ飛んだ

アリーナ上空

セ「あら、逃げずに来ましたのね」

一「まあ、逃げる理由が無いからな」

そういつて一夏はセシリアの質問に答えた

ちなみに、このアリーナ・ステージは直径200メートル。

そして既に試合開始の鐘は鳴っているので、何時撃つてもおかしくない

セ「最後のチャンスをあげますわ」

一「チャンスって？」

セ「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

一「それはチャンスとは言わないな・・・それに、惨めな姿を晒すのは・・・」

一夏は白式唯一の装備、近接ブレードを出しセシリアに切っ先を向け

一「お前だ・・・」

ピキッ

セシリアの額に青筋が浮かぶ

セ「そう・・・残念ですわ・・・それなら・・・」

セシリアは手に持ったレーザーライフル「スターライトMK2」を構え……

セ「お別れですわね!!!!」

キュインッ!

独特の音とともに発射された閃光は一夏に向かう

セ(とりましたわ!)

しかし……

スッ……ヒュン!……

一夏は最小限の動きだけでかわした

セ「な?!ですが!」

すかさずセシリアは「ブルー・ティアーズ(以降はビットとする)」を展開する

一「なんだなんだ?」

セ「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで!」

一「生憎と俺は神社の神楽とかの方が好きなんでね!」

セシリアは弾雨の如く攻撃をするが、その攻撃を一夏は防ぐことなく全て回避する

—「じつかしまあ、装備がブレード一本って・・・新手の虐めか？
まあいいや・・・
どうやって攻めようかな・・・」

27分後・・・・・・・・・・

セ「27分。持ったほうですわね。褒めて手差し上げますわ」

—「そりゃどうも」

セ「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

—「そうかい。で、結局のところまだ一発も当たってないんだけど？」

セ「・・・あなたねえ！」

その間にもセシリアは攻撃を仕掛けるも、一夏は全て回避する

セ「くっ！なぜ当たりませんか?!」

セ（このままではこちらのエネルギーが先に尽きますわ）

—「んじゃ、閉幕と行こうか」

そういつて一夏は自分に向かってきた2機のビットの攻撃を回避するとそれを・・・

スパッスパンッ！！・・・・・・・・・・ビリリッ！！・・・ドカーン！！！！

ブレードで断ち切った

セ「な?!そんな?!」

一「さあどうする?代表候補生?」

一方その頃のピット内

千・真・箒「……………」

3人はとても驚いた顔をしていた

真「はああ……………すごいですねえ織斑君。稼動時間たった3時間の動きではないですね」

千「……………ああ、確かにな……………」

千(確かに一夏は健闘しているが……………あの動きはオルコットと同じ、いや、それ以上の訓練をした者の動きだ……………あいつは一体……………)

箒「一夏……………」

箒がつぶやいたとき

箒「?!、せ、先生!」

千「ああ、試合が動く」

場所は戻ってアリーナ内

ー「せいっ!」

スパンツ!・・・ズカーン!

ガンツ!・・・ドガン!!

セ「くっ!」

ー夏がビットを全て破壊し、突撃したとき

にやりっ

セ「・・・かかりましたわ」

ウンツ

ピーンツ!

ー(?!、攻撃!・・・ミサイル型!)

セ「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あつてよ!」

ー「なんのお!」

ー夏はミサイルとミサイルの間を通過して回避し攻撃する

セ「がつ!、そんな?!」

距離が離れたところで白式に変化が・・・

—夏side

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください』

やっと終わったか・・・迷わず押す

キイイイイン・・・

ISの装甲が新しく形成された実体ダメージが消えて洗練された形になった

セ「ま、まさか・・・一次移行?!あ、あなた、今まで初期設定だけの期待で戦っていたというの?!」

—「まあ、そういうことで・・・」

なんか、観客が騒然としてるな・・・ま、当然か
ん?

『近接特化ブレード・「雪片式型」』

・・・まったく・・・こういうことか

—「ありがとな・・・千冬姉・・・」

セ「ッ!隙あり!」

セシリアがビットで攻撃してきたが・・・何てことない

キンッ!・・・ドガン!

俺は一振りです機を破壊した
再度セシリアに突撃する

—「おおおおおおおっ!!!!」

ガチャン!...キイイイイイン!

雪片が変形して刀身に輝きが宿る
いける!

—「はあああああああっ!!!!!!」

そのままセシリアを袈裟斬りにした

ビ—————ツ!!!!

「試合終了。勝者・・・織斑一夏」

セシリア side

そんな・・・わたくしが・・・負けた？
代表候補生であるこのわたくしが・・・男に？

セ「・・・認めません・・・」

そうですね・・・認めませんわ・・・
わたくしが負けるなんてこと！！！！・・・

セ「ありえませんか・・・」

幻一郎 side

終わったか・・・ずいぶんと時間かかったな
まあ、上出来だな
お？一夏が戻ってきたな

幻「やったな、一夏」

一「ああ、いやあ危なかった危なかった」
翔「よかったですね」

さてと・・・次は俺の番か・・・

第「よくやった一夏・・・その・・・見直したぞ・・・」
一「お、おう、ありがとな」

・・・微妙に桃色に見えるのは気のせいかな？

千「しかし、うまく使いこなしたものだ。訓練でもしてたのか？」

一「ISのはしてないけど、基礎体力くらいは」

千「・・・そうか」

？、何か疑問に思うところでもあんのかな？

千「次はお前だ幻一郎。さっさと準備しろ」

幻「了解」

さて、んじゃあこいつ使うか

ピッ

ポーン・・・

『兵装を選択してください』

幻「行くぞ、エクシア」

シューーーーーー

俺は緑の粒子に包まれた

真「わぁ・・・きれいな光・・・」

そいつはどつとも

パアアアアアアア・・・シューン

光が晴れたとき、俺の体はGNドライブ搭載第3世代型「ガンダムエクシア」になっていた

千「ほう、それがお前のISか・・・」

真「す、すごいです！全身装甲なんて今まで見たことないですよ！」

2人の先生陣はかなり驚いていた

そりゃそうか、何てったってこんなISはなかったからなあ

幻「んじゃ、行ってくる」

ー「おう、行ってこい」

翔「がんばってね、お兄ちゃん」

幻「あいよ」

アリーナでは既に改修を終えたセシリアが待っていた

俺は歩行でカタパルトまで移動する

ガシャン！・・・ガチン！

真「カタパルト接続、進路クリアー、システムオールグリーン、ガンダムエクシア発進、どうぞ！」

そんじゃまあ・・・さっさと終わらせますか・・・

幻「了解。エクシア、柳幻一郎。目標を駆逐する」

アリーナ内

セ「きましたわね。今度こそボロボロにして差し上げますわ」

セ（本当にフルスキンなんですね・・・ですが、そうであれば普通は機動力が低いですわ・・・）

幻「次があるんでな・・・さっさと終わらせてもらおう」

セ「そんなことができるかしら？」

幻「やってやるさ」

「試合開始！」

セ「行きなさい！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

先に動いたのはセシリアだった

ビットを全て展開する

セ「あなたには鎮魂歌を奏でてあげますわよ！」

幻「そんな物願い下げだ」

ガシャン！ ビューンビューン！ ズガンズガン！

GNソードをライフルモードにしてビット2機を落とす

セ「?!そんな?!ビーム兵器ですって?!」

セ（それにこの機動性!）

シュバツ！ ヒュンヒュン！ ズガンズガン！

さらにGNダガー×2で残りのビットを落とす

セ「まだ・・・まだ終わりませんわよ！」

そういつてライフルを構えるが既に幻一郎は目の前にいた

セ「な?!」

ガチン！ シュイン！

GNソードでライフルを斬る

セ「く?!まだ！」

残りのビットを発射するも回避され・・・

シュバツ！ ズバンツ！

セ「きゃあああああ!!!!」

GNビームサーベルでビットを破壊し

セ「イ、インターセプター!!」

セシリアは近接ブレード「インターセプター」を出すも

ズバンツ！ シュイン！ ズバンツ！

キユイイイイイイイイン・・・ガシャン・・・

幻一郎がピットに戻ってきた

翔「お疲れ様、お兄ちゃん」

幻「おう！次はお前だな？」

翔「うん・・・でも」

幻「どうした？」

翔「オルコットさん・・・大丈夫かなって」

千「だが、奴はやる気満々だぞ？」

別のピットで準備するセシリアが映っていた

翔「・・・わかりました。準備します」

翔は首にかけている青い宝石が付いたネックレスを握った

翔「ハンニバル起動。行こう、トールギス」

翔の体が光り、収まると2メートルほどに身長が上がりトールギスになっていった

千「これは・・・エクシアもそうだったがこのトールギスもだな。まるで騎士のようだ」

真「わあ！大きくなっちゃいました！」

第「エクシアは細かったが、トールギスはゴツイな」

翔「じゃあ、カタパルトに行きます」

一「がんばれよ」

幻「余裕だな」

ズシン！ズシン！ ガチャン！

カタパルトに機体が接続された

真「カタパルト接続、進路クリアー、システムオールグリーン、トールギス発進、どうぞ！」

肩についたバーニアが開き

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！

翔「柳翔、トールギス行きます」

アリーナ内

セ「よくもわたくしに恥をかかせてくださいましたね・・・その前あなた本当に柳翔ですの？」

翔「いや、僕ですって。柳翔です」

と言つて翔は顔の部分の装甲だけ解いてみせた。確認した後戻した

セ「・・・本当に翔君ですわね・・・」

翔「だから僕だつて言ってるじゃないですか・・・」

セシリアは相当驚いていたようだ

セ「・・・まあ、いいですわ。あなたを倒してわたくしが強いことを証明して差し上げますわ」

翔「・・・そこまでしてあなたが強くなりたい理由ってなんですか？」

セ「今や女性のほうが強いと言われていた時代に、男性に負けるなんていうのは恥以外の何者でもありませんわ。そう、まして、代表候補生であるこのわたくしが男性に負けたとなれば周囲の笑いものですわ！」

翔「・・・そうですか」

セ「ですから・・・」

セシリアがライフルを翔に向けて構え

セ「さつさと負けてくださいますし！」

キュインツ！ スカツ・・・

それをやはり最小限の動きでよける

翔「・・・僕は・・・僕の家族を守る」

セ「・・・は？あなた何を言ってる」

翔「もう誰にも死んでほしくないから・・・」

セ「だからなにを言ってる・・・」

翔「もう誰の涙も・・・見たくない！」

バーニアの出力を上げる

ゴオオオオオオオオオオ！ ドウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

セ「は、早い！」

翔「はあああああ！」

ガシッ！

セシリアを掴み

セ「な、なにを?!」

翔「セエエエエエエエエエエイ!!!」

ギュ——————ン!!!!

ドガ——————ン!!!!!!

そのままアリーナの壁に突っ込んだ

セシリアside

セ「ぐっ……」

ああ……わたくし……負けましたのね……
ブルー・ティアーズも強制解除されていますし……
そっいえばあの子は……

翔「大丈夫ですか？」

と、横から声をかけられ見てみますと無傷の状態の翔君がいました

セ「・・・お強いね・・・あなたは」

翔「そんな・・・僕は強くないですよ。いつも守られてばかりですから」

セ「いいえ・・・とてもお強いですわ・・・とても・・・」

そう、この子は強いですわ・・・

この子なら、話してもいいかもしれませんわね

セ「・・・わたくしのお話を、聞いていただけます？」

そう言っただけでわたくしは過去のことを話しました

父のこと、母のこと、その両親が死んだこと

そして、残った莫大な遺産を守るためにいろんな勉強もしたこと

その過程でIS適正で高評価が出て、ブルー・ティアーズに乗るようになったことなどを話しました

セ「・・・これがわたくしの過去ですわ・・・」

翔「・・・そうだったんですか・・・」

やっぱり驚いていますわね・・・

翔「・・・僕も、似たようなものです」

セ「え？」

翔「僕の話も・・・聞いてもらえますか？」

そうして彼も過去を話してくださいました

とある町に来たときに大好きだった両親と姉2人を亡くし、自分と兄だけが生き残り

そこで救助にきた織斑先生に引き取られたことなどを話してくれま

した

セ「・・・そう。あなたもなんですよ」

翔「でも、あなたのほうが大変ですよ」

セ「変わりませんわ」

翔「・・・」

セ「・・・」

少しの沈黙の後、翔君が言いました

翔「・・・なら、オルコットさんのことは僕が守ります」

セ「・・・へ？」

突然言われたことに啞然としてしまいました

セ「な、何ですか？いきなり」

翔「僕にはお兄ちゃんがいきましたけど、オルコットさんにはそういう人がいないじゃないですか」

セ「確かにそうですが・・・」

翔「オルコットさん。僕はね、自分の大切な人をこの手で守れるようになりたいんだ。だから・・・」

そういうと彼はわたくしに手を差し出し

翔「セシリア・オルコットさん。僕にあなたを守らせてください」

ドキッ！

真剣な顔でそう言われたわたくしは不覚にもドキドキしてしまいました

ですが・・・やっど・・・

セ「やっど・・・理想的な方と出会いましたわ・・・まだ、歳はかなり若いですが・・・」

セ「ええ、よろしくお願ひしますわね。歳若いナイトさん？」

翔「はい、こちらこそ。オルコットさ」セ「セシリアですわ」・・・え？」

セ「ですから、セシリアでいいですわ」

翔「わかししました。セシリアさん」

そうしてわたくしは、この子の手を取りました

幻一郎 side

う~~~~む・・・なんかまた桃色空間が広がっているなあ

まあ、これでセシリアも改心するだろう

「きゃあああああああ!!!」

ん？なんだ？何かアリーナが騒がしいな

そう思ってみてみると、翔がトールギスの状態のままセシリアを俗に言うお姫様抱っこして飛んでいた

・・・なにしてたんだ・・・

セシリアは大変、恥ずかしそうにしていた

幻「まあ、いいけどね」

一「あいつらしいと言えばあいつらしいな」

千「そうだな」

篤「そうなのか？」

幻「ああ、あいつは優しいからな」

真「はあ、なんだか絵になりますねえ。まるでお姫様を救った騎士ですね」

まあ、トールギスが騎士のような姿だからな

千「さて、次は柳兄弟と3年生との戦闘だな」

一「そういえばそうだったな」

篤「大丈夫なのか？」

幻「無問題、ノープロブレムだ」

さてさて、準備しますか・・・

ピキーン！

幻（?!これは、悪意のプレッシャー?!翔!）

ピキーン！

一「?!翔!」

ドカーーーーーー!!!!!!

翔に何かが直撃した

第四話 クラス代表決定戦（後書き）

ああっあああっあああああっああっあああああっああ
っつかれた……………

と言うわけで投票の結果

エクシア 2票

スサノオ 1票

GNフラッグ 1票

となりました……………少なさ

やはりOO強いですね

ちなみにエクシア戦は1stシーズン1話参照

今後ともよろしく願います

第五話 突然の不意打ち 怒りの猛攻（前書き）

この日の朝は雷ごろごろ・・・5/30

風ビュウビュウ・・・やべえ・・・

そんなこんなで書きました

感想・アドバイス・提案などありましたらよろしくお願ひします

第五話 突然の不意打ち 怒りの猛攻

翔side

一体なんですか・・・

セシリアさんをピットに連れて行く途中に攻撃を受けた僕は攻撃を受けたほうを見てみた

先輩「・・・あれを直撃で受けて無傷なんてね」

そこには対戦相手の3年生がISを装着して浮いていた

セ「あなた！いきなり何をいたしますの?!」

翔「そうですね、危うく生身のセシリアさんに当たるところでしたよ!」

先輩「男に負けるような奴なんか知らないわ」

・・・なんて人ですか・・・こんな人がいるからお父さんとお母さん、お姉ちゃん達が!

翔「許しません・・・僕ばかりだけでなく、セシリアさんまで攻撃した罪、重いですよ!」

許さない・・・・・・・・・・・・・・・・クシザシニシテヤルヨオ・・・

ピットside

ー「あいつら!」

第「なんてことを・・・正々堂々と言う言葉を知らんのか?!」
千「あの馬鹿どもが・・・」

3人は怒りに震えていた

真「あわわわ!」

・・・このひとは・・・まあ・・・しかたない

幻「・・・」

そのままカタパルトへ向かう

幻「来い!フリーダム!!」

パアアアアアア・・・シュン・・・

あっという間に出撃準備が終わった

幻「殺ってくる」

ー「文字がちがう気がするが行ってこい」

千「・・・あの馬鹿どもに力を見せてやれ・・・」

幻「・・・了解」

ガチャン! ガチン!

カタパルト接続

幻「・・・山田先生・・・お願いします・・・」
真「は、はい！か、カタパルト接続！進路クリアー！システムオー
ルグリーン！フリーダム発進！どうぞ！」
幻「柳幻一郎・・・フリーダム、行きます！」

そうして「自由の翼」は飛んでいった

先輩 A s i d e

A「・・・なによ・・・あのISは・・・」

さっき私はあいつに攻撃したんだけど・・・

B「ごめくん、待った？」

A「大丈夫よ。ねえ？あれ、どう思う？」

B「うん、すごく重そう」

A「そうじゃなくて・・・はあ、まあいいわ。さっきあいつにラン
チャーを放ったんだけどね」

B「どうだった？」

A「・・・無傷だったわ」

B「え？！すごい！でも普通じゃありえないよ？」

A「そう、普通はバリアーがあるんだけどそれが発動してない。つ
まり、あれは単純に装甲で防いだのよ。つまり・・・」

B「シールドエネルギーが減ってない？」

A「・・・そういうことよ」

シールドエネルギーを使わないで装甲だけで防ぐなんて・・・なんてやつなの

B「でも・・・それぐらいでなくちゃ楽しくないよ・・・ふふふふ」

ああ・・・この子の悪い癖が・・・
戦闘になると人がかわるのよねえ・・・
でも、ちようどいいわ

A「私たち3年の実力、見せてやりましょう?」

B「うん・・・うふふふふふふふふふふふふふふふふふふ・・・」

翔side

僕はセシリアさんをピットに連れて行った

ー「おい、大丈夫だったか?」

翔「うん、問題ないよ」

真「でも、あんな攻撃を受けて無傷なんて・・・どんな装甲してるんですか・・・」

ただ単に特殊な合金使ってるだけでけどね
さて・・・

翔「それじゃあ、行ってきますね」

行こうとしたとき

セ「あの・・・」

翔「？、はい？」

セ「・・・気をつけて・・・くださいね？」

翔「・・・はい！」

さて、セシリアさんのためにも、行こう

翔「装備変更、スローネツヴァイ」

シューイイイイイイン・・・パアア・・・

紅い粒子が晴れるとスローネツヴァイになっていた

ガチャン！ ガチン！

真「カタパルト接続、進路クリアー、システムオールグリーン、スローネ発進、どうぞ！」

翔「柳翔、スローネツヴァイ、行きます」

さあ、行こう

ボクノタイセツナヒトヲキズツケヨウトシタヤツノトコロ・・・

アリーナside

それぞれが向かい合っていた

先輩A「来たわね・・・」

先輩B「あたしたちの実力、思い知りなさい・・・ふふふふふ」

2人がそう言い、軽視するような目で見るが・・・

幻「つつせえ。てめえらなんざ秒殺だ」

翔「あなたたちと話す舌を持ちません」

柳兄弟はそう言って返した

「両者、位置に付け」

アナウンスの指示ど通りに双方位置について

「では・・・試合開始!」

ズバツズバンツ!!

先輩AB「・・・・・・・・え?」

観客「・・・・・・・・え?」

試合開始直後、先輩チーム双方の武器と片方のスラスタが破壊された

実は幻一郎がハイマツトモードで通りざまにサーベルで破壊したの

だった

先輩B「う、うそ?!」

先輩A「は、早すぎる?!」

ガシャン! ドオオオオオオ!!!

幻一郎はそのまま先輩Aにハイマツトフルバーストを放ち、残りのスラスタ等を破壊した

ドカーーーーーン!!!

先輩A「きゃあああああああああ!!!」

ここまで5秒

先輩B「な?! ころもあつさ!」余所見をしていいんですか?」
何?!」

ガキーン!!

翔はバスターソードを振るうが防がれる

先輩B「くうううう!!」

バキーン!!

そのままはじいた

先輩B「きゃあ!!」

翔「行け！ファングー！！」

ガシャン×8 ヒュンヒュンヒュン！×8

ファングを射出して攻撃をする

ビュンビュンビュン！！ ドカーーン！！

先輩B「あああああ！！・・・くっ！まだまだ！！」

そういつて構えるが

ジャキン！！！！×8

先輩B「・・・・・・・・え？」

既にファングが全て全身に刺さっていた

ドガーーーーーン！！！！

先輩B「そ・・・そんな・・・」

ビーーーーー！！！！！！

「試合終了、勝者、1年生チーム」

こうして先輩達との戦いが終わった
ちなみにここまでの所要時間は1分ほどである

第side

千・真・第「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

な、なんとということだ……

3年生をあも容易く倒してしまうとは……
彼らは一体何者だ？

—「お！思ったよりも早く終わったな」

第「……一夏、お前は2人の実力を知っているのか？」

—「まあ、ちょっとだけな」

ちよつとだけ……だと

あれでか？

千「まあ、何はともあれ無事に終わったな。これであいつらはここにいる男たちの評価を改めなければならんな」

たしかに……あそこまで圧倒的な力を見せられたら変えざるを得ない

だが逆に恐怖心を持つものもいるのでは？

千「よし！試合は終わった。各員教室に戻れ！」

織斑先生がアウンスして皆教室に戻っていく

・・・私たちも戻るとするか・・・

セシリア side

先ほど翔君が使ったのはビット兵器。しかもわたくしの倍の数を操りながら戦っていましたわ

見たところあのビットは近接攻撃も出来るようですね

翔「セシリアさん」

ISを解いた翔君が来ましたわ

セ「お疲れ様ですわ。とても勇敢でした」

翔「ありがとうございます」

あとで使い方のコツでも教えてもらいましょう

セ「さ、参りましょうか、翔君」

ギユ

そう言ってわたくしは翔君の手を握りました

翔「ふえ?!・・・あ・・・あうう・・・」カアアア・・・

あらあら、お顔を真っ赤にして。かわいいこと

セ「教室に戻りましょうね」

翔「う・・・うん・・・」カアアア・・・

ほんとに愛らしいですわ・・・//

千冬side

ガチン!　ズバツ!

私は今山田君とともに先ほどの試合映像を見ていた
しかし、まさか3年がああも簡単にやられるとはな・・・

アレだけ大口を叩くだけの实力があるか・・・ん？

千「今は・・・山田君、さっきの映像を巻き戻してくれ」
真「何かあったんですか？」

千「分かんが、何か違和感を感じたのだ」

真「分かりました」

ピッ

キュインッ！　ヒュンッ！

・・・やはり何か引っかかる・・・

千「山田君、もう一度」

真「はい」

ピッ

キュインッ！　ヒュンッ！

?!・・・そうか・・・そういうことか

千「分かったぞ、違和感の正体」

真「本当ですか？」

千「ああ、さっきのをもう一度。今度はスローで」
真「わかりました！」

ピッ！

キュイ・・・

千「ここだ。これが私が感じた違和感の正体だ」

真「これって・・・織斑君も幻一郎君も翔君も、3人共攻撃の前に既に回避行動に入ってますよ?!これは・・・」

千「そう、普通では考えられんことだ」

真「こんな動き、相手の動きが前から読めていないと出来ませんよ?!」

そう、そうなのだ

普通ならば、いや、私でも攻撃の「直前に」判断し、避ける

だがこの3人は攻撃の「前に」既に回避行動に入っている

まるで相手の考えていることが最初から分かっていたような・・・しかし、これをまさか一夏まで出来るとは思わなかった

真「織斑先生、彼らは一体・・・」

千「分らん。だが、何かしら、特殊な能力を持っているとみていいだろう」

幻一郎・・・翔・・・そして一夏・・・お前達は一体・・・

第五話 突然の不意打ち 怒りの猛攻（後書き）

というわけで……
うん……ガンダム無双だね……
しかも短い……

感想のなかにあつたので書きます

幻一郎のヒロインは原作キャラ
ヒロインは1人につき1人です
ミーティアやGNアームズなどの追加アーマーなどは出します
特定の機体使用時に性格変更します

以上です

今後ともよろしく願います

第六話 祝！クラス代表就任パーティー（前書き）

かなり短いです・・・すみません

感想・アドバイス・誤字脱字ありましたらよろしくお願いします

第六話 祝！クラス代表就任パーティー

時間は飛んで4月下旬

3人とクラスメイトは寮の食堂に来ていた

まあ、何をしているかはおおよその想像がつくと思うが・・・

幻一郎 side

女子「と言うわけです！織斑君、翔君、幻一郎さん、クラス代表決定おめでとう！！！」

女子達「「「おめでとう！！！！」」」

パン！パンパン！

幻「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

翔「あむあむ・・・・・・・・」

・・・・・・・・あんまりうれしくねえ・・・・・・・・

しかもなんだこれ？

壁を見ると「織斑一夏、柳幻一郎・翔君クラス代表就任パーティー」と書いてある紙がかけてある

・・・・正直に言おう・・・・

幻「めんどくせえ・・・・・・・・」

「「はあ・・・・・・・・」」

翔「もぐもぐ・・・」「ニ」「ニ」

・・・翔に関してはスルー

そもそも何でこうなったかと言うと・・・

まあ・・・簡単に言えば織斑先生とクラス全員による「強制」だ・
・

女子「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

女子「ほんとほんと」

女子「ラッキーだったねよねー。同じクラスになれて」

女子「ほんとほんと」

さつきから相槌打ってんのは2組じゃなかったっけ？

なんでいんの？

ちなみに対抗戦のときはどうすつかというと・・・

他のクラスも3人選抜という風になった・・・時間かかるな・・・

女子「はいはい！新聞部です。話題の新生、織斑一夏君、柳
幻一郎君・翔君兄弟に特別インタビューをしてみました〜！」

盛り上がる一同

・・・来なくていいよ・・・

女子「あ、私は2年の黛薫子。よろしくね。新聞部部长やってまー
す。はいこれ名刺」

ほとんど似た漢字だな

黛「ではではぜひ織斑君からクラス代表になった感想をどうぞ！」

ずずいつと一夏に向けた

一夏は・・・

一「そんなに付きまとわないでくれ。過剰な期待に答えたくないじやないか」

「「「キヤーーーーーー！！！！／／カッコいい！！」」」

・・・さつきまでため息を吐いていた人間のセリフじゃないな・

黛「おお！やる気に満ちたセリフありがとう！じゃあ次は翔君！」

翔は・・・

翔「乙女座の僕にはセンチメンタリズムな運命を感じずにいられますん」

「「「乙女座だああ！！・・・ブハツ！！／／」」」

・・・どいうこつちや？

と言いながらなんだかセシリアを見てる気がする・・・

黛「まるでこうなることが運命だと言わんばかりのセリフありがとう！最後に幻一郎君！」

どうすっかな・・・

名刺破つて「お前を殺す」でもいいし「この世界に、神なんていない」でもいいし

「狙い打つぜ！」とかもいいかねえ・・・

・・・あれでいいか・・・

幻「俺は、不可能を可能にする男だ！」

シーン・・・

・・・あれ？俺やつちまった？！

パタッ×5

え？！5人ほど倒れましたけど？！

倒れた女子達「くくくくああく・・・さすがお兄様・・・／／／／／
／／／／／うつとり・・・

・・・うん・・・大丈夫なようだ・・・

黛「ああつと！何人が倒れるほどの自信満々のセリフありがとう！」

・・・大丈夫・・・だよな？・・・

ちなみに一夏の時も5人ウネウネしてたり・・・
翔の時も10人くらいが鼻血を出してたり・・・

黛「ああ、セシリアちゃんもコメント・・・はいいや・・・」

？、セシリアは何して・・・

セ「もう、こんなに口の周りを汚して」「フキフキ

翔「じ、自分でできるよお／／／」

セ「いいからじっとしててくださいまし・・・はいOKですわ」

翔「あ、ありがとう・・・／＼／＼／＼」

ああ、なるほど

女子「セ、セシリアさんと翔君が・・・」

女子「仲が良くなってる・・・」

まあ、最初あれだけ仲が悪かったからな

しばらくして・・・

なんだかすごく盛り上がってるなあ・・・

ワーワー！　　キヤイキヤイ！

女子「盛り上がってきたから誰か歌えー！」

女子「私が歌うー！」

くくく

ワー—————！！

・・・凄まじいな・・・

・・・

曲が終わった

何人が歌った後・・・

女子「ありがとう!」

女子「じゃあ次は・・・男子行って見よう!」

え?!マジで?!

—「やるのか・・・」

翔「うう・・・苦手です」

幻「しょうがねえ・・・やるか」

—「あいよ」

翔「はい・・・」

女子「本当?!男子歌ってくれるって!」

キャーーーーー!!!!!!

女子「じゃあ、織斑君から!」

—「俺から?!・・・はあ、わかったよ」

箒「い、一夏が歌うのか・・・」「ぶつぶつ・・・

女子「曲名は?」

—「Justice」

~~~~~

(声がISSAさん)

~~~~~  
!

曲終わり

—「こんなもんかな」

キヤーーーーー!!カッコいい!!

だとよー夏、良かったな

女子「いや〜良かったよ織斑君!じゃあ次翔君!」

翔「は~~~~い」

セ「どんな歌を歌ってくださいるのかしら」

女子「曲名は?」

翔「Round ZERO〜BLADE BRAVEです」

~~~~~

(声は相川七瀬さんのまんま)

~~~~~  
!

翔「い、以上です……」

女子「う、うまい……」
「OTL」

女子「何でそんなにうまいの……」

それはまあ……な

女子「最後に幻兄！」

幻「うい〜」

女子「曲名は？」

幻「Journey through the Decade」

〜

(GACKTさんの声で)

〜

フル終わりつと

幻「どうだ？」

女子「なんでそんなにうまいのよ・・・」OTL

・・・どんまい・・・

女子「さて、それじゃあ良い時間だから最後にみんなで写真撮ろうか？」

女子「よし撮ろう!！」

それであつと言う間に・・・

女子「準備完了!！」

と、なった・・・ちなみに・・・

翔の隣にセシリア、一夏の隣に箒となっている
俺は・・・真ん中・・・

女子「はい、じゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

幻・翔「ー」「74.375!」「」

女子「せ、正解・・・」

パシヤツ

そんなこんなでクラス代表就任パーティーは終わったわけだ・・・

箒side

私はあの時一夏が歌っていた曲の歌詞を思い出していた

箒（護ることと戦うこと、ジレンマは終わらない・・・か）

今は既に眠っているあいつは何を思ってアレを歌ったのかは分からない・・・

護るために戦う・・・か。その護るの中に私は入っているのだろうか？・・・

?!、わ、私はなにを考えている!

・・・だが、なぜこいつはこんな歌を歌ったのだ・・・

セシリア side

セ「知らない罪と知りすぎる罫・・・ですか・・・」

わたくしは翔君が歌った曲を思い出していました

なぜでしょうか・・・どうも気になります

きつと・・・

セ「歌詞がその歳で歌うには相応しくないと感じたからでしょうね・・・」

本人がもう眠ってしまいましたのでその意図を確かめることは出来

ませんが・・・

おそらく、自分のことでしょうね

セ「知らないと言う罪・・・」

翔君はなぜ・・・

第六話 祝！クラス代表就任パーティー（後書き）

うっっん・・・次こそは鈴をだしたいなあ・・・

ガンダムのセリフが・・・
大丈夫かな・・・変じゃないよね？

そんで3人が歌いました!!!

全部ライダーOPって・・・

まあ、好きだから入れたんですけどね・・・

ちょっと早いですか

クラス対抗戦での使用機体を募集したいと思います（いまのところ候補すら決まってないので）

いままで出てきた機体以外で候補がありましたらお願いします

その中で決めてみたいと思います

では、よろしくお願ひします

第七話 転校生は一夏のセカンド幼馴染（前書き）

どうもお久しぶりです

だいぶ日が開いてしまって申し訳ないです

感想・アドバイス等ありましたらお願いします

ではございませ

第七話 転校生は一夏のセカンド幼馴染

一夏side

女子「織斑君達、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、幻一郎と翔とで喋ってたらクラスメイトにいきなり話しかけられた。

しかし、入学してからの数週間、女子達ともそれなりに話せるようになったのは大きな前進だろうな

—「転校生？今の時期にか？」

幻「ずいぶんと稀だな」

なんで入学じゃなくて転入なんだ？

まあ、ここに入るにもなかなか条件が難しいからな

女子「何でも、中国の代表候補生なんだってさ」

翔「中国ですか・・・」

中国か・・・そういえばあいつも中国だったな・・・元気かねえ・・・

・
そうじゃなくても代表候補生っていうくらいだから強いんかな？

ちなみに、クラス対抗戦とは読んで字の如く、クラス代表同士によるリーグ戦だ

本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい

あと、クラス単位での交流およびクラスの団結のためのイベントだ
そうだ

さらに、やる気を出させるために、1位のクラスには優勝商品とし

て学食デザートの半年フリーパスがある
女子が燃えるわけだな・・・

女子「でも、織斑君達なら楽勝だよ！」

女子「そうだよな。なんて言ったって、代表候補生に3年生のも勝つちゃうんだから！」

女子「そして、翔君達が勝てばみんなが幸せになるよー」

・・・で

何時の間にやら俺たちの周りは女子たちで埋め尽くされた
もういつものことだから慣れた

・・・慣れって怖いよな・・・

女子「織斑君、がんばってねー」

女子「お兄様、私たちのフリーパスの為にも！」

女子「翔君も、ファイト！」

女子「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから余裕だよ」

まあ・・・普通1年で持つてるほうが珍しいしな

？「・・・その情報、古いよ」

ん？なんか聞いたことがありまくる声だな

そう思っって声がした教室の入り口を見た

？「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組んで、片膝を立ててドアにもたれかかっていたのは、なんと

も懐かしい奴だった

—「鈴・・・鈴じゃねえか！」

鈴「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす・・・・・・が

—「何格好付けてんだ？すつつつげえ似合わないぞ？」

幻「お前がそれをするにはあと5年と138日16時間54分38秒早い」

翔「失礼だよ、お兄ちゃんたち・・・」

鈴「んなつ？！なんてこと言うのよあんた達は！」

それより鈴。後ろに気をつけるー

？「おい」

鈴「なによ?!」

バシンッ!!!

鈴の頭に痛烈な出席簿アタックが・・・鬼教官様のご登場だ

千「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴「ち、千冬さん・・・」

千「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

鈴「す、すみません・・・」

ずいずいドアからどく鈴

鈴は何故か千冬姉が苦手だ・・・理由は分らんが

鈴「またあとで来るからね！逃げないでよー夏！」

何処に逃げるんだよ・・・

千「さつさと戻れ」

鈴「は、はいっ！」

そしてそのまま2組へ向かって猛ダツシユ

うん、昔の鈴のままだ

ー「っていうかあいつES操縦者だったのか。知らなかったな」

翔「しかも、中国代表候補生ですか・・・」

そうなんとなく口に出したのがちよつとまずかった

第「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

セ「翔君！？あの子とはどういう関係で・・・」

などなど、クラスメイトからの質問の集中砲火が・・・

バシンバシンバシン！

千「席に着け、馬鹿ども」

例によって例の如く千冬姉の出席簿アタックが・・・

しかし・・・なんでこう、知り合いと再開するんだらうな・・・

世の中とは不思議なもんだ・・・
そして、今日も1日ISの訓練た学習が始まる

幻一郎 side

箒「お前のせいだ！」

セ「あなたのせいですわ！」

昼休み、開口一番に箒とセシリアが一夏と翔にそれぞれ文句を言っていた

一・翔「「なんで・・・」」

ちなみにこの2人、午前中だけで山田先生に注意5回、千冬さんに3回叩かれている
学習しようぜ・・・

あの人の前でぼーっとするなんて「さあ、やっってください!!」と言っているようなもんだ

一「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

翔「そうですね、そうしましょう」

箒「む・・・。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

セ「そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

左様でございますか

他のクラスメイトも数名付いてきて、そろそろ学食に移動した学食に着いたら着いたで

鈴「待つてたわよ！一夏！」

鈴が自分のトレーを持って立っていた
そんなとこに立っていると邪魔なんだが・・・

一「とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

鈴「う、うるさいわね！わかってるわよ」

そんなこんなで注文の品を持って席に着く
しっかし、ホント久しぶりだな
あんまり変わってないと思うのは気のせいかな？

篤「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

セ「そうですね。翔君、こちらの方とはどういづご関係で？」

一「ただの幼馴染だ」

翔「一夏兄さんの幼馴染です」

鈴「・・・・・・・・」

なんか鈴が一夏を睨んでるぞ

一「何睨んでんだ？」

鈴「なんでもないわよ！」

わあ・・・・・・・・一夏あーガンバ

篤「幼馴染？」

「おう。ちょうど箸とは入れ違いで転校して来たんだよ。で、中2のときに国に帰っていったんだよ。鈴、こっちが前に話してた幼馴染の箸だ」

鈴「ふーん、そうなんだ」

鈴が箸をじろじろと見る。箸も負けじと鈴を見返す。

なんか・・・睨みあってるように見えるのは気のせいか？・・・

鈴「初めまして。これからよろしくね」

箸「ああ。こちらこそ」

火花が・・・火花が散っている！

セ「もう、またこんなにお口の周りを汚して」「ふきふき

翔「むぐっ・・・うう・・・」カアア

「こっちは既に興味がなくなったのか、話にすら参加してない最早何も言うまい・・・」

鈴「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

と、唐突に鈴が言う

「おう。最後はほぼ強制的にな」

鈴「ふーん・・・」

そういうと鈴はどんぶりを持ってスープをごくごく飲む

ラーメンにはレンゲを言うものが付いているはずなのだが、こいつは

『女々しいからいや』

という理由で使わない

・・・お前女だよな・・・

鈴「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

鈴にしては珍しく一夏から顔を逸らし、視線だけを向けている言葉もどこか鈴らしくない

で、一夏の返答はと言つと・・・

「いや、間に合ってるぞ？」

なぜに疑問系？

鈴「そ、そう・・・」

鈴がとても残念そうに俯く

鈴「そ、それならさ。今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

駅前・・・ああ、あれか

いつの間にか無くなってたからな

鈴「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

こいつに、そんなのがあるのか？

確か、中3の時一夏は受験勉強真っ只中だったから話すこともないんじゃない・・・

篤「あいにくだが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

おい待て、そんなの何時決まったんですかい？
つて、一夏も知らんかったんかい？！

鈴「じゃあそれが終わったら行くから。開けといてね。じゃあね、一夏！」

といつて鈴は行ってしまった

まったく・・・一夏も難儀な奴だな

一夏 side

時は変わって放課後

時間が飛んだ？気にするな、俺は気にしない
つて言ってる場合じゃなかった

今俺の前では激しい抗争が・・・

篤「ふ、ふざけるな！出て行け！ここは私の部屋だ！」

鈴「『一夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」

大有りだよ！？

箒「とにかく！部屋は代わらない！出て行くのはそちらだ！自分の部屋に戻れ！」

鈴「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

箒「無視するな！ええい、こうなったら力づくで……」

というとき箒はベッドの横に立てかけてあった竹刀を取った
おいおいおいおいおい！？

—「この馬鹿っ！」

そのまま箒は防具も着けてない鈴にその切っ先を振り下ろそうとしたところで

俺がその手を受け止める

箒「は、放せ一夏！」

—「それは出来ない……」

そして箒を……

—「相談だ！」

箒「な?!」

グリン ポスツ

俺のベッドへ「優しく」投げ落とした

箒「……………」

鈴「……………」

ん？何両方とも呆然としてるんだ？

まあいい

一「箒、今のは生身の人間だったら危なかったぞ？」

箒「うっ……すまん」

一「俺じゃなくて、鈴に謝れ」

箒「すまん……」

鈴「え、ああ、ううん。気にしてないから！」

まったく箒は……

あ、そういえば鈴が約束がどうだとか言ってたな

一「なあ鈴。約束って」

鈴「う、うん。覚えてるよね？」

一「あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を……」

鈴「そう、それ！」

一「おごってくれるってやつだけ？」

鈴「……はい？」

俺がそう言つと鈴は徐々に怒りに満ちた眼差しで睨んできた

鈴「最つつつ低！！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！犬に噛まれて死ね！」

バタンツッ！！

鈴はバックをひったくるように持ってそのまま部屋を出て行ってしまった

一「……怒らせちゃったか」

あれは完全に俺が悪いんだろうな

箒「一夏」

一「なんだ、箒？」

箒「馬に蹴られて死ね」

グサグサグサ！！

一夏に9999のダメージ！

一夏は死んでしまった！

・・・いやいやいや！死んでないからな？！

だが、最早起きてても仕方ないから寝るとするか・・・
なんで俺の周りの異性って・・・

翌朝、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった

表題は

「クラス対抗戦日程表」

一夏の対戦相手は2組の鈴だった・・・

第七話 転校生は一夏のセカンド幼馴染（後書き）

なかなか書けませんでした
理由としてはある人風に言つと

「興が乗らん！」

て感じですよ

すみません、うそですよ
実際は忙しくて書けなかったからです

と言つか後から気がついたが幻一郎目線なのに本人一言も話してない？！
・・・やっちゃまった・・・すみません許してください

クラス対抗戦使用機体ですが今のところ候補として挙がっているのが

ガデッサ

ガラッソ

ガンダムX

ウイングガンダム

ガンダム

ヘビーアームズ改

アストレイ
です

これ以外にも提案がありましたらどうぞ書いてください
それを元に考えてみたいと思います

よろしくお願いします

第八話 クラス対抗戦 前編（前書き）

どうもお久しぶりです

なかなか更新できずに申し訳ありません

誤字・脱字・アドバイス等ありましたらお願いします

では、どうぞ

第八話 クラス対抗戦 前編

一夏が鈴を怒らせてしまっただけからしばらくして試合当日

2人の仲は改善されておらず、むしろ若干悪化した

まあ、何があつたかは想像にお任せする

ちなみに、対戦カードは・・・

一夏 第二アリーナ第一試合、対戦相手は鈴

幻一郎 第三アリーナ第二試合、対戦相手は5組

翔 第四アリーナ第三試合、対戦相手は3組

と言うようになっている

そして、一夏の第二アリーナは「噂の新生同士の戦い」とあつて
満員御礼

プラス、通路での立ち見に加え、リアルタイムのモニター鑑賞も大
勢いる

一夏と鈴、果たして勝者は・・・

なんじゃこりゃ？

何でこんなに人が多いのさ
つと

—「そんなこと気にしてる場合じゃないか・・・」ボソツ

視線の先には鈴とそのIS「シエンロン甲龍」が試合開始を待っている
しかし、なんだ？あのスパイクアーマー。すごく痛そうだな

「それでは両者、規定の位置まで移動してください」

アナウンスに促され、俺と鈴は空中で向き合う

その距離おおよそ5メートル

俺と鈴は開放回線オープンチャネルで言葉を交わす

鈴「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてもいい
わよ？」

—「断固辞退する。俺は真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも嫌いだ。
全力で来い。そうでなければ意味がない！」

そうだ、勝負とは全力でやってこそ、初めてそこに意味が生まれる！

鈴「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シ
ールドエネルギーを突破する攻撃があれば、本体にダメージを貫通
させられる」

実際に鈴の言っていることは本当のことだ

噂では、操縦者に直接ダメージを与える「ためだけ」の装備も存在

鈴の肩アーマーがスライドして開く

ピキーン！

—（?! 攻撃！ 右か?!）

— 夏が回避行動をした瞬間、中心の球体が光り地面に何か当たった音がした

鈴「嘘・・・あたしの龍咆を初見からかわすなんて」

— 「悪いが、お前の攻撃は読めてるんでな」

そのころピットでは担任2人と箒、セシリアがいた

箒「なんだあれは？」

セ「「衝撃砲」ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す第三世代型兵器ですわ。それにしても・・・」

箒「?、どうした？」

セ「衝撃砲は砲身と砲弾が目に見えないはずなのに、なぜあもー夏さんは容易く回避しているのかと思って」

箒「確かにそうだな。あいつは初見の回避からまったく当たっていない。何故だ？」

箒（一夏・・・お前は一体）

見えない攻撃を次々回避する一夏に第の疑問が募る

戻ってアリーナ

鈴「このおおおおお!!」

ドドドドドドドドッ!!!!

鈴が龍咆を放つも

—「ふっ!!」

—夏はそれをひらりひらりとかわす

鈴「ああんもおおおお!!当たり前さい一夏!!」

—「それだけは断固辞退する!!」

それは・・・さすがにだめだろ

なかなか攻撃が当たらない鈴は焦っていた

試合が始まってからと言うもの、素人同然の一夏に痛めつけるところか攻撃をことごとくかわされ続けている上に、エネルギーが少々心もとなくなってきたからだ

—「鈴」

鈴「何よ?」

—「そろそろ終わりにさせてもらっ」

ガシャンッ!

—夏は雪片式型を展開する

鈴「やれるもんならやってみなさいよ!」

ジャキンッ!

鈴は青龍刀を構えなおし

—「うおおおおお!」

鈴「はあああああ!」

まさに切り結ばうとしたとき

ズドオオオオオオオオオ!

—・鈴「!?!」

アリーナに衝撃が走った

一夏side

一「なんだ？今の」

さっきの大きな衝撃は・・・鈴じゃないな、範囲も威力も桁違いだしかもステージ中央から煙が上がってる
多分さっきの奴が遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波だったようだ

鈴「一夏！試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

いきなり何言ってるんだ？
と思った矢先、ハイパーセンサーが緊急通告を言ってきた

『ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされていま
す』

所属不明のISか・・・
って待てよ？

確かアリーナのシールドってISと同じやつ使ってるんだよね？
それを「貫通」したっつうことはつまり・・・

一「ピンチってやつだな」

鈴「呑気なこと言ってるじゃないで、一夏、早く！」

逃げろつつつてもな・・・こっちはあっちにロックされてるわけだしな

まあ、千冬姉もすぐに事態の収拾に・・・

ピキーンッ!

ー(?!、来るか?!)

ビュウウウウウウウウーン!!!

ビームか!

ー「ふっ!」

まったく、あぶねえな・・・

幻一郎や翔ほどじゃないから難なく避けたけど

鈴「一夏!大丈夫?!」

ー「大丈夫だ。にしても・・・なんだ、あいつ」

さっきのビームで煙が晴れ、侵入者の姿が見えたんだけど・・・なんだ?この若干不気味な奴は

ー「お前、何者だよ?」
「・・・」

応答なしと、どうすつか?

真「織斑くん!凰さん!今すぐアリーナから脱出してください!す

ぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

突然山田先生が割り込んできた。うーん、心なしかいつもより声に威厳がある

って、そんなこと言ってる場合じゃないか

—「いや、俺たちであいつを片付けます」

実際問題、あいつは遮断シールドを突破してきた。つまり、ここで相手をしなくては観客にも被害が及ぶ可能性がある

だったら、奴を早々に片付ける、もしくは足止めしなくてはならない

真「お、織斑くん?!だ、ダメですよ!生徒さんにもしものことがあつたら・・・」

そこまで聞いたとき、敵が突進してきたので回避やれやれ・・・

—「と言つことだ鈴。手伝ってくれ」

鈴「だ、誰に言ってるのよ。じゃあ、あたしが援護してあげるからその間に攻撃しなさい。武器、それしかないんでしょ?」

—「その通りだ。ま、十分だけどな。じゃあ、行くぞ!」

お互いの武器を当てる音を合図に俺と鈴の即席コンビで飛び出して行った

一方ピットでは・・・

真「もしもし?!織斑くん聞いてます?!凰さんも聞いてますー?!」

千「本人たちがやると言っているのだ、やらせてみていいだろう」

真「お、織斑先生?!何をのんきなことを言ってるんですか?!」

千「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言つてトレーに乗っていたコーヒーに白い粒子を入れて混ぜる

真「あの、先生?それ塩ですけど・・・」

千「・・・・・・・・・・」

ぴたりと動きを止めた

千「何故塩があるんだ?」

真「さ、さあ?あ!やっぱり弟さんが心配なんですわ!だからそんなミスを・・・」

千「・・・・・・・・・・」

ずいっと千冬は黙つて真耶に差し出す

千「山田先生、コーヒーをどうぞ」

真「へ?!あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ・・・」

千「どうぞぞ」

さらにずいっと押し付けられるコーヒー微塩入
真耶は涙目で受け取った

せめて砂糖を倍くらい入れてあげればいいのにな……

真「い、いただきます」(涙)

千「熱いので一気に飲むといい」

鬼かアンタは

セ「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

千「そうしたいところだが、これを見る」

端末の画面を数回叩いて表示される情報を切り替える

映し出されたのはこの第二アリーナのステータスチェックだった

セ「遮断シールドがレベル4に設定？しかも、扉がすべてロックされて……あのISの仕様ですの？！」

千「そのようだ。これでは避難するどころか救援に向かうことが出来ない」

セ「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を」

千「やっている。現在も三年の精鋭がシステムラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

落ち着いたように千冬が話すが、益々募る苛立ちに眉が動く
それを危険信号と受け取ったセシリアは、頭を抑えながらベンチに座ろうとしたとき

セ「？……な？！」

ふと視線をアリーナのステータスチェックを見たセシリアが何かとても驚いた顔をした

千「なんだどうした？そんなに驚いて」

セ「せ、せ、せ、先生！今ロックされた扉が2つ破壊されました！」
千「……………なに？」

見ると確かに敵ISによってロックされた扉が2つ破壊されていた

千「そんな馬鹿な。そうそう破壊できるわけが……………まさかあいつらか？」

セ「あいつらって一体どなたのことを……………って、そういえば篠ノ之さんがいませんわね？」

当の本人はと言つと……………

篝「はあ……………はあ……………はあ……………」

急ぐようにどこかへ向かって走っていた

突如現れた謎のIS

果たして勝負の行方は・・・

第八話 クラス対抗戦 前編（後書き）

どうもすみません

暑くて書く気にならずずっと放置してしまいました

涼しくなればもう少し早くなると思います

一夏の口調をちょっとハム風味にしてみました

今後ともよろしく願います

第九話 クラス対抗戦 中編（前書き）

気づいたらもう1カ月たってたんですね・・・早いもんだ・・・
これ本当は2部構成だったんだけどなあ・・・

感想・アドバイス等ありましたらお願いします

第九話 クラス対抗戦 中編

— 夏side

— 「ふっ！」

さっきから攻撃してるけど、こいつなかなかやるな
鈴の攻撃はほとんどかわしてるし、俺の攻撃も避ける避ける
けど・・・

— 「あいつらほどじゃないな」

まあ、あいつらのほうが馬鹿みたいに強いからなあ
なんだよ全方位攻撃とか、ミサイルの弾幕とか、自分の倍くらいの
太さのビームとか・・・その他諸々
あと確か・・・ものすごくデカイ刀とかな

— 「おつとー！」

危ない危ない。しかし、ちょっとばかりエネルギーが心もとなくな
ってきたな
そもそもな、こいつの燃費悪すぎるだろ・・・頼むぜ束さん・・・
つと、それより早くこいつどうにかしないと

— 「鈴、エネルギーはあとどのくらい残ってる？」

鈴「150つてところね」

わあ・・・俺より残ってるな。ちなみに俺は120つてとこだ

鈴「ちょっと厳しいわね・・・現在の火力でアイツのシールドを突破してダウンさせるには確率的に一桁台つてとこじゃない？」

—「十分だ」

鈴「・・・で、どうすんの？」

—「逃げたきや逃げてもいいぞ。俺だけであいつ真つ二つにしてやつから」

鈴「なつ？！馬鹿にしないでくれる？！あたしはこれでも代表候補生よ！それが尻尾巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ」

代表候補生はプライドの高い奴ばかりだな。それが採用基準とでも？
まあいい

—「そうかい。所で鈴、あいつの動きって何か変じゃないか？」

鈴「何かって何よ？」

—「あれって本当に「人が乗っているのか」？」

鈴「はあ？人が乗らなきゃISは動かな・・・ちょっと待って。そつえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるように聞いているよう・・・」

そつなのだ。鈴の言う通り、アイツはさっきから鈴と会話してるときは攻撃をしてこない

それに、戦つてる時も人間離れた動きもしてたからな

鈴「ううん、でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そついうものだもの」

それは教科書で読んだ。「ISは人が乗らないと絶対に動かない」と書いてあったが本当にそつか？

今の最先端の研究ならそれが不可能かどうか分からない。仮に出来

たとしても、隠していればそれは無いのと同じだ。絶対なんてものはない、「ありえないことは、ありえない」のだからな

—「仮に無人機だったらどうだ？」

鈴「なに？無人機なら勝てるって言っの？」

—「人が乗ってるのより弱いだろ。それに、全力で攻撃しても大丈夫だしな」

そもそも雪片と零落白夜の威力は高すぎるんだよ。下手すると相手の命にも関わるからな

鈴「全力も何も、その攻撃が当たらないじゃない」

—「次は確実に当てる」

鈴「言ったわね。じゃあ、そんなこと絶対あり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

鈴はにやりと不適に笑った

ちなみにこの顔は「間違ってたら駅前のクレープをおごらせる」と言っている顔だ

鈴「一夏。どうしたらいい？」

—「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を最大威力で撃て」

鈴「いいけど、当たらないわよ？」

—「いいんだよ、当たらなくても」

当たらなくてもいいんだよ。ちょっと無茶するだけだからな

鈴「じゃあ、早速っ」「一夏あー!!」「誰?!」

俺が突撃、鈴が砲撃姿勢に入ろうとした瞬間、アリーナに大声が響

いた

声が出た方を見てみると箒の姿が、っておいおいおいおい?!洒落にならんぞ?!

—「あの馬鹿!—!」

どうやって出てきたのかは知らないがそれはまずいって!武器を持たずに戦場に出るようなもんだぞ!

箒「男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!—!—!」

敵I S「・・・・・・」

まずい!非常にまずい!

敵はセンサーレンズを俺たちからそらし、箒をじっと見ている

—「箒、逃げr・・・・」

ビューーーーーンッ!—!—!

ビームが箒に向かって発射されちまった!

くそっ!こっからじゃ間に合わない!

—「箒いい!—!—!—!—!」

もう間に合わないと思ったそのとき

バシーーーン!!

ピキーン!

(?!これは?!あいつか?!)

もう一度箒の方を見るとピンク色のバリアを展開した「あいつ」がいた

「何とか、間に合ったようだな」

幻一郎 side

はあああああああ．．．何とか間に合った
まったく、アホかこいつは。まあいい。間に合ったからな

幻「大丈夫か？ 箒」

箒「あ、ああ。その、すまなかった」

幻「どういたしまして」

しかし、さっきのビームはそこそこ威力があったな
当たってたら間違いなく死んでたか．．．
ん？一夏が来たか

一「箒！大丈夫か？！」

箒「ああ、大丈夫だ。幻一郎が防いでくれたからな」

一「ああ、良かった、箒」ギョツ！

一夏が箒を抱きしめた．．．こんなとこで何やってんだよ．．．

箒「い、一夏？！何を？！」アワアワ（顔真っ赤）

一「お前にビームが発射されたときは死んじまったと思ったんだよ。
もう、本当にだめかと思ったんだからな！」

箒「そ、そうか．．．本当にすまなかった」

一「こんなこともうするなよ？ いいな？」

箒「わかった．．．で、あの、その、そろそろ離してくれないか？
恥ずかしいのだが．．．」（真っ赤か）

一「あ、ああ、悪い。」

まったくこいつもこいつでなんなんだか……ところでお二人
さん、あいつをお忘れでは？

鈴「いいいいいいいいいいいいかあああああ！！！！なあああにやつ
てんのよ〜〜〜！！！」（怒）

一「そうだ、戦闘中だった！！！」

幻「そうゆうことだ。ちゃっちゃと終わらせるぞ」

あのIS自体はそう大して強くないからな

あ、そうそう。忘れてたけど俺が今装備してんのは「ガンダム」だ

一「じゃあ、行ってくるな」

第「ああ……気をつけてな」

と言った直後、敵からエネルギー反応。おおっ、こっちがロックさ
れてる。なんで鈴の方じゃないのさ？
でもそんなの関係ねえ

ゴオオオオー！！！！ ドゴーン！

一「な、なんだ？！」

幻「翔だよ」

あれは……GNメガランチャーだな。威力は3割ってところか？

翔「お兄ちゃん！一夏兄さん！大丈夫だった？」

幻「おう、なんともない。今からそっちに行く」

翔『わかった!』

さあて……ここに来たことを後悔させてやるう。あ、機械だから無理か?

幻「よし、行くぞ一夏!」

一「ああ!行くぞ幻一郎!」

ご退場願おうか、正体不明機さんよ!

場所は戻ってアリーナ

一「待たせたな鈴」

幻「すまんな鈴。遅れちまって」

鈴「まったくよ!特に一夏!あんたは何やってたの!」

一「しょうがないだろ、心配だったんだから」

鈴「……まあいいわ。あとでじっくり話を聞くから」(怒)

鈴はさっきの場面のことにイライラしているようだ

鈴「あたしだってしてほしいのに・・・」ブツブツ

一「うん？なんか言ったか？」

鈴「え？！な、なんでもないわよ！それより、早くあいつを片付け
ちやいましてよ！」

幻「そうだな」

鈴「ところであなたの背中に付いてんのって放熱板？」

幻「それは見てのお楽しみだ。じゃ、行くか」

一・鈴「おう！（ええ！）」

果たして勝負の行方は・・・まあ、4対1だから余裕だろうな

第九話 クラス対抗戦 中編（後書き）

次は戦闘シーンを書きます

そんなわけで幻がエフィールドで防ぎました。ビーム無効化だもんね・・・

かなり気が早いですがラウラ対セシリア・鈴の模擬戦のとき乱入させるのに使う機体に悩んでいます。（原作2巻の中盤あたり）一様候補が

幻一郎

ゴット（途中から明鏡止水モード）

ユニコーン（途中からデストロイモード）

デステイニー（装甲を腕・足・背中の部分のみ展開してSEED覚醒）

ヴェルフエゴール

素手（装備なし。体術のみで圧倒する）

翔

アルケー

エピオン

MAのなんか

とりあえず考えているのはどっちかでどれかを使う
今現在最有力なのは幻一郎・デステイニーです

そのほか意見等ありましたらお願いします

第十話 クラス対抗戦 後編(前書き)

今回はかなり短いです
すみません

感想・アドバイス等ありましたらよろしくお願いします

第十話 クラス対抗戦 後編

鈴「はあああああ！」

幻「そこおおお！」

ー「おおおおお！」

ドドドドドドドドドド！

ビュビュビュビュ！

ガチイン！

衝撃砲、ビームライフル、雪片で攻撃するが防がれるが

幻「甘い！」

ビームサーベルで敵右手を破壊

翔「そこっ！」

ガデツサを装備した翔がGNメガランチャーで砲撃して右足を落とす

ー「うおおおおお！！！」

ガシヤン！

ー夏が雪片を展開して左腕を落とすが

ー「がつ！」

敵の右腕で殴られ、クレーターの端まで飛ばされる

篤・鈴「一夏!!!!」

敵が残った肩の砲門を一夏に向ける

「……………狙いは？」

翔「パーフェクトです。ね？セシリアさん？」

セ「完璧ですわ、翔君」

キユンキユンキユンキユン！

ドオオオオオオオ！

そのとき4つのブルー・ティアーズが敵に一斉に攻撃をし、上から
橙色のビームが敵の頭部を破壊した

ボンッ！と爆発を起こして地上に落下した

幻一郎 side

ああ、やっと終わった

最後のはなかなかぎりぎりのタイミングだったな。ま、流石は代表

候補生だな

セ「ギリギリのタイミングでしたわ」

翔「でもしつかりと決めましたね。流星です、セシリアさん」

セ「だ、代表候補生として当然ですよ」

セシリアは翔に褒められて嬉しそうだ

しっかし、何処の誰だ？無人機なんて物を送ってきたのは・・・まあいい。後は千冬さんたちに任せて・・・

「敵ISの再起動を確認」

・・・しつこい野郎だなこいつ！

しかも狙われてんのは一夏か！

幻「フィン・ファンネル！！！」

翔「落ちろ！」

俺は背中に付いた板「フィン・ファンネル」6機を展開して敵に全方位から攻撃+翔がGNメガランチャーで砲撃した

ドカンっ！とさっきよりやや大きな爆発をして今度こそ沈黙した

謎のIS襲撃から数時間後、学園の地下50メートル。そこはレベル4権限を持つ関係者しか入れない隠された空間
機能を停止した謎のISはすぐさまそこへ運び込まれ、解析が行われていた

そこでは千冬が先ほどのアリーナでの戦闘映像を何度も繰り返し見
ていた

室内は薄暗く、ディスプレイで照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった

「織斑先生」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開くと、ブック型端末を持った真耶の姿が映っていた

千「どうぞ」

許可をもらいドアを開くと真耶はいつもよりきびきびとした動作で入室した

真「あのISの解析結果が出ました」

千「ああ。どうだった？」

真「はい。あれは・・・無人機です」

世界中でISの開発が進む中、未だに完成していない技術、遠隔操リモート・コントロール作と独立稼働。そのどちらか、もしくは両方の技術が使われている。その事実は学園関係者全員にかん口令が敷かれるほどだ

真「どのような方法で動いていたかは不明です。幻一郎君、翔君兄弟の最後の攻撃で機能中枢などの重要な部分が破壊されました。修復もおそらく無理かと」

千「コアはどうだった？」

真「・・・それが、登録されていないコアでした」

千「そうか」

真「何か心当たりがあるんですか？」

千「いや、ない。今はまだ・・・な」

そう言っつて千冬はディスプレイに視線を戻す

かつて世界最強と言われた伝説の操縦者。その鋭い視線はただただ映像を見つめ続けていた

第十話 クラス対抗戦 後編（後書き）

やっと1巻終わった・・・次もがんばろう

そろそろヒロインが揃うといいんだけど・・・

まだまだ募集をしておりますのでそちらもよろしく願います
詳しくは前話後書き参照

第十一話 転校生はプロンド貴公子で幼馴染（前書き）

遅くなりました。申し訳ないです

今回は頑張って見ました

感想・アドバイス等ありましたらお願いします

第十一話 転校生はプロンド貴公子で幼馴染

「ここがIS学園かぁ・・・」

一人の少女のような顔をした「男子制服」を着た者がいた肩には鳥？のような物体が乗っていた

「まさか「僕」が日本に来ることになるなんてね。そういえば、「彼」と別れてから一度も会ってなかったなあ。元気にしてるかな？会えればいいけど・・・ね？」「トリイ」？」

「トリイ！」

「でも・・・さすがにここには居ないよねえ」

「トリイ！」

少年？が少し俯いたとき、トリイと呼ばれた物が羽ばたいていった

「あ！ちよつとトリイ！どこに行くの？！・・・行っちゃった・・・まさか・・・ね？」

少年？は後を追うように学園の敷地に入っていた

謎のIS襲撃事件があった日から早数週間
事件は「実験中のISが暴走した」ということになっていた・・・が
今の女子たちはそんなことよりも、気になることがあった

その日の1年1組

女子「ねえ、あの噂、聞いた？」

女子「何？この間のISのこと？」

女子「じゃなくて、今月のトーナメントで勝つと・・・」

女子「織斑君たちと付き合えるんだって！」

女子「うそ?!まじで?!」

ちよつと離れた場所にいる篤とセシリアは・・・

セ「皆さん、何の話で盛り上がっていらっしやいますの？」

篤「いやぁ・・・私にもさっぱり・・・」

・・・それに近い人物の知らないところでなんだかすごいことになっ
ている様だ

一・幻「おはよう」「」

翔「おはようございますう・・・」

翔は相変わらず眠そうである

幻「なんだか盛り上がりすぎてるなあ？」

一「何盛り上がりすぎてんだ？」

女子達「」「なんでもないよ！！？」」「」

幻・一「「??？」」「」

翔「zzz・・・」

幻「寝るな、起きろ」

翔「ふあゝい」

それと同時に千冬が来た

千「席に着け。HRをはじめろ」

そう言われて生徒たちが席に着いたとき、教室に何かが入り込んだ

千「何だ？」

「トリー！」

鳥のような物だった

セ「鳥ですか？」

篤「いや、それにしても」

一「何かロボットみたいだな？」

女子「かわいい」

その中でも特に反応したのが幻一郎だった

幻「トリー?!」

幻一郎がそう言い、手を差し出すとトリイはその手に降りた

千「何だお前のか。しかし、ここに持ってきていいものではないな」
幻（いや・・・こいつがここに居るわけが・・・まさかここに？あり得なくはないか）

千「まあいい。そいつは授業が終わったら部屋に置いて来い」
幻「わかりました」

そうして、真耶が教卓に立ち、HRが始まった

真「今日はなんと、転校生を紹介します！」

がやがや・・・がやがや

ウィーン

入ってきた転校生を見た瞬間、教室が騒がしくなった。なぜなら・・・

・
？「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしく願います」ニコッ

転校生改め、「シャルル・デュノア」がそう挨拶した

女子「お、男？」

シャ「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を・・・」

キャーーーーー！！！！！！

シャ「うえ?!」

女子「男子! 四人目の男子!」

女子「しかも内のクラス!」

女子「美形! 守ってあげたくなる系の!」

シャルルが男とわかるとクラス中の女子たちが歓声をあげたと同時にシャルルの姿を見て驚いていた者がいた。幻一郎だった

幻「シャ・・・シャル?!」

シャ「ふえ?」

幻一郎の声を聞いたシャルルがそちらを見た瞬間、シャルルも驚きの表情に変わった

シャ「げ・・・幻くん?」

クラス「・・・へ???」

シャルルがそう発した直後・・・

シャ「げ~~~~んく~~~~ん!!!!」

タッタッタッタッタ!! ガシッ!

幻一郎に飛び付いた

クラス「・・・えええ?!!」

幻「おつと!」

シャ「久しぶりだね幻くん!!あれからひとつも連絡がないんだも

ん心配したんだよ?」

と、一気にまくし立てるシャルル。そしてクラス中がさらに騒がしくなった

女子「え?! デュノア君と柳君って知り合い?!」

女子「しかもかなり親しげにお互いを呼んでたということとは?!」

女子「幻×シャル・・・いい・・・すごくいい・・・」

・・・最後何か聞こえたが気にしない

騒がしいクラスに千冬が一言

千「騒ぐな。静かにしろ」

シーン・・・

一言で静かになった・・・すばらしい統率だ

ちなみに、シャルルは教卓のところまで戻っている

千「今日は2組と合同でIS実習を行う。各自はすぐに着替えて、第二グラウンドに集合。それから、柳兄」

幻「はい、何でしょう?」

千「お前はデュノアと知り合いで尚且つ仲がいいようだ。お前が面倒を見てやれ。では解散!」

そう言って場を閉めた千冬

そしてシャルルも幻一郎のそばに行く

シャ「まさか幻くんがここに居るなんて思わなかったよ。これからもよろしくね！」

幻「ああ。っとその前に、女子が着替え始めるから移動しなくちゃな」

といって幻一郎はシャルルの手をとった

シャ「ふわ?!」

幻「?どうした?と急がないとな。行くぞ、翔、一夏」

一「おう」

翔「うにゅ〜・・・」

そうして4人はアリーナの更衣室へ移動を開始・・・・・・・・・・したが

女子「あ!噂の転校生発見!!」

女子「しかも柳君達と一緒に!」

運悪く女子達に見つかってしまったのだ
しかし、シャルルは状況がいまいちよくわかっていなかった

シャ「な?何?」

女子「いた!こっちよ!」

女子「者共!であえであえ!」

で、あつという間に囲まれてしまった

女子「見てみて!柳君とデュノア君手つないでる!」

女子「柳君や織斑君や翔君もいいけどこっちもこっちでいいわね!」

一「ああ・・・どうする?」

幻「・・・こつちだ！」

タツタツタツタツ

女子「ああ〜！逃げた！」

女子「追いかけるのよ！」

女子「待ってえ！せめて写真を一枚！」

待つはずもなく、4人はそのまま目的地まで走る。ひたすら走ったで、何とか逃げ切り到着

シャ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

一「何とか逃げ切ったか」

幻「まったく、毎度毎度疲れるなあ。まあ、仕方ないといえば仕方ないのかもな」

翔「ふわ〜・・・おかげで目が覚めました」

シャ「何で、はあ・・・3人とも、はあ・・・疲れてないの？」

幻「そりゃあ、鍛えてますから」グツ！

一「そういえばちゃんと自己紹介してなかったな。俺は織斑一夏。

一夏と呼んでくれ」

シャ「うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ。じゃあこつちが・・・」

翔「柳翔です」

シャ「そっか、大きくなったね翔君。あの時はまだ小さかったもんね」

翔「そ、そうですか？」

ちよつと恥ずかしそうにしている翔

自己紹介も終わったところで、時計を見た一夏と幻一郎があわてて

一「うつわ！時間やばいな！すぐに着替えちまおうぜ！」
幻「やばいな。とっとと着替えよう」
翔「そうですね」

三人は服を脱いで上半身裸になった

シャ「うわぁ！・・・あう・・・あう」

それを見たシャルルは顔を手で覆い、背を向ける

一「どうした？早く着替えないと遅れるぞ？」
そっだ・・・シャルルは

幻

シャ「わかった。わかったからあっち向いてて！」

一「？何でもいいけど急げよ・・・」

幻「ああ、急げ・・・よ」

次に幻一郎と一夏が見たときにはすでに着替え終えたシャルルがいた

一「着替えるの早いな。なんかコツでもあるのか？」

シャ「え？！いいいやあ。あは・・・あははは」

幻「早く行かないと本当に遅れるぞ？」

シャ「う、うん、そうだね・・・あれ？幻くんと翔くんのスーツって僕達とはだいぶ違うね？」

一夏とシャルルがヘソ出しの上下ピッチリした物なのに対し、幻一郎と翔は首から足先まで、頭以外の全身を覆うパイロットが着るようなタイプだった

幻「まあ、俺達の場合普通のISとは違ってGが多少掛かるからな。これは体を保護するためみたいなものだ」

シャ「へえ、そうなんだ。あ、もう行かないとまずいね。行くところか？」
幻「そうだな」

まあ、その後は何とか授業の方には間に合ったようだ

場所は変わって第二グラウンド

そこでは1組と2組の生徒たちがそれぞれのISスーツに着替えて整列していた

その中でもやっぱり幻一郎と翔はかなり目立っており、ちらちらと見られていた

ちなみに、当然といえば当然ながら先生はジャージである
しかし、このグラウンド・・・すごく広いな

千「本日から実習を開始する」

生徒達「はい！！！！」

千「まずは、戦闘を実演してもらおう。鳳！オルコット！」

鈴「はい！」

セ「はい！」

千「専用機持ちなら、すぐに始められるだろう。前に出る！」

鈴「めんどいなあ。何であたしが」

セ「はあ。何か、こう言うのは見世物のようで気が進みませんわね」

千「お前ら少しはやる気を出せ。あいつらに良いところを見せられるぞ？」

鈴・セ「「?!」」

と言われ突如やる気になった二人

セ「ここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの
出番ですわね！」

鈴「実力の違いを見せ付けるいい機会よねえ！専用機持ちの！」

生徒達「「「「「「（汗）」」」」」

シャ「今先生なんて言ったの？」

幻「・・・まあ・・・大体の予想は付くがな・・・」

態度の急変に少々驚きつつも授業は続く

セ「それでお相手は？鈴さんとの勝負でもかまいませんか？」

鈴「ふふ〜ん。こっちのセリフ。返り討ちよ」

千「慌てるなバカ共。対戦相手は・・・」

と言った直後

ヒュ〜〜〜〜〜〜ン

と言う音とともに何かが落下してきた

生徒達は何だ何だ？と周りをきよるきよると見ていると

「「「わあああああああ！！」」

声の方を見てみると、IS「ラファール・リヴァイヴ」を装備した
真耶であった
結構すごい速度で落下している

真「ど、退いてくださ〜〜い!!!」

みんな退避する中、落下点に1人

翔「ほえ？」

ズドーーーーーン!!!

翔「ふみゆ!？」

ものの見事に巻き込まれてしまった

真「だ、大丈夫ですか翔君?!」

翔「きゅ〜・・・」

翔は真耶の胸の上でのびていた

五分後・・・

翔「酷い目にありました」（セシリアさんだったらいいのに・・・）
真「本当にごめんなさい・・・」

何はともあれ、翔が復活して授業再開

千「さて、小娘共。さつさとはじめるぞ」

セ「え？あ、あの、2対1で？」

鈴「いや、さすがにそれは・・・」

千「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

セ・鈴「む」

千「では・・・はじめ！！」

数分後、回避していたセシリアが鈴にぶつかったところにグレネードを打ち込まれて撃墜

千「これで諸君にも、教員の实力は理解できた。以後は敬意を持って接するように。では次に・・・」

と言いつめて、柳兄弟を見る

千「そうだな・・・折角だ、柳兄弟！」

幻・翔「はい？」

千「お前達2人と凰・オルコット・山田君の組で模擬戦をしてみようか」

鈴・セ・真「はい？」

生徒「え？3対2？」

生徒「それはちょっときついんじゃない？」

幻「了解」

翔「わかりました」

千「よし、では準備しろ」

突如として柳兄弟VS鈴・セシリア・真耶のチームによる模擬戦が始まった

幻「よし、ヘビーアームズカスタムを使う」

翔「レオパルドデストロイで行きましょう」

2人がISを展開した

幻一郎は両腕に2門のガトリング砲「ダブルガトリング」を装備した顔の右半分にピエロの面を付けた青い機体

翔は右肩に砲門、背中にバツクパックを付けた赤い機体
どちらも重装備な機体である

鈴「なんか、すごい装備ね」

真「両腕にガトリング砲って・・・」

セ「物量で押すタイプですわね」

展開された機体を見た3人はそれぞれの感想を言う

千「準備はいいか？」

幻「いつでも」

翔「OKです」

千「では・・・はじめ！」

開始と同時に翔が右腕の「リストビーム砲」を放ちながら地上を滑走平行して幻一郎は上昇して移動しながら右腕のガトリングをばら撒く

3人「「「！！！！」」」

3人は一斉に回避する

鈴「やっぱりビーム兵器！」

真「しかもこの威力！」

セ「当たったら痛いですわね」

真「散開しつつ攻撃してください！」

先生である真耶が指示を出しつつ、攻撃を開始する

幻「翔、お前はセシリアを頼む。俺は2人を抑える」

翔「了解！」

幻一郎が鈴と真耶に両方のガトリング砲をばら撒き、翔が背中 of 「ツインビームシリンダー」の右側のガトリングに持ち替えて攻撃

真「くっ！」

鈴「この量じゃ近づけない！」

2人が回避に専念している中、幻一郎が両肩と腰に装備された「マイクロミサイル」と足の「ホーミングミサイル」を計80近くを放つ

鈴「ちよ?!何その数?!」

千「さて、授業を再開する。グループになって実習してもらおう。
リーダーは専用機持ちがやること。では別れる！」

そうして、グループに別れて実習が始まった

一「それじゃあ、出席番号順にISの装着と起動、歩行までやろう。
一番目は……」

女子「はいはいはい！出席番号1番、相川清香！ハンドボール部。
趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ。よろしくお願いします！」

といって手を差し出す

一「……は？」

女子「あ〜んずる〜い！」

女子「あたしも！」

女子「あたしもー!!」

女子達「……第一印象から決めました!!!」

一「……」(汗)

突然のことに困惑する一夏。すると……

「……お願いします!!」「……」

他からも同じような声が。そっちを見てみると

シャ「え?……ええつと……」

翔「う、う〜んと……」

幻「ああ……えつと……」

3人が同じような状態になっていた

—「俺達これから大変だなあ・・・」(汗)

それでも授業は続いてく

ウィーン　ウィーン　ウィーン

ちょっとした騒動がありつつもISの歩行訓練を行っていた

—「そうそう、うまいうまい。じゃあ止まってみて」

ウィーン　ウィーン・・・ガシヤン

—「OK、次の人に交代だ」

女子「ふう・・・緊張したあ」

そして、ISを「立てたまま」降りた

—「次は誰？」

第「私だ。しかし、これではコクピットに届かないのだが？」

確かに届かない。とそこへ真耶が

真「ああ。最初に良くある失敗ですね。織斑君、乗せてあげてください」

箒「な?!何?!!!」

真「織斑君、白式でコクピットまで運んであげてください」

女子達「「えええええ?!!!」」

箒「は、運ぶのか?私を?」

「「しょうがないな。しっかり掴まってるよ?」

白式を装備して箒を俗に言う「お姫様抱っこ」をした

箒「ふえ?!ああ!」

女子達「「あああ!」」

箒は恥ずかしいのかうれいいのか、頬を少し赤く染めていた

箒(これが伝説の・・・お姫様抱っこと言うやつか!)(ドキドキ

恋する乙女の夢がひとつ叶ったときであった

一方そのころ他のところでも・・・

シャ「え〜つと・・・」

女子「デュノア君運んで!」

シャ「ああ・・・うん、わかった」

翔のところで

女子「翔君お願い！」

翔「はい」

トルギスを装備して同じように運ぶ
で、もちろん……

幻一郎 side

今俺の目の前にも立ったままのISが……なぐぜ〜じゃ〜？

女子「柳君私も！」

やっぱりこうなるよねえ……

女子「フリーダムでお願い！」

女子「そこはエクシア様でしょ！」

女子「どっちもいいわあ。天使みたいで……」

しかも機体の注文までしてきやがった？！

確かに機体のバリエーションは多いけどさ……

って言うかエクシア「様」ってなんだよ？「様」って？

幻「はあ〜……こうなったのも奴のせいだ」

と言いながら一夏の方を見るとコクピットで箒と話していた

そのとき、ふと視線を感じたのでそつちを見てみると

シャ「ジーーーーー……」

シャルに見られていた。お返しに微笑み返しを試みた

シャ「?!、~~~~~っ!」カァァ

おや、顔を赤くしてしまったようだ……で、これどうしようか?

早く授業が終わらないかね?

おまけ

授業後のお昼時。男子4人と女子3人のグループが屋上で食事をしていた

言わずもがないつものグループである

セ「翔君、わたくしが作ったサンドイッチ食べてくださいな」

翔「はい!いただきます」

パクッ! ピタッ!!

翔「……」

一口食べてピタリと動きが止まった翔。一体どうした？

セ「いかがです？翔君？」

翔「……」

セ「なんですか？」

すごい間をあけた後翔が言った一言

翔「しばくど？」（怒）

セ「へ？」

翔「ちよつとお話しましょうか？」ニコニコ（怒）

セ「へ?!あの、翔君?!」

セシリアは翔に引きずられてどこかへ消えた

第十一話 転校生はプロンド貴公子で幼馴染（後書き）

お久しぶりです

なかなか忙しくて書けませんでした

シャルルが幻一郎がIS学園にいるのを知らなかったのは兄弟のことが報道されていなかったからです

トリーはシャルルに幻一郎がプレゼントしたものです

幻一郎と翔が着ていたISスーツは・・・

幻一郎 種死の時のキラのパイロットスーツ

翔 同じく種死の時のアスランのパイロットスーツもしくはザフトレッドのスーツです。

これからも頑張ってみます

応援よろしくお願いします

第十二話 秘密と告白と・・・また転校生？（前書き）

久しぶりに更新です

感想・アドバイス等ありましたらお願いします

第十二話 秘密と告白と・・・また転校生？

あの騒々しい授業が終わった放課後。幻一郎とシャルルは自分の部屋、もとい一緒の部屋にいた

1人で2人部屋を使っていた幻一郎だったのでまあ、当然と言えば当然である

が、問題はそこではなく・・・

幻一郎 side

幻「しかし、本当に久しぶりだな？シャル」

シャ「うん、本当にね。あれからもう6年がたったんだね・・・」

授業が終わった俺とシャルは部屋に戻ってきた

・・・教室で大変な目にあったからな・・・

それとはかく、今は俺が入れたお茶（ちなみに煎茶ではなく玄米茶だ。理由は個人的にそっちの方が好きだから）を飲んで一服していた

ちなみにセシリアは緑茶が苦手だそうだ

シャ「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

幻「それは何よりだ」

向こうじゃお茶と言えば紅茶だったからな。懐かしいもんだな

そうだ・・・

幻「そういえば、お袋さんは元気にしてるか？」

と、俺が聞くとシャルは俯いてしまった
どうしたんだ？

シャ「・・・お母さんは・・・亡くなったんだ。2年前に」

幻「・・・そうだったか。すまん」

シャ「ううん、気にしないで」

とても優しい人だったな。俺や翔、妹達にも良くしてくれた人だ
だが・・・何故「デュノア性」なんだ？

幻「なあシャル。何故名字がデュノアなんだ？」

俺がおもむろに聞いてみると・・・

シャ「・・・それわね、幻くん。「私」がデュノア社の社長の子だ
からだよ。まあ、正確には愛人の子、なんだ」

幻「・・・」

そう言う事だったか。確かにシャルの父親を見たことがなかったが、
愛人の子とはな・・・

だが、それではシャルが「男性と偽ってIS学園に来る」理由には
ならない・・・待てよ？

確か今デュノア社は経営危機に陥っていたな・・・

シャ「ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやって
きたの。それで色々と検査する過程でIS適正が高いことが分かっ

て、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

俺の疑問を解消するようにシャルが話した

本当は言いたくはないんだろうけど、それでも健気に話してくれた

シャ「父に会ったのは2回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、1度だけ本邸に呼ばれたんだ。あの時はひどかったなあ。本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って言われて殴られたよ。参るよね。母さんも少しくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

そう言つて愛想笑いを浮かべるシャルだが、声はちつとも笑つていなかった

話を聞いていた俺は怒りが湧いてきたが我慢して聞いた

シャ「それから少し経つて、デュノア社は経営危機に陥つたの」

幻「……………欧州連合の統合防衛計画『イグニツション・プラン』か」

シャ「うん、デュノア社でも第3世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第2世代最後発だったから、圧倒的にデータも時間も不足してなかなか形にならなかったんだよ。政府からの通達で予算を大幅にカット。そして、次のトライアルで選ばれなかつたら援助は全面カットされた上、IS開発許可も剥奪する流れになったの」

幻「じゃあ、男装してまでここに来たのは……………」

シャ「そう、注目を浴びるための広告塔。そして……………」

幻「男性IS操縦者の使用機体と本人のデータ収集……………か？」

シャ「そう、そのデータを盗んでこいって言われているんだよ。僕は、あの人に……………」

どこか苛立ちを含んだ声で言ったシャル

父親のことを他人行儀に話すのは、父親ではなく他人だからと自分の中で区別するためか……

シャ「こんなところかな。でも幻くんがここにいたのは驚いたよ」

幻「まあ、俺も非公式だからな」

自分が「女性」であるとばれた場合シャルは……

シャ「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。きつと僕は本国に呼び出されるだろうね。デュノア社はどうなるか分からないけど……僕にはどうでもいいことかな」

幻「お前は……これからどうするんだ？」

シャ「……時間の問題かな。フランス政府も真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて……良くて牢屋とかじゃないかな」

幻「それで良いのか？」

シャ「僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

そう言つてシャルは微笑むが、それはとても痛々しいものだった
何もかもを諦めたようなような、そんな表情

俺は……シャルに何をしてやれるのか……そうだあれだ

幻「なら、ここにいればいい」

シャ「え？」

幻「特記事項第21、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。ということとは、学園にいれば少なくとも3年間は大丈夫ということだ。」

その間に解決できる方法を探せばいい」

シャ「幻くん、よく覚えられたね。特記事項つて55個もあるのに」

幻「これでも勤勉なのさ、俺は」

シャ「そうだね。ふふふっ」

ようやく笑ってくれたな・・・屈託が無い、15歳の女の子の笑顔だ
やっぱりシャルは笑顔が可愛いんだよな

それになシャル。俺は・・・

幻「それにな、シャル」

シャ「うん、なに？」

幻「もし、方法が見つからなかったとしても・・・」
シャ「うん？」

ギュツ！

俺は強くシャルを抱きしめた

シャ「ふえ?!げ、幻くん?!!!」カアアア

幻「君は・・・俺が守る」

シャ「え?・・・」

幻「君は、俺が守るから!」

シャ「幻くん・・・」ポロポロ

そうだ、俺が守る。それが・・・たとえ世界を敵に回しても
シャルが・・・シャルロットが・・・

幻「・・・シャル」

シャル「ぐすつ・・・なに？」

幻「・・・君が好きだ」

シャル「え？」

幻「君が好きだ。出会った時からずっと」

シャル「げ、幻くん／＼」（真っ赤）

シャルは、どうなんだ？

シャルの気持ちは・・・

シャル「うん、私も・・・グスツ・・・幻くんが好きです」

幻「・・・シャル」

シャル「幻くん・・・」

俺とシャルの距離が縮まり・・・

幻・シャル「んっ」「チュッ

キスをした

幻「はははっ／＼／」（真っ赤）

シャル「えへへっ／＼／」（同じく真っ赤）

幻「な、なんか・・・恥ずかしいな」

シャル「そ、そうだね・・・でも、うれしいなあ」

そっか・・・喜んでもらえて何よりだ

そして、どちらとも無くもっ一度しよう近づいたとき

トントントン

翔「お兄ちゃんいる？」

セ「夕食をまだ取られていないようですけど、具合でも悪いのですか？」

突然のノックと呼び声に2人揃って身をすくめた
今の状況を見られると非常にまずい！

シャ「ど、どどどしよう?!」

幻「ベッドで布団を被れば大丈夫だ！」

サツ サツ サツ バサツ

シャルをベッドに寝かせて布団を被せた・・・ところで
ガチャッとドアが開く音がした

翔「?どうしたの？」

セ「どうかなさいましたの？」

幻「あ、ああ、シャルが何か風邪っぽいから寝かせてやったんだよ」

シャ「ごほつごほつ」

セ「あら、そうでしたの。では、わたくしたちは既に済ませましたので早々にお暇させていただきますね。では、行きましようか翔君」

翔「はい。じゃあお大事に」

シャ「うん、ありがとう」

と言つて部屋を出て行った2人
あぶねえあぶねえ。危つくばれるところだった

だが、言ってしまった以上、シャルが食堂へ行くのはちよつとまずいな・・・しょうがない

幻「食堂でなんか貰ってくるよ。ちよつと待っていてくれ」
シャ「うん、わかった」

さあて・・・食堂に行くか。
無事に帰ってこれるかな？

15分後・・・

幻「た、ただいま」ゲツタリ

シャ「おかえり・・・ってどうしたの？」

幻「ああ、食堂に付いた途端にお前との関係付いて根掘り葉掘り聞かれてな・・・」

シャ「あ、それは・・・ごめん」

幻「気にするな。それよりお腹空いただろ？焼き魚定食を貰ってきたけど、食べられるか？」

シャ「うん、ありがとう。いただくよ」

笑顔でトレイを受け取ったシャルだったが、テーブルに置いたところで固まった

幻「どうした？」

シャル「え、えーと」

幻「冷めるぞ？」

シャル「そ、そうだね。いただきます」

そういつて食べ始めるシャルだったが

シャル「あっ」「ぽろっ

おかずを落とす

シャル「あっ、あっ」「ぽろっ ぽろっ

またおかずを落とすシャル。どうもうまく掴むことができないようだ

幻「箸苦手なのか？」

シャル「うん・・・練習は、してるんだけどね。あっ」「ぽろっ

言ってる傍からまた落とした。しょうがない

幻「ほら、箸貸してみる」

シャル「え？い、いいよ、そんな」

幻「遠慮するな・・・俺とシャルの仲だろ？存分に頼って甘えてくれ」

シャル「あ・・・うん／＼」「カァァ

・・・正直自分で言ってるで恥ずかしいな、おい
まあでも、シャルは最後まで誰かに甘えろと言ったことが無かったの
かもな

幻「はい、あーん」

シャル「あ、あーん」

なんかいいなこれ
もぐもぐと咀嚼するシャルはどこか小動物のような感じがして可愛らしい

幻「うまいか？」

シャル「う、うん。おいしいね。じゃ、じゃあ次はご飯がいいな」

再び箸で一口分を摘み、手を添えてシャルの口へ運ぶ

幻「あーん」

シャル「あむ・・・」パクッ

何か楽しいな、これ

こんな感じで最後まで食べさせることになった。食事が終わった後は昔話を少々していたら、シャルが船をこぎ始めたのでそこでお開きにした

のだが・・・寝るときに・・・

シャル「い、一緒に寝てくれる？」

と言われてどきまぎしたが、シャルにとっては今の精一杯の甘え方なのだろうと思い、まあ・・・一緒に寝た本当に一緒に寝ただけだからな？

その後、シャルの寝顔を見たときに改めてこの子を守ると堅く自分に誓って眠りについた

・・・のだが。翌日、まさかあいつも来るとは思わなかった

翌日・・・

場所はいつもの教室

生徒達がざわついていた。そのわけは・・・

真「ええ〜つと、きよ、今日もうれしいお知らせがあります。また
1人、クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生。ラウ
ラ・ボーデヴィツヒさんです」

ざわざわざわ

女子「どういうこと?」

女子「2日連続で転校生だなんて」

女子「いくらなんでも変じゃない？」

まあ、確かに連続で転校生が来るなど稀といつかなんといつか、である

真「み、皆さんお静かに！まだ自己紹介が終わっていませんから！」

千「挨拶をしる、ラウラ」

ラ「はい、教官」

—（教官？と言うことは・・・千冬姉がドイツにいたころの）
ラ「ラウラ・ボーデヴィッツだ」

シーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

真「あ、あのお・・・以上、ですか？」
ラ「以上だ」

そしてラウラは一夏を見つけると

ラ「！貴様が！」
—「うん？」

ラウラが一夏に近づき平手打ちをした・・・が

スカッ

ラ「な?!くっ」

一夏がかわして外れたのもう一回

スカッ

ラ「このっ!」

またかわされたのもう一度したとき

パシッ

一夏が握手をするような形で手を取った

ラ「な!」

一「織斑一夏だ。よろしくな」

ラ「くっ!」

ラウラは一夏の手を振りほどいた

一「なんだよ?」

ラ「認めない。貴様があの人弟であるなど!認めてなるものか!」

一「・・・そうかい」

また一波乱起こる予感がした

幻(はあ、相変わらずか・・・まったく)

事情を良く知る幻一郎は1人あきれていた

時は過ぎて放課後のアリーナ
そこで男子4人と女子3人（まあ、いつものグループである）が自
主訓練をしていた

篤・鈴「何でわからん（ないのよ）！」
—「わかるか！」

こっちは悪戦苦闘している

セ「翔君。ビット兵器操作のコツなどを教えてくださる？」
翔「はい！あ、でも操作方法が若干違うかも知れませんがいいで
すか？」
セ「大丈夫ですよ」

こっちは和気藹々と進んでいるようだ。でもう一組は・・・

幻「さあて、どうすつか？」
シャ「幻くん」
幻「うん？」

幻一郎が声のしたほうを見ると、専用機『ラファール・リヴァイヴ・
カスタム？』を装備したシャルルがいた

シャ「ちよつと相手をしてもらえないかな？1度幻くんと戦ってみ
たかったんだ」

幻「おう、わかった。じゃあ準備する」

2人が準備をしていると周りにいた生徒達が騒ぎ始めた

女子「ねえ、みてみて！お兄さんとデュノア君がやるみたいよ！」

女子「わあ！」

女子「デュノア君の専用機ってラファール・リヴァイヴよね！」

女子「フランスの第二世代型IS！」

専用機持ちどうしの模擬戦をみたいようだ

幻「来い、インパルス！」

幻一郎が出したのはメタリックグレーの色をしたライフルとシールドを装備した機体「インパルスガンダム」

シャ「すごい・・・それが幻くんの機体？フルスキン全身装甲のISなんて見たことないよ！」

幻「このタイプを使うのは俺と翔くらいだからなあ」

そして、向かい合うように立つ2人

シャ「じゃあ、行くよ幻くん！」

幻「来い！」

少しの間のと2人は同時に動いた

幻・シャル「はあああ!!」

シールドを前に出し突撃、所謂シールドアタックだ
それを幻一郎が弾く

シャル「くっ!」

シャルルは上昇し、それを幻一郎が追いかける
ある程度上昇したところで、シャルルはマシンガンを出し、幻一郎
に向け発射するが回避する

女子「わあ!」

女子「すごい!」

生徒達は大興奮でみている

シャル「ならこれで!」

さらにショットガンを出現させ発射する

幻「なるほど・・・なら、加減はしない!」

幻一郎はさらに上昇し、回避する

シャル「なにを?」

幻「シャル、これがインパルスのだ。フォースシルエツト!」

すると、インパルスの背中にブースターが装着され、グレーの装甲
が白と青を中心とした色になり、両目が光った後、盾が展開された

シャ「色が変わった？けどそれだけなら！」

ショットガンを撃つが装甲に弾かれた

シャ「そんな？！効いてない？！」

幻「そこっ！」

幻一郎はビームライフルを放つ

女子「うそ？！あれって！」

女子「ビーム兵器？！」

先生「まだ実用化にはいたってないはずなのに?!」

アリーナにいる生徒はもちろん先生も驚いている

その間、幻一郎は高速で移動して牽制する

シャ「くっ！早い！」

幻「どんどん行くぞ！ブラストシルエット！」

背中ブースターが消えて、今度は緑色の装備が装着され、機体の色が白と緑中心に変わった

鈴「色が変わった！」

篝「その場での装備の換装だど?!」

幻「打ち抜く！」

背中装備から腰辺りのビーム砲「ケルベロス」肩辺りにレールガン「デリュージー」を放つ

シャ「わああ!」

幻「最後だ。ソードシルエツト！」

今度は剣が付いた装備を付け、色も白と赤中心になる

そして、レーザー対艦刀「エクスカリバー」両手に構え振り下ろす

幻「はあああー!!」

シャ「うああああー!!」

リヴァイブのエネルギー尽きて終了した

シャ「あゝあ。負けちゃった。強いね幻くん」

幻「機体が良いからな」

シャ「実弾が効かないのは卑怯じゃない？」

幻「ただ、その間はエネルギーが徐々に減っていくんだよ。15%

をきいたら強制解除されるしな」

シャ「でも楽しかったよ。またお願いしてもいいかな？」

幻「いつでも来い」

なんだか幼馴染と言うより恋人に近いような空気が・・・気のせい
か？

女子「なんだか・・・いい感じね」

女子「デユノア君が羨ましい・・・」

女子「幻×シャル・・・ジュルリ」

・・・またなんか聞こえたが気にしない

だがそんな時、急に場内が騒がしくなった

女子「ねえ、ちょっとあれ・・・」

女子「ウソッ、ドイツの第3世代型だ！」

女子「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

注目の視線の先、そこにいたのは

ラ「……………」

もう1人の転校生ラウラ・ボーデヴィツヒ
自らの専用機を装備して佇んでいた

一夏side

佇んでいた転校生が突然しゃべった

ラ「……おい、織斑一夏」

一「おう、なんだ？」

俺はできるだけフレンドリーに返した
周囲は様子を見ているようだ

ラ「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

一「戦う理由がねえよ」

ラ「貴様になくとも私にはある」

まあ、そうだろうな。ドイツ、千冬姉で思いつくのはモンド・グロ
ッゾの決勝戦ことだろう

正直はつきりと覚えている。どういつ目的があったのか分からない

が、俺はそのときに誘拐されたんだ

そのときおれを助けに来てくれたのが千冬姉だった。俺のことを聞いて、文字通り飛んできたらしい

当然、千冬姉の大会2連覇はならなかった

俺の誘拐事件は一般には公表されていない。そして、俺の監禁場所の情報を提供したドイツ軍に借りを返すために1年ちよつとの間、千冬姉はドイツ軍のIS部隊で教官をしていた

その後少して千冬姉は突如現役引退。そして現在に至ると言うことだ

ラ「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を・・・貴様の存在を認めない」

ま、気持ちは分からなくもない。正直俺もあの日の自分の無力さが許せない

だが、それは戦う理由にはならない。そもそも、俺はやる気がない

一「また今度な」

ラウラに背を向けて帰ろうとしたとき

ラ「ふん。ならば・・・戦わざるを得ないようにしてやる！」

そう言うなり、俺に向かって左肩（相手からしたら右肩）の大型の実弾砲が放たれた

篤・鈴「一夏ー!」

一「やれやれ、こっちはする気ないのにな。しょうがない」

一「はあー!」

ガドンッ!!!

みんな（幻一郎と翔を除く）「「「?!」「」」

なにをしたかって？

「雪片」で砲弾を「叩き落したんだよ」

—「ふっ!!!」

シュンッ チャキッ

ラ「な?!」

イグニッション・ブースト
瞬時加速をしてラウラの首に剣を寸止めした
何かみんなびっくりしてるな・・・まいいか

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

そこに先生の放送が入った

俺は剣を納めてラウラから離れた

—「じゃあな」

ラ「・・・今日は引こう」

ラウラはアリーナゲートへと去っていった

先生が待っているだろうけど、性格かして無視しそつだな

幻「災難だったな一夏」

「ちつともそんなこと思ってないくせによく言っ
翔「じゃあ、もう上がりましょうか」
幻「そうだな」

さあてと、さつさと飯食って寝るかな

ラウラside

私は先ほどの織斑一夏の動きが気になっていた
あの動きは国家の代表、いやそれ以上か？
とにかく1日2日で身に付くものではない。しかもあのイグニッシ
ヨン・ブースト・・・あの速さは見ることがない
・・・いや、そんなものは関係ない
奴は討つ。それだけだ

おまけ

男性人にはうれしいことがあった
更衣室でのこと

一「はーっ、風呂に入りてえ」

幻「同感だ」

翔「そうですねえ」

今は真耶が大浴場のタイムテーブルを組み直しているらしい
そうこう言ってるうちに着替え終わってしまった
そんな時・・・

真「あのー、皆さんいますか？」

幻「シャル以外はいます」

真「入っても大丈夫ですか？」

翔「大丈夫ですよ。着替えは終わってますから」

真「それじゃあ、失礼しますね？」

ドアが開いて真耶が入ってきた

真「デュノア君は一緒じゃないんですか？」

幻「アリーナにいますけど、大事なことなら呼びますよ？」

真「いえ、そこまでのことではないので伝えておいてください。え
つとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間帯
別にすると色々問題が起きそうなので、男子は週二回の使用日を設
けることにしました」

幻・一・翔「「「本当ですか！！！！」」」

こうしてお風呂に入れることになったのであった

第十二話 秘密と告白と・・・また転校生？（後書き）

あれえ？・・・告白はもうちょっとさきになるはずだったのになあ
・
・

まいいや

トーナメントの組み合わせを

ラウラ・篝VS一夏・翔

ラウラ・？VS幻・シャル

ラウラ・篝VS一夏・幻

のどれかでやりたいと思います

読んでいただきありがとうございます

第十三話 運命の墮天使（前書き）

どうもお久しぶりです

ちょっと短めになっています

感想・アドバイス・訂正等ありましたら感想へお願いします

第十三話 運命の墮天使

転校生が来た次の月曜日の放課後、第3アリーナ
そこではセシリアと鈴がいた

鈴「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて
特訓するんだけど」

セ「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

2人の間に火花が散っている
どっちも優勝を狙っているようだ

鈴「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが
上なのかはつきりさせとくつても悪くないわね」

セ「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強いく
より優雅であるか、この場ではつきりとさせましようではありませ
んか」

それぞれのメインウエポンを呼び出して対峙する
と、そのとき。超音速の砲弾が飛来してきた

セ・鈴「「?!」「」

緊急回避のあと、飛んできた方向を見ると、そこにはドイツ第3世
代「シュヴァルツァ・レーゲン」を纏ったラウラ・ボーデヴィッ
ヒであった

鈴「どういつつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴とセシリアは各武装を準戦闘準備状態へシフトした

ラ「中国の「甲龍」にイギリスの「ブルー・ティアーズ」か・・・データで見た時の方がまだ強そうではあったな。2人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとは、よほど人材不足と見える。数くらいしか脳のない国と、古いだけが取り柄のくにはな」

その言葉に切れて二人は最終安全装置を解除した

鈴「どうやらスクラップがお望みのようね。どっちが先にやるかジヤンケンしよ」

セ「わたくしとしてはどちらでもいいのですが」

ラ「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬共に尻を振るようなメスに、この私が負けるものか」

堪忍袋の緒が切れた二人は自分の獲物を握り締めた

セ「あの子の侮辱は許しませんわよ！」

ラ「どうでもいい。とっとかかって来い」

セ・鈴「上等！！」

それと同じくらいの時刻

男子4人と箒が訓練のためにアリーナへ向かっていた

シャ「幻くん、今日も放課後訓練するよね？」

幻「もちろんだ。どっちかつつと一夏の特訓だけだな」

一「ISに少しでも慣れとかないな」

翔「今日使えるアリーナは確か・・・」

箒「第3アリーナだ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦もできるだろう」

そうして5人がアリーナへ向かって近づくにつれて何故か騒がしくなっていく

しかも、そのアリーナへ向かって走っていく生徒も多い

どうやら目的地で騒ぎが起きているようだ

女子「第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦やってるって！」

と言う声が通り過ぎた生徒から聞こえた

一「候補生3人つてまさか」

翔「セシリアさん、確か第3アリーナでって・・・」

幻「とにかく急ぐぞ！」

シャ「うん！」

観客席に着いたときに大きな爆発音した
その方向を見ると煙が晴れて現れた

女子「あれって、鳳さんとオルコットさんだ！」
女子「ラウラ・ボーデヴィッツヒモ」

どうやら2対1の模擬戦のようだが追い込まれているのは2人の方だった

鈴「くらえっ！」

ラ「無駄だ。このシュヴァルツエア・レーゲンの「停止結界」の前ではな」

鈴が龍砲を放つがその弾丸がラウラに届くことはなかった

—「龍砲を止めやがった?!」

シャ「・・・A I Cだ」

第「慣性停止能力とも言う」

再度鈴は龍砲を放つが、回避されるかA I Cで防がれる

鈴「くっ！まさかここまで相性が悪いなんて！」

ラウラはすぐに攻勢に転じて肩に搭載されたワイヤーブレードを射出して鈴の右足を捕らえた

ラ「この程度仕上がりで第3世代型とは、笑わせる」

セ「そうそう何度もやらせませんわ！」

セシリアのビットとライフルの攻撃を回避しながらラウラはA I Cでビットの動きを止めた

セ「動きが止まりましたわね！」

ラ「貴様もな」

セシリアが狙撃するがラウラの砲撃で相殺される
あおのままラウラは先ほど捕らえた鈴をセシリアにぶつける

セ・鈴「きゃあああああ!」

ぶつかった二人はそのまま地上へ落下。そこへ追撃するラウラ

鈴「くっ!」

ラ「甘いな。この状況でウエイトのある空間圧兵器を使うとは」

龍砲を発射しようとしたところで砲撃によって爆散した

その直後、セシリアはビットミサイルを発射した

ラ「なっ?!」

かわしきれずに直撃する

その隙に離脱して立て直す2人

鈴「この至近距離でミサイルだなんて。無茶するわね、アンタ」
セ「苦情はあとで。けれど、これなら確実にダメージが・・・」

セシリアの言葉が止まる

煙が晴れ、そこに佇んでいたのは、ほぼ無傷のラウラだった

ラ「終わりか?ならば・・・私の番だ」

ワイヤーブレードを射出し、2人を捕らえたラウラは自分の元に戻り寄せる

そこからはただ一方的に2人に攻撃を加える

セ・鈴「あああああ!!!!」

翔「セシリアさん!!!!」

ほぼ全身にラウラの拳が叩き込まれ、レッドゾーン機体維持警告域を超えて操縦者生命危険域へと到達する

このままISが強制解除されるようなことがあれば本当に生命に関わる

シャ「ひどい!あれじゃシールドエネルギーが持たないよ!」

「やめろラウラ!やめろ!!!!」

それでも尚、ラウラは手を止めない

淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく
その時、普段と変わらないラウラの無表情が愉悦に口元を歪めた瞬間

「おおおおお!!!!」

翔「あああつ!!!!」

頭の何かのメーターが振り切れた一夏と翔

一夏は白式を展開し、零落白夜を発動してアリーナのバリアへ叩きつける

翔はサンドロック改を展開し、背中にマウントされた湾曲した剣「ヒートショーター」で斬りつける

2人は同時に飛び出す。翔はセシリアと鈴の元へ。一夏が瞬時加速をしてラウラに突撃する

しかし、一夏のこの行為は半ば自殺行為である

「その手を離せええ!!!!」

ラウラへと一夏は刀を振り下ろすが、刃が届く寸前で止まる

ラ「ふん。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

一「くそっ！体が！」

目に見えない何かに捕らえられているかのように体が動かない一夏次第に零落白夜のエネルギー刃が小さくなっていく

ラ「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。消える！」

ぐるんと大型カノン砲が一夏へと向けられた

シャ「一夏！離れて！」

すぐさまシャルルがアサルトライフルで弾雨を浴びせる

拘束していた力が消えた一夏は、直ぐに2人を安全な場所へ避難させた翔の下へ向かった

シャ「一夏！翔君！2人は?!」

聞きながらもラウラへの攻撃を止めない

鈴「う……一夏……」

セ「無様な姿を……お見せしましたわね……」

翔「喋らないでください。直ぐに治療を」

一「シャルル、こっちは大丈夫だ。2人とも何とか意識がある」
シャ「よかった」

安堵した声で答えるシャルルだが、左腕をワイヤーブレードで捕らえられていた

マシンガンを打ち込むが、AICによって止められた

ラ「面白い。世代差と言うものを見せ付けてやるっ」

AICで防いでいたラウラはそう言つと腕に装備されたプラズマ手刀を展開した

ラ「行くぞ！」

シャ「くっ！」

ラウラがまさに飛び出して切りかかろうとした瞬間

ゴオオオオオオオオオツ！！！！

ラ「?!」

一同「「「?!」」」

突如飛来してきた攻撃を回避したラウラと驚く一同
全員がその方向を見ると

幻「・・・・・・・・」

頭部以外の装甲を展開し、左側の砲門を向けた幻一郎が佇んでいた

幻一郎 side

ラウラが口元をにやりと歪めた時、あの時のIS操縦者が重なった

・・・ザッ・・・

ワイヤーから解放され、倒れたセシリアと鈴の姿が死んだ妹達に重なった

・・・ザッ・・・ザッ・・・

俺は・・・また守れないのか？

ザアアアアアアアアアアア・・・

『システム起動』

『頭部以外の装甲を展開』

『OS起動

GUNNERY

UNITED

NUCLEAR -

DUETERION

ADVANCED

MANEUVER

—— SYSTEM』

『VPS展開』

『全装備オールグリーン』

『戦闘準備完了』

バリーイイインツ！

そして俺の中で何かが砕け、攻撃を開始した

突然の乱入に驚く一同、幻一郎はゆっくりとアリーナに進入した

ラ「誰かと思えば貴様か。だが貴様も私にとっては有象無象に過ぎん」

幻「……」

シャ「……幻くん？」

幻一郎の様子がおかしいことに気づいたシャルルは問いかけるが、返答はなかった

そして、幻一郎は閉じていた目をゆっくりと開けると、そこには何も写していないような目をしていた

鈴「っ?!」

セ「な、何ですのあれは？」

一「……ちよつとやばいかもな」

翔「お兄ちゃん……」

そして幻一郎は背中の中を翼を広げた瞬間、「その場に残像を残して」
ラウラの目の前に超高速移動した

ラ「な?!」

目の前に移動した幻一郎は左のパルマフィオキーナをラウラに照射
ラ「あああああつ!!!!」

ラウラはそのまま後ろに向かってバチバチと火花を上げながら吹っ
飛び、壁に激突した

女子「うそ?! 見えなかった!」

女子「しかも一撃でボーデヴィツヒさんを・・・」

観客はそのあまりの性能に騒然としていた
そして幻一郎は背中右側の大型対艦刀アロンドイトを構えた

一「ちよつと待て、それはやめる! 行くぞ翔!」

翔「分かってます!」

アロンドイトを構えた幻一郎は再び光の翼を広げ、ラウラに切りか
かった瞬間

ガキンツ!!!!

音とともに現れたのは打鉄の剣を持った千冬だった

千「やれやれ、これだから餓鬼の相手は疲れる」

ラ「きよ、教官?!」

ISの装備をISなしで扱うとは驚きだ

この人、人間?

千「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
ラ「教官がそう仰るなら」
幻「・・・了解」

2人とも素直に従い、ISを解除した

千「お前達もそれで良いな？」

一・翔・シャ「・・・は、はい！」「・・・」

そして千冬はアリーナ内の全ての生徒に向けて言った

千「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！

と千冬が手を叩き、その場をしめた

第十三話 運命の墮天使（後書き）

早く福音戦やりてえええ!!

道のりは長いな・・・

トーナメントの組み合わせで悩んでおります
考えているのは

一夏・翔のペア

一夏・幻一郎のペア

幻一郎・シャルルのペア

という感じです

ちなみにラウラ・箒は固定の予定

返答のほどよろしく願います

第十四話 昔の出来事（前書き）

出来た、やっと更新

感想・アドバイス・訂正などありましたら感想の方へお願いします

第十四話 昔の出来事

第3アリーナでの出来事から1時間経過した保健室

ベッドの上には治療を受けて包帯を巻かれた鈴とセシリアがむすむすとした顔であらぬ方向を向いていた

そしてセシリアの傍に翔が椅子に座り、一夏立っている。幻一郎はいない

鈴「別に助けなくてもよかつたのに」

セ「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

翔「いや、フルボッコだったじゃないですか」

鈴・セ「うっ」「」

一「でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心した」

鈴「こんなの怪我のうちに入らな・・・いたたたっ！」

セ「そもそもこうやって横になっていること自体無意味・・・うっうっ！」

翔「いいからじっとしててください」「ニコニコ（怒）

鈴・セ「はい・・・」

無理に動こうとした2人に翔が一喝、怒ると怖いからね翔

シャ「好きな人に格好悪いところを見られたから恥ずかしいんだよ」

と、そこへ飲み物を買って戻ってきたシャルルが2人に言った

一「????」

翔「//////」カアアツ

一夏は聞き取れなかったが翔はしっかり聞いたようだ

鈴とセシリアもすっかりと聞いていたようで

鈴「ななな何を言っているのか全然わっかんないわね！こここここれだからヨーロッパ人って困るのよね！！」

セ「べべべ別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわね！！」

そう顔を赤くさせながらまくし立てた2人。そして渡された飲み物を飲む

—「そもそも、何でラウラと戦うことになったんだ？」

鈴・セ「「ぶっっ！げほげほっ！」」

翔・シャ（本当に分かんないんだ・・・）（汗）

鈴「そ、それは・・・」

セ「ま、まあなんと言いますか・・・女のプライドを侮辱されたからですわね」

—「??????」

未だによくわからない一夏だった

シャ「そういえば、さっき戦闘の時の幻くんの様子がおかしかったんだけど・・・まるで宿敵を見るような目だったけど？」

鈴「っ！」

セ「そういえばそうですわね。なんだかいつもの穏やかな様子ではありませんでしたわ」

—「ああ・・・あれか」

翔「・・・」

その言葉に沈黙する一同、口を開いたのは鈴だった

鈴「・・・あの時と、一緒の目だった」

シャ「あの時？」

セ「いつですか？」

一「・・・中学の時だ」

シャ「何があったの？」

翔「・・・鈴さんが転校する1カ月前のことでした」

一「あの時は凄かったもんな・・・」

一夏side

あれは確か幻一郎達が来て少ししたころだった

翔「や、柳・・・翔・・・です。よ、よろしくお願ひします」

教室（中学時代のだからな）の黒板前で自己紹介する翔
何で居るかって？ 飛び級だよ、同じクラスだよ、翔頭良過ぎるんだよ

ちなみに当然と言えば当然だが、幻一郎は1個上の学年だ
しかし、翔大丈夫かね？ 結構人見知りするからなあ

女子達「~~~~~きゃ~~~~~!!!!!! かわいい~~~~~!!!!!!

！！！」「」

翔「っ？！」ビクッ！

女子「男の娘おおお！！！！」

男子「男かホントに？！」

男子「実際にいるんだな、おい」

女子「かぁいいい……かぁいいいよぉ……お持ち帰りい」ハアハア

……最後のは聞かなかったことにしよう……まあ、させないけどな、主に幻一郎とか幻一郎とか幻一郎とかが

先生「じゃあ、席は織斑の隣な」

翔「は、はい」

トテトテと俺の隣の席に来て座った

ー「大丈夫か？」

翔「う、うん」（涙目）

もう、涙目じゃねえかよ……ホントに大丈夫かね（汗）

その後はまあ、質問攻めにあったりして大変だった

休み時間には親友の五反田弾と幼馴染の鈴が来た

弾「へえ〜、こいつが言ってた兄弟の片割れか。五反田弾だ。よろしくな」

翔「は、はい。よろしくお願いします」

鈴「ホント女の子ね。鳳鈴音よ、よろしく」

翔「っ？！」

スササツつと俺の後ろに隠れる翔

鈴「ちょっと、何で逃げるのよ」

翔「うううう……」

—「ああ……何か知らないけど男はともかく千冬姉以外の女には近づこうともしないんだよ。むしろ離れていく」

弾「千冬さんに近づけるのもある意味凄いいけどな」（汗）

今はしょうがないけどな。まあ、いつかは治るだろう……多分
で、お昼時に幻一郎がやってきた

幻「よう、調子はどうだ翔」

翔「お兄ちゃん！」

そう翔が言った途端、女子達が騒がしくなった

女子「え?!翔君のお兄さん?!」

女子「かっこいい!」

女子「私もお兄様と呼びたい!!」

で、結局騒がしいまま終わった

そして、事件が起きたのはようやく鈴や他の女子たちとも何とか話せるようになったころだった

朝、翔が下駄箱（身長の関係で一番下）を開けると何とも可愛らしい手紙が入っていた

内容は

『放課後に体育館裏に来てください』

だった

これはあれか？

鈴「わあ、すごいわねあんた。その歳でもらうなんてね」

弾「ま、負けた・・・だがお前なら納得だな」

幻「すごいな翔」

と言つて幻一郎が自分の下駄箱（一番上）を開けると、バサバサバサつと大量の女物の手紙が・・・

鈴・弾「……………」

幻「……………」

翔「わあ、すごいですねお兄ちゃん」

……………ま、まあ、そんなこともあつたが時間は過ぎて放課後

翔は手紙に書いてあつた通り、体育館の裏へ

鈴「今頃どうしてるかしらね？」

弾「どうなんだろうな。人見知りな奴だからな」

「そうなんだよなあ」

幻「……………」

そんな中、なんでかずつと黙っている幻一郎

「……………どうした？そんな怖い顔をして」

幻「……………何だか嫌な感じがする」

鈴「なに？ 大事な弟が心配なわけね？ まったく兄弟揃ってブラ

コンねえ」

幻「……………ちよつと行つてくる」

弾「お、おい！」

突然出て行った幻一郎を追いかける俺と弾と鈴
そして目的地に近づくにつれて声が聞こえた
翔となぜかうちの男子生徒の声だった

翔「・・・や！・・・は・・・て！」

男子「・・・から！・・・くな！」

男子「おい！・・・せろ！」

弾「おい、今のって」

鈴「間違いなく翔ね」

幻「ちい！！」

—「おい、幻一郎！」

翔の声を聞いた幻一郎は速度を上げて向かう

おいおい、早すぎねえか?! 追いつけないんだだけど?!

そして見えなくなった

後100メートルほどで目的地なんだけど・・・

—「はあ・・・はあ・・・早ええ」

鈴「なんて・・・はあ・・・速さなのよ・・・はあ」

弾「ぜえ・・・ぜえ・・・まっただ」

体力が限界に達して膝に手を付いて息を整える
追いつけねえよ、おい

そして、息が整ったところで行くつとしたとき

男子「ぎゃあああああ！！！！」

男子「うわああああ！！！！」

男子の悲鳴が聞こえたと思ったら体育館裏から転げまわるように出てきた

男子「ひ、ひいいい！！な、なんなんだあいつは？！！！」

男子「に、にげるおおおおお！！」

—「な、なんだ？！」

鈴「なんかやばそうね！」

弾「急ぐぞ！」

近づいていくと更に数人が出てきた

そして、最後にゆっくりと歩いて出てきたのは幻一郎だった
だけど、その目はまるで何も写していないようだった

—「げ、幻一郎？」

鈴「ね、ねえ。ホントにあいつ？」

弾「ああ、間違いなく・・・な」

男子「こ、この野郎！！」

男子生徒が幻一郎に殴りかかったが

グシャツ！

と言う音とともに顔面にカウンターを決めた

男子「くっ！ おらあああ！！」

別の男子がまた殴りかかるが

ドゴンッ！

男子「うっおー！！」

今度は腹にヤクザ蹴りをした

見ただけでもかなりの威力があることが分かるくらいだ
ってそんなこと言ってる場合じゃない！

俺達は急いで体育館裏へ行く

ー「翔！大丈夫か！」

翔「ひつく・・・うぐっ・・・」

そこには制服がボロボロになった翔が泣いていた

そしてその周りには幻一郎にやられたのだろう男子たち倒れていた
翔に話を聞くと、ここで待っていたら男子達に襲われそうになって
必死に抵抗していたところに幻一郎が男子に向かってドリルキック
を放った後、数人を伸したところで俺が来た、と言うことだ

確かに最近の女尊男卑の影響でその・・・ホの人が増えたのもある
と思うけどな

弾「つまり、こいつらが偽物の手紙出したっつうことだな」

鈴「最低！　こんな子供に手を出すなんて！」

ー「確かにな」

とにかく、翔が無事なのを確認した俺は再び幻一郎の方を見る
どうやら最後の1人のようだ

男子「た、頼む！　ゆ、許してくれえ！」

幻「・・・」

幻一郎何も答えずに上に飛び、二段つま先蹴りを放った

男子「ぐああああああ!!」

見事に決まり、倒れた相手を放置してこっちに来た

幻「・・・翔、大丈夫か」

翔「ぐすつ・・・怖かったよお・・・」

そう言いながら翔は幻一郎に抱きついた

その後、手を出した男子たちは全治2ヶ月の怪我、翔は半月ほど学校に来なかったが、そのあとは欠席もなく通学した

幻一郎にはお咎めはなしだったが、この事件がきっかけで少し浮いた存在になった

シャ「・・・そんなことがあったんだ」

セ「同姓に手を出すなんて、不潔ですわ」

一「今はそんなことはないけどな」

翔「あの時は怖かったです・・・」

鈴「あたしはその1カ月後に転校しちゃったんだけどね」

一通りの話が終わりみんなでお茶を飲んでいた

セ「その後は何事もなかったんですの？」

翔「はい。僕に手を出したら鬼が現れるなんていわれてましたから」
シャ「それは・・・すごいね」

まあ、確かに鬼だわな

そんなこんなで話が終わって一息ついたとき

ドドドドドドドドドドツ！！

なにかが凄い勢いで近づいてくる音が

ー「な、なんだ？」

バーンツ！

扉が吹き飛んだ・・・っておい

で、入ってきたのは1年（リボンの色から）が大勢でやってきた

女子「織斑君！」

女子「デュノア君！」

女子「翔君！」

男子3人を見つけるなり取り囲んで手を伸ばす女子達
軽くホラーだよ

翔「ど、どうしたんですか皆さん？」

シャ「ちょ、ちよつと落ち着いて」

女子達「「これ！！！！」」

と言つて出してきたのは緊急告知文が書かれた申請書だった

「えーっと、なになに。『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、2人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは……』」

女子「とにかく！ 私と組もう、織斑君！！」

女子「私と組んでデユノア君！」

女子「私と一緒になつて翔君！」

困惑する一同

そんな中、翔が一言

翔「皆さんごめんなさい。僕達男子同士で組むので諦めてください」

と言つと

女子「まあ、そういうことなら」

女子「他の女子と組まれるよりはいいし……」

女子「男同士も絵になるし……ほんっほんっ」

あっさりと納得してくれたようでそろそろと保健室から出て行った
その後、鈴が一夏に、セシリアが翔に自分と組んでほしいと言うが、
真耶が現れて2人は参加できないと言うことを諭した
2人は納得していないようだったが、しぶしぶ引き下がった

おまけ

で、幻一郎はなにをしていたかと言つと・・・

ビューーンッ！

幻「・・・命中」

太陽炉搭載第3世代型で狙撃型のデユナメスを装備してターゲット
を撃ち抜いていた
ターゲットを見ると、全て真ん中を撃ち抜いていた
その後も次々と撃ち抜いていく
ちなみに距離はかなり遠い

幻「・・・」

幻一郎は何かを考えるようにまた一つ撃ち抜いていった

第十四話 昔の出来事（後書き）

次はようやくラウラ戦だ・・・頑張ろう

ラウラ戦組み合わせでのアンケートをとりたいと思います
組み合わせ候補は・・・

一夏・翔ペア

一夏・幻一郎ペア

幻一郎・シャルルペア

の三つです

ちなみに組み合わせでラウラが誰を自分の嫁にするかが決まります

一夏・翔ペア 翔が嫁

一夏・幻一郎ペア 一夏が嫁

幻一郎・シャルルペア 幻一郎が嫁

という感じになっています

これが良いと思うペアを感想に書いてください
感想の制限はしていません

たくさん感想お待ちしております

翔の黒歴史（前書き）

おまけです

翔の黒歴史

ある日の放課後の教室

鈴「そういえば中学のときの翔はあれだったわね」

唐突に言う鈴

一「そうだな・・・あれは・・・な」

幻「俺は本当にどうしようかと思ったぞ」

同意する一夏と幻一郎

シャ・セ「」？ 何の話？（ですの？）「」

中学のときのことを知らない2人

当然の反応である

翔「そ、それだけは・・・それだけはやめてください！！！！」

過剰に反応を示す翔

セ「なにがありましたの？」

鈴「それはね・・・」

翔「わ、わああああ！！わああああ！！」

必死にさえぎろうとする翔

一「実はな・・・」

翔「一夏兄さんもやめてえ!!」

幻「一時の間だったんだが・・・」

翔「お兄ちゃんもやめてえ!!! 僕の黒歴史!!!!!!」

翔の努力むなしく鈴の口から発せられた

鈴「弾のことがマジで好きだったのよ」

シャ・セ「……………」
「……………はい？」

翔「……………」OTL

—「あの時の翔は恋する乙女みたいだったな」

幻「俺は翔をどうにか修正しようと考えて一週間は眠れなかったぞ」
鈴「ただ、一方的な片思いだったけどね」

話についていけないシャルルとセシリア
特にセシリアには知ってほしくなかった翔であった

弾といえば中学のときの一夏と幻一郎の親友である、鈴ともよく行動をともにした人物である
だが、知つての通り、弾は「男」である

シャ「え？ それって……ホントの話？」

幻「マジの話だ」

セ「う、嘘ですわよね。そ、そう、わたくしの聞き間違いですわよね？」

—「残念ながら、事実だ」

翔「……………死んでいい？」（泣）

セシリアに知られた翔はかなりのショック

翔の秘密を知ったセシリアもショック

セ「ど、同姓が好きだったなんて、不潔ですわ……で、ですが今はそんなことはないですわよね?!」

翔「当たり前です!!!!!!」

鈴「兄貴が頑張ったもんね」

幻「頑張つて修正した」

シャ「そ、そうなんだ」(汗)

翔の大変な過去が判明した時だった

シャ「ところで何で好きになったの？」

鈴「町で絡まれてたところを助けてもらったからだったかしら」

翔「り〜〜んさ〜〜ん!!!もうやめてえ!!!」

鈴「その姿に胸がキュンキュンしちゃったと・・・」

翔「こんな大人たち、修正してやるうううう!!!!!!」

ま、まあ乙女な姿の翔だから仕方ないのか？

翔「月光蝶であああああああああああああああるっ!!!全
て消してやるうううううううう!!!!!!」

頑張れ翔

翔の黒歴史（後書き）

ただ書きたかっただけです
凄く短いですが（汗）

ラウラ戦組み合わせでのアンケートはまだまだ募集中
組み合わせ候補は・・・

一夏・翔ペア
一夏・幻一郎ペア
幻一郎・シャルルペア

の三つです

詳しくは前話参照です

よろしくお願いします

あけましておめでとございます

読んでくれている皆さん

応援してくれている皆さん

あけましておめでとございます

自分が小説を書き始めて早8ヶ月がたとうとしています

「IS 機械の翼」を書き始めたときはどうなるかと思いましたが、
何とか続けております

更新が不安定なのが読者の皆さんに申し訳ないと思っておりますが、
こればかりは進み具合によりますのでご了承ください

今後は種死でのエピソードなどを使ったストーリーも書くことと思っ
ております

今後ともよろしくお願いいたします

第十五話 学年別トーナメント・・・と、その後（前書き）

投票の結果学年別トーナメントは

一夏・幻一郎ペアに決定いたしました

投票して下さった皆さん、大変ありがとうございました

感想・アドバイス・誤字脱字等ありましたら感想の方へお願いいたします

第十五話 学年別トーナメント・・・と、その後

6月も終盤に入り、日差しが夏に向けて強くなってきた頃

現在IS学園では、学年別トーナメント一色へと染まっていた

その慌しさはすごく、全生徒が一回戦が始まる直前まで雑用やら会場の整理やらを行っていた

それからようやく解放された生徒達は急いで各アリーナの更衣室へと行く

ちなみに、男子組はたった4人でだっ広い更衣室を占領している

ー「しかし、すごいなこりゃ・・・」

幻「まあ、ISどころか国家の未来を担う将来有望な奴らの巣窟だからな、ここは」

翔「それにしても多くない？」

更衣室のモニターからは観客席の様子が見て取れる

各国の政府関係者や研究員、企業のエージェントなどなどの所謂お偉方の人たちなどが多数見える

シャ「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係はないと思うけど、それでもトーナメントの上位者には早速チェックが入ると思うよ」

ー「ほお、ご苦労なことだな」

幻「まっただ」

翔「いや、ここまで多いのは僕とお兄ちゃんの影響じゃない？」

そう、先生方の情報によると例年の3倍の人が来ているそうだし、そのせいで、先生方もてんでこ舞いだそうだし

シャ「でも、幻くんと組みたかったなあ」

幻「しょうがないだろ。ちよつとアイツに灸をすえてやらんと」

一「俺はあの時の例をしなくちゃな」

ここで分かると思うが、トーナメントでのペアは

一夏・幻一郎

シャルル・翔

である

なぜこのような組み合わせになったのかと言つと、数日前に遡る

数日前のこと・・・

夕食後、幻一郎とシャルルの部屋に一夏と翔が来てお茶を飲んで話をしていた

話と言つても、昔のことや世間話などである

幻「そういえばそんな事もあったなあ」

一「そうだな、あれは面白かったな」

シャ「そうだね。ふふふっ・・・」

翔「いや～～～！！やめて～～～！！」

ちなみにどんな話かと言つと、翔が「女物の服」を着ると性格が女性になってしまうことである（この場合少女と言つたほうがいいのか）翔が見た目女の子なので母さんが着せ替え人形のように色々「女の子の服」を着せていったら、着るのに「慣れて」「しまい、もともと持っていたものなのか着替えると性格が女性になってしまう」と言つことだ

シャ「だって、女の子の服だよ？ ふふふっ」

一「ゴスロリ服着たのを見たけど・・・ハッハッハッ」

幻「お陰で翔の衣類には女物があるのがいつの間にか当たり前になつていたよ・・・」

翔「もうやめて~~~~・・・」

そんな話をしながらわいわいしている4人

そんな中、唐突に一夏が一言

一「そういえば、シャルルはどうなんだ？」

シャ「ん？ なにが？」

穏やかに返すシャルルに一夏はこう続けた

一「いや、「女なんだから女物は着ないのか」と思って」

シャ「えっ?!」

翔「そういえばそうですね。何ですか？ 男装女子ってやつなんですか？」

シャ「な、なにを言っているのかな2人とも?!」

突然の話に驚くシャルル

一「ん？だって女だろシャルル」

翔「そうですね」

シャ「な、な?!」

シャ（幻くんならともかく、何で2人にまで?!）

突如として自分の正体がばれたシャルルは困惑する

幻「ほう、何で分かった？」
シャ「ちよつと幻くん?!」

幻一郎の肯定の言葉にも驚くシャルル
それを聞き流して2人は答える

—「ん〜、気配で」

翔「匂いで」

・・・
・・・なんと・・・他人には分かりづらい回答で・

て、言うか翔君あんた犬かい？

シャ「・・・凄く曖昧だね・・・そうなんだ、ばれちゃったんだ。
じゃあ、僕は・・・」

—「別にいいんじゃないか？」

シャ「え？」

翔「そうですね。そんなこと気にしないでいいですよ」

幻「だそうだ。お前はここにいろ」

シャ「みんな・・・ありがとう」

シャルルは感激のあまり泣き出してしまった

シャ「うつ・・・ひつく」

幻「ほら、泣くなシャル」

—「そうだぞ。幻一郎も傍にいることだしな？」

シャ「ひつく・・・ふえ？」

翔「そういう仲間なんでしょ？ 2人は」

シャ「え?!ええと・・・そのノノノ」カァァ

幻「・・・まあ、分かってたけどノノノ」

なんとまあ、2人の関係まで知っていた一夏と翔
これも、NTの力か？ いや、関係ないか

—「まあ、これからもよろしくなシャルル」

翔「よろしくです、シャルルさん」

シャ「うん……」

それぞれ仲良くなった証として握手をした

幻「さてと、話は変わるけど学年別トーナメントのときは俺と一夏のペアで行かせてくれ」

シャ「どうして？」

幻「灸を据えてやらないとな」

—「俺としては心強いけど……シャルルはいいのか？」

シャ「僕としては、組みたいんだけど……でも、幻くんがそう言うなら仕方ないよ。1度言ったら聞かないもん」

まあ、概ねそう言う感じで組み合わせが決まったのだった

戻って更衣室

幻「さて、こっちは準備できたぞ」

シャ「僕も大丈夫だよ」

—「俺もいいぞ」

翔「準備完了です」

4人とも自分のスーツに着替えて、最終チェックをした
丁度その時、モニターが切り替わった

シャ「あ、対戦相手が決まったみたい」

シャルルがそう言ったので他のメンバーもモニターを見る

シャ「え？」

ー「お？」

翔「わぁ」

幻「ほう」

そこに写し出されていた文字を見てそれぞれが声をあげた
一回戦の対戦相手はラウラ・篝のペアだったのだ

篝side

篝（なんとということだ・・・最悪だ）

よりによってラウラとのペアで一夏と戦うことになるうとは。しかも、一回戦から
確かにラウラは戦力としては十分だろうが、私とはまったくそりが
合わない

しかも、ラウラを見ていると昔の私を思い出す。憂さ晴らしの剣を

振るっていたあの頃に
それが私は嫌でたまらない

箒「いや、今は考えないでござい

そうしなければ、一夏とは戦えない

戻って試合開始直前のアリーナ

そこにはラウラ・箒ペアと一夏・幻一郎ペアが立っていた

一夏とラウラはそれぞれの専用機、箒は打鉄、幻一郎はセシリア戦
のときに使ったエクシアを装備している

ラ「一回戦であたるとはな。待つ手間が省けたと言うものだ」

一「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始5秒前・・・4・・・3・・・

一「頼むな、幻一郎」

幻「ああ、まかせろ」

2・・・1・・・

ー「ラ」「叩きのめす!!!」「」

試合開始のブザーが鳴る

それと同時に一夏が瞬時加速を行い、ラウラへ攻撃を仕掛ける

ー「おおおおおっ!!!」「」

ラ「ふん・・・」

ラウラが右手を突き出す

すると、見えないバリアが発生し、一夏の動きを止めた

ラウラお得意のAICである

ラ「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」

ー「そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

ラ「ならば私が次にどうするかもわかるだろう?」

そう言うと ガキンっ!と言う音とともに大型カノン砲が一夏に向けられる

ー「っ!」「」

ロックオンされまさに撃とうとした時、上空から幻一郎が右手のGNソードを体を横にして回転しながら降下して振り下ろす

ラ「くっ！」

溜らずラウラはそれをAICを解除して回避する
すかさず幻一郎は横なぎに剣を振るも、ラウラは後方へ退避して回
避する

幻「逃がさん！」

幻一郎はすぐに追撃しながらGNソードを折りたたみ、ライフルに
して連射する

来賓「ビーム兵器だと?!」

来賓「それに全身装甲でありながらあの機動性！」

他に類を見ない全身装甲とビーム兵器にざわざわとざわめきだつ観
客席

が、そんなの関係ないという感じで戦闘が続く

一「おおおっ！」

箒「私を忘れてもらっては困る！」

AICから解放された一夏がラウラに追撃しようとするが、箒によ
つて阻まれる

2人は一合、二合と次々に切り結ぶ
だが、決着は予想よりも早くついた

一「隙あり！」

箒「しまったっ！」

箒の僅かな隙を突き、一夏が連続で斬撃を繰り出しエネルギーをゼ

口にした

篤「くつ、ここまでか・・・」

一「悪いな篤」

一方ラウラと幻一郎の方でも互いに斬り合っていた

ラウラは両腕のプラズマ手刀で、幻一郎はGNロング・ショートブレイドを巧みに使い応戦している

ラ「やるな！」

幻「お前もな！」

鏝迫り合いに差し掛かったところで、一夏が横から攻撃を仕掛けるが、それは回避される

一「待たせたな幻一郎」

幻「篤はどうした？」

一「そこで休んでる」

幻「そうか。なら、あとはこいつだけだな」

一「援護頼むぜ」

幻「まかせろ」

一夏を前にして2人はラウラに攻勢をかける

ラ「ふん。1人減ったところで私の勝利に揺らぎはない。かかって来い」

一「そうかい、じゃあ遠慮なく、こいつで行かせて貰う！」

一夏は白式の零落白夜を発動して突撃する

—「うおおおお!!」

ラ「無駄なことを・・・ふっ!」

ラウラはAICを使い一夏の突撃を止め、大型カノンを一夏に向ける

—「忘れているのか？」

ラ「なに？」

—「俺達は2人なんだぜ？」

直後、一夏の後ろから幻一郎が本来は装備に入っていないリニアライフル（オーバーフラッグが使ってたもの）を左手に出現させてソードライフル・ライフルモードと併用して攻撃、大型カノンを破壊する

ラ「くっ!」

幻「どンドン行くぞ」

退避するラウラに更に攻撃を加え、反撃の隙を与えない幻一郎
そこへ、一夏が零落白夜で攻撃を仕掛ける

—「うおおおらあああ!!」

ラ「しまった!」

まさに攻撃があたろうとした時

シューーーンッ・・・

—「あ・・・しまった・・・」

なんと零落白夜の効果が切れてしまい、更に雪片も通常の状態に戻ってしまった

ラ「限界までシールドエネルギーを消費しては、もう戦えまい！」
ー「ちい！」

反撃するラウラの攻撃に一夏は回避しながら大きく後退する。それを追撃するラウラ

ラ「がつ！」
幻「まだ終わってねえぞ！」

追撃するラウラに幻一郎が攻撃する
リニアライフルを投げ捨て、左腕のGNバルカンで攻撃しながら接近戦を仕掛ける

ラ「くっ！　だが、私の停止結界の前ではむりよ……」

ドンッ！！

ラ「がつ?!」

AICを発動しようとしたラウラの背後からの攻撃
そこには、先ほど幻一郎が投げ捨てたりニアライフルを構えた一夏の姿が

セ「あれは!」

鈴「幻一郎のライフル！」

ラ「この・・・死に損ないがああ！！！」

一夏にワイヤーブレードで攻撃するラウラ

一「なんの！」

それを雪片で防ぎながら回避する一夏
ラウラは追撃しようとするが

幻「どこを見ている」

ラ「なっ?!」

ラウラの目の前に幻一郎が迫る

幻「ここは・・・俺の距離だ！！！」

GNソードを展開し、横一線に振りぬき両肩のアンロック・ユニットを破壊

さらに、ビームサーベルで斬りつける

ラ「があっ!!」

そのまま後ろに吹っ飛び、アリーナの壁に衝突する

一「やった！」

観客席からも歓声があがる

幻「おおおおおっ!!!!」

幻一郎が止めを刺そうとしたときラウラに異変が

ラ「ぐうう・・・があああああっ！！！！！！」

ー「な、なんだ?！」

幻「これは?！」

ラウラ s i d e

ラ（私は・・・負けられない・・・負ける訳には行かない！！！！！！）

私はただ、戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた
私は優秀だった。最高レベルを維持し続けた

しかしそれは、ISの出現までだった

直ぐに私にも適合性向上のため肉眼へのナノマシン移植が施された
だが、私の体は適応しきれず、出来損ないの烙印を押された
そんな時、教官に出会った

彼女は優秀な教官だった

私はIS専門となった部隊で再び最強の座に君臨した

私はあるとき教官に尋ねた

ラ」どうしてそこまで強いのですか。どうすればつよくなれますか？」

その質問に教官はとても穏やかな顔で答えた

千「私には弟がいる」

ちがう・・・何故そのような笑顔をされるのか

私の憧れる教官は、強く、凛々しく、堂々としているのに・・・

だから許せない・・・教官をそんな風に変える男を・・・認めない

力が・・・欲しい・・・

『願うか？ 汝、より強い力を欲するか？』

寄越せ力を・・・

比類なき最強を！！！！！！！

ラ「ぐうううああああっ！！！！」

突如起こった異変に会場全体が騒然とする

ラ「ぐっ、ああああっ！！！！！！」

その間に、ラウラの機体に変化する
粘土のように形をグネグネと変化させ始めたのだ

一「なんだ？！ 一体なにが？！！」

幻「これは・・・ラウラ・・・」

機体に完全にラウラは飲み込まれ、形状が人の形を成してきた

一「なんだよ・・・あれは」

ウウウーーーーーッ!!!! ウウウーーーーーッ!!!!

『非常事態発令、トーナメントの全試合は中止。状況をレベルDと認定。鎮圧のため、教師部隊を送り込む。来賓・生徒は直ちに避難すること』

キャーーーーー!!!! ワーーーーッ!!

観客の悲鳴と共に、隔壁が閉じられる

その間にも、機体は変形を続ける

そして、出てきたものは嘗て千冬が使っていた雪片だった

一「雪片・・・千冬姉と同じじゃないか」

そして完全に変形した姿（以後人型）は、まさに人の姿だった

一「・・・俺がやる」

幻「一夏？ わかった」

一夏が剣を構える。すると、人型が一夏の方に向き構える

次の瞬間、切りかかってきた

一夏は凌ぎながらその動きを見て驚いていた

一「この剣技、俺が千冬姉に最初に習った真剣の技だ！」

一「くっ！このっ！！」

幻「一夏！！！！」

一夏が押され始めたとき、幻一郎が人型を蹴り飛ばす

幻「どうした一夏！ 何を戸惑っている！」

そのまま幻一郎はGNソードを構え、人型と戦闘を開始する

一「あの野郎・・・絶対許さねえ！！」

一夏が再び人型を攻めようとしたとき、箒が捕まえて止める

箒「何をしている！死ぬ気か！」

一「離せ箒！あの野郎ふざけやがって！」

箒「何だと言うのだ！分かるように説明しろ！！」

一「・・・あれは千冬姉の動きだ。あれは千冬姉だけのものだ！

それだけじゃない。わけのわからない力に振り回されてるラウラも
気にいらねえ」

箒「理由は分かったが、今のお前に何ができる？ 白式のエネルギー

も碌に残ってない状況で」

一「後一回くらいは零落白夜は使える」

次第に教師部隊が集まってきた

箒「だが、お前がやらなくても事態は收拾される」

一「ここで引いたら俺じゃない」

その時、幻一郎が吹っ飛んできた

幻「がああっ！」

—「幻一郎！」

幻「くっ！」

素早く体勢を立て直し、後腰のGNダガーを投合するが、両方とも弾かれる

直後にGNソードで切りかかる

幻「はああっ！」

何合か斬りあつたが幻一郎のGNソードが弾き飛ばされる
直ぐに腰のGNロング・ショートブレイドを構える

第「奴は、一体何本の剣を持っているんだ」

そんな言葉は気にせず再び戦闘を開始するが徐々に幻一郎が押され始めた

幻「くっ！ さすがは千冬さんのデータを使ってるだけあるな！」

そう言いながら攻勢をかけるが、やはり世界最強の力だけあつてかブレイドも弾かれる

そして、人型が止めを刺そう剣を振りかぶった

幻「くそっ！」

—「幻一郎！」

第「逃げる！」

だが、回避も防御も間に合わない状態だった

人型が剣を振りぬく瞬間、エクシアが赤く光り、剣で振りぬいた場所には既に幻一郎はいなかった

箒「何?! 奴は一体どこに!」

一「・・・あれを使ったのか幻一郎」

すると次の瞬間、人型の左腕が斬られて吹き飛んだ

箒「な?! 何だ?! 何が起こっている?!」

一「幻一郎だよ」

箒「何だと?!」

そんな仲でも人型に見えない速度で右に左にと攻撃を加えていくそして、下から上、上から下への攻撃があつたあと、上空に赤く光り輝くエクシアがビームサーベルを構えて佇んでいた
その姿はまさしく天使のようだ

幻「今だ一夏!」

一「おう!!」

幻一郎の攻撃でボロボロになった人型に一夏は零落白夜を再度発動し、仕掛ける

一「うおおおお!!!!はあああああ!!!!!!!!」

ズバンツ!!

そのまま袈裟切りした

すると、切り口からラウラが出てきてISは機能を停止した
出てきたラウラを一夏は抱きとめる

「ま、殴るのは勘弁してやるよ」

ラウラ s i d e

お前は何故強くあろうとする？

どうして強い？

「強くねえよ。俺はまったく強くない」

あれほどのまでの力を持ってなお、強くないと言っのか・・・それが理解できない

「けれど、もし俺が強いつて言うならそれは・・・」

それは？

—「強くなりたいから、強いのを」

・・・

—「それに信じているのを」

信じる？何をだ？

—「自分を、そして、自分の中にある可能性、成すべきと思ったこととな」

可能性・・・だと

—「ああ。人間だけが持つ、可能性と言う名の内なる神をな」

人が内に持つ神・・・

「そして、俺は誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために……」

それはまるで……あの人のようだ

「そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ」

そう言われて私の胸は衝動に強く揺さぶられた

私はその言葉に

ときめいてしまったのだ

なるほど。教官の言っていた通り、惚れてしまいそうだな

ラ「う……あ……」

先ほどの騒動があつた後の保健室

ラウラは天井からの光を感じて目を覚ました

ラ「私は……一体何があつたのですか？」

ラウラは傍に千冬がいるのを確認して、尋ねた

千「……一応、重要案件である上に機密事項なのだが……V
Tシステムは知っているな？」

ラ「ヴァルキリー・トレース・システム!？」

千「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・
開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積みま
れた。巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダ
メージ、そして何より操縦者の意思……いや、願望か。それらが
揃うと発動するようになっていたらしい」

ラ「私が……望んだからですね」

千「ラウラ・ボーデヴィツヒ!」

ラ「は、はい!」

千「お前は誰だ?」

ラ「わ、私は・・・」

千「誰でもないのならちようどいい。お前はこれからラウラ・ボー
デヴィツヒになるがいい、何、時間は山のようにあるぞ。何せ3年
間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も死ぬまで
時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

ラ「え・・・あ・・・」

千冬の意外な励ましの言葉に、ただポカンと口を開けたラウラ
そのまま千冬は席を立ち、仕事に戻ろうしたとき

千「ああそれから。お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こう
見えて心労が絶えないのさ」

ニヤリと笑って千冬は部屋を後にした

ラ「ふ、ふふっ・・・はははっ」

姉弟そろって言いたいことだけ言って逃げた上に、自分で考えろと
言う

そのことがおかしくて笑いが止まらなかった

事故後の食堂

男子組4人が食事を取っていた

ちなみに、一夏は海鮮塩ラーメン（大盛り）、シャルルはカルボナーラ（ちよい少なめ）、幻一郎はざる蕎麦（6人前）、翔はナポリタン（山盛り）となっている
全員麺類である

シャ「結局、トーナメントは中止だった。ただ、個人データは取りたいから一回戦は全部やるそうだよ」

一「ふん」

幻「ま、妥当だな」

翔「あむあむ」モグモグ

一夏と幻一郎の2人は先ほどまで事件の事情聴取を受けていて、シャルルと翔は2人を待っていたので、実は食堂終了ギリギリなのである

最初入ったときに多数の女子が待ち受けていたのだが夕食優先にしたのだ

のだが、何故だかさっきまで食事が終わるのを心待ちにしていた女子一同はひどく落胆していた

女子「優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

女子「交際・・・無効・・・」

女子「うわああああああんっ！！」

と、泣きながら数十名が走り去っていった

シャ「どうしたんだらうね？」

一「さあ？」

幻「分かん」

ああ……あれだろうね
翔(汗)

1人だけ何故か分かる翔君であつた

と、そこで一夏が1人呆然と立ち尽くしている幼馴染の箒を見つけた
一夏は箒の傍へと移動する

一「そういえば箒。先月の約束だが……」

箒「っ?!」

一「付き合ってもいいぞ」

箒「……何？」

一「だから、付き合ってもいいって……」

箒「ほ、本当か?! 本当に、本当なんだな?!」

一「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合つさ」

箒「そ、そうか!」

一「買い物くらい」

箒「……」

ピキッ!

と言う音と共に箒の額に青筋が……

箒「そんなことだらうと思つたわ!!!」

腰の入った見事な正拳が一夏に迫る!

一「おっと?!」

パシッつと正拳を受け止めた後、グルンッつと背負い投げを

箒「わあ?!」

一（あ、しまった条件反射で）

したのだが、一夏は箒をやさしく床につけた
だが、体勢が一夏が箒を押し倒したような感じになってしまった
一夏がマウントポジションを取った形になった

一「すまん箒。大丈夫か？」

箒「な?!な?!なな?!?!?!」

下に組み伏せられた箒の顔がトマト並み、いやそれ以上に真っ赤に
なつて

箒「わああああああああああああ??!?!?!?!」

キーン……

一「くえrちゆいおpZさvfrbgjvが??!?!?!?!」

・・・・え、何が起きたかと言つと、箒が膝を思いつきり上に上げたときに一夏の　に直撃
直撃を受けた一夏があまりの痛みに転げまわっている間に箒は恥ずかしさのあまり逃走したのである

以上、報告終わり

—「おおおおおおおおおおお……」
幻・翔「……………」(汗)
シャ「????」

その様子を見ていた幻一郎と翔は自分の　　を庇うように隠す
シャルルは何故そこまで痛がるのかを分かっていないようだ

……女性には分からのだよ、女性には……

そんな時、我等が副担任真耶がやってきた

真「あ、皆さんここいましたか。さっきはお疲れ様でした……つて、織斑君はどうしたんですか？」

幻・翔「何も聞かないください」「」

真「え、いや、あの……」

幻・翔「聞・か・な・い・で・く・だ・さ・い」「」

真「わ、分かりました。そ、それよりも！ 皆さんに朗報です！！」

真耶は気を取り直して話を進める

真「なんとですね！ ついに今日から男子の大浴場使用が解禁です！！！！」

幻・翔「……………」マジですか！！！！」「」

—夏復活(まだ　　を押さえているが)

真「は、はい！ ですから皆さんは早速お風呂にどうぞ。今日の疲れもスッキリですよ！」

一「はい！じゃあ早速……あ」

ここで問題発生。シャルルは女である

男女が一緒に風呂に入るなんぞ非常にまずいことである
しかし、シャルルは現在男子として通している

翔「え〜つと……」

真「どうしたんですか？ ほらほら、皆さん早く着替えを取りに行つて下さい。大浴場の鍵は私が持ってますから、脱衣所の前で待ってますね」

幻「あの、山田先生」

真「はい？ 何でしょう？」

口早に急かす真耶に幻一郎が言う

幻「俺とシャルは機体の調整をしたいのでちょっと遅れますが、大丈夫ですか？」

真「え?! そうなんですか?! うん、分かりました。でも、なるべく早めに来て下さいね？」

幻「了解」

真「じゃあ、脱衣所前で待ってますね」

そう言つて真耶はすたすたと歩いて行つた
で、残つた4人は……

一「さて、んじゃ行くか」

翔「そうですね。先に入っちゃいますね」

幻「おう、行って来い」

一夏と翔は着替えを取りにそれぞれの部屋に戻った

幻「・・・さて、どうするか」

シャ「うん、困ったね。と、とりあえず整備室に行こうか？」

幻「そうだな」

幻一郎 side

と言っわけで整備室へ到着（ちなみにシャルはちょっとトイレに行っている）

するとそこには先客がいた

セミロングの髪で癖毛が内側に向いていてメガネをかけている

何かどっかで見たとような気がするんだが・・・

その時、見られていることに気づいたのかその子がこっちを見た

？「あの、な、なにか？」

こっちに顔を向けて聞いてきた

ああ、そつだ思い出した

幻「更識・・・簪さん、だったかな？ 4組の代表候補生の？」
？「・・・そう、だけど」

幻「やっぱり姉妹だけあつて、似ているな。お姉さんと」
簪「ね、姉さんは、関係ないです」

おや？ お姉さんを嫌つておいでの様だ
ん？ 後に映つているのは・・・ISのデータか？

え〜つと・・・打鉄式か。確か、一夏の白式のせいで開発が遅れてたんだつたな

お？ 面白いもんみつけ

幻「マルチロックオン・システムか・・・」

簪「?! み、見ないでください」

幻「悪い悪い。けど、まだ完成してないんだな」

簪「1人で・・・やつてるから」

1人でか、確か、姉の方も1人で機体を組み上げたつて聞いたな
でも、最初から1人でやつたわけじゃないんだけどな、多分
さて、んじゃあ、ちよつとだけ手助けをするか

俺はフリーダムとヘビーアームズカスタムのデータをメモリにイン
ストールした

幻「はい、これ」

簪「なに？ これ？」

幻「俺の機体で使つてるマルチロックオン・システムと誘導ミサイルのデータと実際に使つてるところの映像データだよ」

簪「な?! な、なんで・・・」

幻「・・・もう少し人に頼れ」

そう言って俺は簪の手にメモリを握らせて、自分の機体の整備（と言っても簡単なものだけだな）を準備する

シャル「ごめん幻くん。待った？」

お？ シャルも来たようだしはじめようか

・・・その前に・・・・・・お風呂・・・どっしりようか・・・

簪 side

私は、さっき柳くんから無理やり渡されたデータを見てみた

簪「凄い・・・」

本当に、凄いとしか言えなかった

マルチロツクオン・システムの完成度がすごく高い
いや、機体にインストールしてそのまま直ぐ実戦で使用できるレベ
ルだった

ミサイルも、私の48発に対して彼のは80近い数を使用すると言
うものだった

簪「でも、何でこんなものを・・・」

私は、これを渡された意味が分からなかった
でも、最後に言った彼の言葉を思い出した

簪「人を・・・頼れ・・・」

頼っても・・・良いのかな・・・

で、ついにやってきました。幻一郎・シャルルの入浴時間が・・・

真「あ、来ましたね。織斑君と翔君は既に入浴を済ませてしまいましたから、実質2人だけです。では、ごゆっくり」

そう言っつて真耶は行ってしまった

脱衣所では2人が立ち尽くしていた

幻「さて・・・どうするか」

シャ「ど、どうしようか」

非常に、非常に困っている2人

幻「はあ、俺はシャワーで我慢するか」

シャ「え？ でも幻くんも入りたいでしょ？」

幻「そうだが・・・男女一緒はさすがにまずいだろ？」

シャ「ぼ、僕は・・・一緒に・・・良いなあ？」

とシャルルが幻一郎を上目遣いに見つめて言う

幻「うつ・・・分かったよ」

シャ「じゃ、じゃあ・・・先に入っつて」

幻「分かった・・・」

お互いにロッカーを間に挟んで服を脱ぐ

で、IN THE 風呂

幻「はあ~~~~~」

・・・やっぱこれだな・・・」

髪と体を速攻で洗い終え、湯船に浸かる幻一郎。なんとも親父くさいと、そこへシャルルが入ってきた

シャ「お、お邪魔します・・・」

幻「お、おう」

シャルルの言葉に振り向かずに答える幻一郎

そして、シャルルはゆっくりと湯船に入り、幻一郎と背中合わせに座る

シャ「ふう〜・・・気持ちいいね」

幻「そうだな・・・」

シャ「・・・」

幻「・・・」

途端に2人とも黙ってしまった
やはり気恥ずかしいのだろう

シャ「ね、ねえ、幻くん」

幻「・・・なんだ？」

シャ「その、前に言ってた事なんだけど」

幻「学園に残るって話か？」

シャ「そう。僕ね、ここにいようと思うんだ」

幻「・・・そうか」

シャ「幻くんのお陰なんだよ？ 僕がここだって思える居場所を見つけたのは」

幻「へえ・・・どこなんだ？」

シャ「・・・それはね・・・」

シャルルはゆっくりと幻一郎を後から抱きしめる

幻「な?! シャ、シャル?」

突然のことにビックリする幻一郎

シャ「幻くんが・・・幻くんの隣が、私の居場所だよ」

幻「・・・そうか。ところでだなシャル」

シャ「うん、何?」

幻「背中にかなり大きい目のやわらかい2つの物が当たっているのだが?」

シャ「・・・」

ムギユツ

さらに強くなった

シャ「あ、当ててるんだよ//////////」

幻「そうか・・・なら」

グルンツと幻一郎はシャルルの方へ向き直した

シャ「え、げ、幻くつんむつ?!」

幻「ん」

シャ「ん! ちゅつ・・・ちゆる」

幻「ちゅ・・・ん」

シャ「んん! ぷはっ! げ、幻くん?」

幻「男にそんなことをしたら、どうなるかは分かっているだろう?」

シャ「え、あ//////////」

シャルルもといシャルロットは幻一郎の激しく自己主張している物
を見て真っ赤になった

シャ「い、いいよ／＼／＼ 優しく・・・してね？／＼／＼」
幻「分かった・・・」

そして

二人の影が

重なった

おまけ・幻一郎とシャルロットのその後

チ~~~~~ン…………

幻「あああ……………」
「シュ」
シャ「ううう……………」
「プシュ」

え……………見事に茹で上がっております

シャ「激しすぎだよ……………」
「幻くん……………」
幻「……………すまん……………」

まあ、ナニをしていたのかはご想像にお任せします

おまけ2・一夏と翔の入浴時

一「「ようし、髪洗ってやるよ翔」

翔「はあ〜い」

ワシワシ　ワシワシ

一「「ちゃんと目瞑ってるよ?」

翔「うう〜、その前に、もう少し丁寧にやってくださいい〜」

非常に和気藹々としていました

第十五話 学年別トーナメント・・・と、その後（後書き）

あけましておめでとございます

年明け最初の投稿になります

本当は年明け前に更新する予定だったんですが、思ったよりも時間がかかってしまいました

ちなみに、エクシアの最初の攻撃は、ファーストシーズンの最初のオープニングで描かれていたものです

（エクシアが回転しながらGNソードを振り下ろすところです）

今後ともよろしくお願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9920s/>

IS 機械の翼

2012年1月1日01時48分発行